

書き下ろし文芸マガジン

NONSTOP

vol.1 はじまり

☆「クローバー」

入江棗

☆「響け、私たちの歌声」

広野未沙

☆「Dear My Life」

貴水玲

☆「平行線シンドローム」

水島朱音

☆「やろうぜ！」

土本強

☆「あたりまえのこと。」

水面浮月

☆「From・N」

番棚葵

☆「ターニング・ポイント」

諸星崇

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「NONSTOP」の第一号をここにお届けする。

本マガジンは二つの全体的なテーマを設定している。ひとつは、北陸地方の海沿いをイメージした架空の地方都市「N市」を共通の舞台としたシェアードワールドノベルズであること。そしてもうひとつは、「青春」をテーマとすることだ。

これに加えて、毎号の統一テーマも設定した。こちら表と裏の二つがあり、表としてはキーワードを用意した。第一号の今回は「はじまり」である。一方、裏としては季節をテーマとさせていただいた。今回は「春」だ。こちらのテーマは毎号ごとに進んでゆき、最終号ではもう一度春がやってくることになっている。そのとき、それぞれの物語がどんな結末を迎えることになる——それはぜひ、ご自身の目で確かめてほしい。

このような事情から、先行する弊社事務所発行の電子マガジン「signal」掲載の諸作品と比べ、本マガジンに掲載している作品は続き物としての性質が強めになっている。それでもなるべくどこから読んでも楽しめるようにはなっているが、できれば第一号から読みすすめていただければ幸いである。

本マガジンには、私、榎本秋と関係ある作家および作家の卵たち、計八名が参加している。さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を収録するという試みもさせていただいている。

本誌から新たな人気作家、イラストレーターが巣立って行くことを願ってやまない。それでは、楽しんでいただけると幸いです。感想やご意見など、コメント機能などご利用の上でいただくと大変うれしい。

榎本秋

目次

はじめに	2	やろうぜ！	79
目次	3	イラスト	135
口絵	4	From・N	115
イラスト		イラスト	
橘ぽん		響け、私たちの歌声	149
新月竜		イラスト	
伊藤由希		平行線シンдрーム	181
(掲載順)		イラスト	
舞台設定	7	あたりまえのこと。	203
		イラスト	
へタイトルクリックで該当のページに飛びます		ターニング・ポイント	239
クローバー	9	イラスト	
イラスト		諸星崇	
入江棗		橘ぽん	
伊藤由希			
Dear My Life	45	解説	223
イラスト			
貴水玲			
ヒトエ			



Illustration: 橘ぽん





Illustration: 伊藤由希

舞台設定

舞台：N市

☆海に面した盆地上の小都市

○海→山でいきなり切り立っており、海に面していない周りは山で囲まれている

☆高速道路開通の賛成・反対でもめている

○大きな都市（県庁所在地）と都市を繋げるための道路で、市の活性化を見込んでいる

☆市内に男子校（昇星学院）、女子校（優華女学院）、共学がそれぞれ存在する

☆駅前大きめのショッピングモールができたばかり

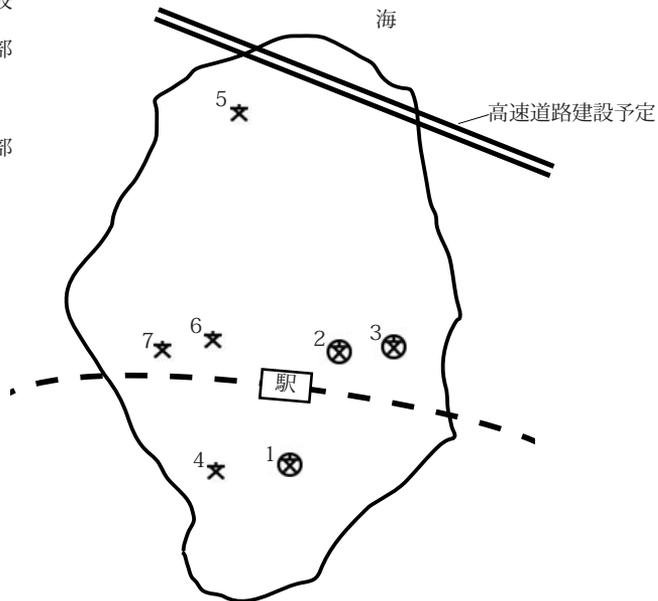
☆地主＝旧家がある

○「塚本家」という地主が存在する

○本家・分家があり市内に家が散らばっている

○高速道路問題では一族で採めている

- 1 → 市立中央高等学校
- 2 → 昇星学院高等部
- 3 → 優華女学院高等部
- 4 → 市立第一中学校
- 5 → 市立第二中学校
- 6 → 昇星学院中等部
- 7 → 優華女学院中等部



NONSTOP



クローバー

入江棗

Illustration: 伊藤由希

佐々口孝士



中学三年生。千伽の幼馴染。千伽のことをよく気にかける。

高橋千伽



中学三年生。本屋の娘。本が好きで大人しい性格。

塚本楓



中学三年生。地主の分家の次男。一匹狼で少しわがまま。

第一話 春の雨

テレビに映る東京ではもう桜が咲いたらしい。同じ日本だというのにこの辺りは少し前まで雪が降っていた。自分の目で桜を見られるのはまだ先の話だ。

それでも今日の季節は春。

中学の制服を着るのもあと一年弱になった。

「千伽、俺ら同じクラス。一組」

クラス替えのボードに群がる同級生達を眺めていたら、背後から声をかけられた。

「孝士。そうなの？」

振り返ると私より頭一つ分くらい背の高い学ランの男子が立っていた。かれこれ十四年の付き合いになる幼馴染。

「昨日部活の帰りにボード設置するの手伝わされてさ。おかげで優雅に自分が何組か確認できたけど」

「同じクラスになるの久し振りだね。小六以来？」

「おう」

たった二クラスしかない学校なのに二年連続で同じクラスじゃなかった。今年も同じじゃなかったら先生達になにか考えでもあるんじゃないかと疑ってしまうところだった。

ボードの前にはまだ同級生がたくさん居た。一組か二組のどちらかなんだからすぐに確認できるのに。女子なんかはその場でまだ来ていない友達を待っている様子だった。

「今日寒いな。教室入ろうぜ」

同級生たちを横目に孝士は校舎へ入ろうとした。私もそれに続く。

が、ボード前が急にざわつきだしたので足が止まった。

群集と化していた同級生たちがボードの両端に寄っていく。空いた中心には一人だけが立っていた。

「塚本ん家のお坊ちゃんか。あいつも同じクラスだよ」

孝士が吐き捨てるように呟いた。

塚本楓。

ここ、N市の地主として権力を持つ塚本家の中でも、本家に次いで力のある分家の次男。そんな人がなんで市街地にある男子校か公立校に行かないでこんな辺鄙な中学に居るのは、同級生達の間では一回は話題にのぼる疑問だ。家がこの辺りにあるといっても塚本家の力なら中学校くらい自由に選べる。

塚本くんは周りを気にせず中心に堂々と立っていた。天然らしい色素の薄い髪は学ランにあまり合わない。そもそも、まどついている空気がこの場所にそぐわない気がした。

一年の時同じクラスだったけど、一回も話をしたことがなかったと思う。多分それは私

だけじゃない。塚本くんは誰とも仲良くしていないようだった。

塚本くんは自分がどちらのクラスか確認できたようで、すぐにその場から離れた。校舎に入るらしく、私と孝士の居る方へ向かって来る。

すれ違う瞬間、目があつた気がするけど気のせいかもしれない。機嫌の悪そうな顔をしながら校舎に入って行った。

「千伽」

少し先に居た孝士に呼ばれ、私達も校舎に入る。

風が強くて髪がいたる方向になびいた。

家が本屋なのでできれば地主とは円満な関係でいたい。だから私の場合、できるだけ関わらないという方法で円満な関係を持続させてきていた。触らぬ神に祟りなしてやつだ。

けれど、今回ばかりはそうもいかないらしい。

一学期初日だというのに、席はくじ引きで決まった。ほぼ全員と顔見知りだから今更覚える必要がないからだけど、初めくらいは世の中の慣習に則って出席順にして欲しかった。

「後ろで目が見えないってやつは居ないかー。居ないならこの席で決定なー」

担任のこの一言で席が確定する。窓際の後ろから二番目。かなりいい席だと思う。

隣の席が塚本くんじゃなければ。

無意識に身体が縮こまってしまう。「よろしく」の一言でも言った方がいいのかもしれない

ない。けど緊張で声がうまく出そうにない。目線だけ横にずらして塚本くんを見た。椅子にかなり浅く座っていてあまり行儀がよくない。不機嫌そうに口をへの字に曲げている。緊張していなくても声なんてかけられそうになかった。

今日は始業式と担任からの簡単な話だけだったのでお昼前に解放された。ホームルームが終わった瞬間席を立ててその場から離れる。肩に力が入っていたのか酷く疲れていた。小学校から何回も同じクラスになっていてよく話す友達と少しおしゃべりをして教室を出ると、孝士に呼び止められた。

「お前くじ運ないな」

「あんまり大きな声で言わないで」

こんな話を聞かれたら大変なことになる。

「あいつならとつくに帰ってるって。それよか頼んでた本来てる？」

教室の中を確認すると、塚本くんの席には誰も座っていなかった。安心したところで孝士からの質問の答えを探す。

「お母さんが今日って言ってたから多分来てる。部活の帰りにでも寄ってよ」
「分かった」

孝士とも別れて学校を出た。朝は晴れていたのに、今は少し曇っている。雨、降らない

といけれど。

店も家もろくになく、きちんと舗装されていない道を歩いた。家まで随分な距離があるので普段は自転車登校だけど、今日は歩きたい気分だったから徒歩通学。小学生のころは毎日が徒歩だったので数キロくらいなら苦でもなんでもない。

家と店の代わりに広がっている畑で、ぼつぼつと作業をしているおじいさんやおばあさんを見かけた。この辺りはお年寄りが多く住んでいて、自給自足ができる程度の畑を持っている家が結構ある。

目が合えば挨拶をするけど、その瞳に活力みたいなものはない。ただ時間が過ぎていくのを待っているだけのような。

それはこの辺りの雰囲気そのものだった。徐々に力をなくして、寂れていく。

このまま終わりを迎える、そう思っていたけれど一年前、この辺りにとっては革命のような出来事が起きた。

いつも通る道に見たことのない看板を見つけた。その看板が刺さっている畑で作業をしていたおばあさんと目が合う。

活力かどうかは分からないけど、瞳に力がこもっていた。

「あら、こんにちは千伽ちゃん。今日は学校終わり？」

「こんにちは。今日は始業式なので。あの、この看板」

私が最後まで言う前におばあさんは立ち上がって看板を見た。

睨み付けるように。

「一昨日作って立てたのよ。そうだ、二時から集会あるから、お父さん達によろしく言っ

ておいてね」

顔は笑っているけど、声は笑っていない。

はい、と小さく返事をするこゝろしかできなかった。

おばあさんと別れる刹那、もう一度看板に目をやる。

書かれている大きな赤文字は、革命をけつして許してはいなかった。

家が見えた途端、歩幅が緩む。雨に降られなくて良かった。

裏口ではなく表の店の入口の方から家に入る。奥でお母さんが店番をしていた。

ただいまと言うとなにか作業をしていたお母さんはこちらをほんの数秒見ておかえりと返し、また下を向いた。多分注文書の整理をしているんだと思う。

細い通路を通って奥に進む。欲しかった新刊が平積みされているのに気がついた。孝士の本と一緒に届いたのだろう。辺鄙な土地の上に小さな本屋だから、発売日当日に入荷せず、ある程度まとめて商品が届くことも多い。

「お母さん、この本私の分とってある？」

「どれ？ ああ、欲しかったのってそれだったっけ。とってないから持っていきなさい」

言われた通り平積みの上からソフトカバーを一冊取った。積まれていると言っても二冊だけだったけど。

「あと一冊しかないけど大丈夫？」

「そんな本この辺で一冊売れたら上等よ。というかあんたが読むっていうからついでに入荷してるの。今お金出せるならもう払っちゃって」

確かにお年寄りが多いこの辺りではなかなか売れないかも、と本の表紙を見ながら思う。表紙には日本語が一切書かれておらず、言語は英語のみ。

お母さんがいるレジの前に行つて鞆から財布を出した。お小遣いはこの間もらつたばかり。けれどこの本を買つたら半分以上消えてしまう。それでも悔いはない。家族割引もしてもらっているし。

発売前から欲しかった本を手に入れることができ、少し減入っていた気分が晴れた。

自分の部屋に戻つてすぐ読み始めようと、お母さんの横をすり抜けてレジの後ろにある住居口に入ろうとした。

「千伽、着替えたら店番して。お母さん達これから出かけるから」

電池が切れたように身体が固まった。腕時計に目をやる。のんびり歩いて帰つてきていたから一時を回っていた。

帰りがけ道で会つたおばあさんの言葉を思い出す、『二時から集会』。

「お父さんとおばあちゃんも、行くの？」

今は家の居間に居るであろう残りの家族について聞いてみる。

「当たり前じゃない。こういうのは一致団結しないと。多分夕飯前には帰ってくるわ。あ、孝士くんの本取り置き棚にあるから、店番してる間に来たら渡してね」

本の話をしていた時とは違い、口調が尖っていた。

別に店番をするのは問題ない。少しお小遣いをもらえるし、お客さんがそう来るわけじゃないから万引きに注意しつつ本を読んだり勉強をすることもできる。小学生のころからやっていたことだ。

問題なのは、店番をしなくてはいけない理由。

「お母さん。今、高速道路ってどんな感じなの？」

一年前からこの家を支配している単語を口にした。

途端にお母さんの機嫌は嫌な方に傾いていく。

「最悪よ。こちら一帯を仕切ってる塚本の分家が開通に賛成したのよ。分家の中じゃ一番だし、実際に道を通す場所に近い家の方が後々強いわ」

塚本くんの顔が頭に浮かんだ。そうか、塚本くんの家は賛成しているんだ。

一年前、N市に突如言い渡された革命——高速道路開通。

人口密度が低い市内北部に、大きな都市と都市を結ぶ高速道路を開通させるといふ。市内にはインターも作られ、寂れかけている市に活気を与えようという計画だ。

市内北部というのが私達の住む地域で。道路を作るといふことは自分の土地から出て行かなければいけない人達が発生する。

今私が立っている場所にはインターができる予定だという。市から費用を出すから移住しろという勧告が出ている。

こちら一帯に住んでいるのはお年寄りが多い。「はいそうですか」と軽く腰を上げる人は殆ど居なかった。

おばあさんの畑に立てられた看板、『高速道路開通反対』。

N市は開通するか否かで揺れている最中だ。

「来週市役所の説明会があるから、今日の集会はその対策。もう少ししたら出ないといけないから早く着替えてきてちょうだい」

無意識に本を持つ手に力が入った。住居口から家の廊下に入ると、お父さんとおばあちゃんが真剣な目つきで話をしていた。内容は聞かなくても想像できる。

ただいまと言える雰囲気ではなく、なんとも言わずに居間を通り過ぎて階段を上がった。自分の部屋に入る。肩にかけていた鞆を落とすようにカーペットの上に置いた。

機械的にタンスから服を出して着替え始める。

ひたすら手を動かした。なんにも考えたくなかった。

「地主の子と隣って運わるーい」

レジの隣に置いたパイプ椅子に座るめぐみが嫌そうな顔をした。

「確かに運は良くないけど、めぐみ、塚本くんのことよく知らないじゃない」

「小学校も中学も違うしね。あの人、小学校は市外の私立通ってたのになんで中学は地元
の公立にしたんだろ」

それは同級生たちの誰もが疑問だと思った点だ。地主の子のうえに馴染みもないから一年の時は媚を売る生徒なんかもいた。一匹狼タイプだと分かった瞬間、誰もかれも腫れ物に触れるかのように接触を避けたけれど。

中学から市内中心部にある私立の女子校に通っているめぐみは、生まれた時からこの辺りに住んでいるにも関わらず塚本くんの顔も見たことがないという。

「でも地主だよ？ 性格いいわけじゃない。あたしの学年にも一人分家の子が居るけど性質悪いよー。高等部に居る本家の娘も好き放題らしいしね」

めぐみは目を座らせながらため息を吐いた。

白いワンピースの制服に身を包むめぐみはとても可愛いと思う。めぐみは自分の学校を嫌っているからけっして言わないけれど。私の学校の制服は昔からあるようなセーラー服で、めぐみの制服を見るたびに野暮つたいな、と思ってしまう。

「本読んでたみたいだけど、邪魔じゃなかった？ いきなり来ちゃったし」

「ううん。めぐみと話してる方がいいよ。最近時間合わなくて会ってなかったしね」

市内中心部からバスに乗ってここまで帰ってくるめぐみとは生活時間に若干のズレが生じていた。夜まで遊べない中学生にとってこのズレは大きい。

「千伽も早く携帯買ってもらいなよ。そしたらメールできるし。千伽の中学は知らないけど、うちじゃ持っていない子の方が少ないよ」

めぐみは鞆からピンクの携帯電話を取り出した。ストラップがいくつもついて賑やかだ。

「うちの学校は持つてる人少ないかな。塾行ってる子なんかは持つてるみたいだけど」

「あたしも大儀名分はそんな感じかな。家と学校遠いからって。その学校に行かせたのは誰だったの。あたしは玉の輿なんかに興味ないのに」

めぐみの通う私立優華女学院は賢妻良母を育てるのが目的という、今時需要があるのかと考えてしまうような学校だ。それでも志望者が多いのは交流がある名門男子校の生徒と結婚できる可能性が高いかららしい。めぐみもそれが目的で入学させられた。

「受験生だし、塾に通い始めたら携帯買ってくれるかも」

「早く買ってもらってね。んでいっぱいメールしよ」

それからドラマの話などで盛り上がり、いつのまに辺りはすっかり暗くなっていた。店

の壁にある時計を見ると六時を過ぎている。お母さん達はそろそろ帰ってくるだろうか。外から自転車のブレーキ音が聞こえる。時計から入口に視線を移すとちょうど自転車から降りる孝士が見えた。

「本取りに来た」

店に入って来た孝士は学ランではなく体操服を着ていた。部活が終わってそのまま着替えずに帰ってきたんだろう。

「じゃああたしそろそろ帰るね」

めぐみはいそいそと帰り支度を始めた。

「うん、また来てね」

孝士が来るといつもこうなので特に気にしない。この二人も昔からの付き合いだけどソリが合わないのかあまり仲は良くない。証拠に顔を合わせたのに一言も口を利かずめぐみは帰ってしまった。

孝士はめぐみの後姿を見ながら呟く。

「優華の制服なんて久し振りに見た。あれ着てるとどんな奴でも清楚に見えるのが不思議だよな」

「それってめぐみが清楚じゃないって言いたいのか？」

「小学生のころ男子と殴り合いして勝利した奴を清楚とは思えねえよ」

それは私の記憶にもばつちり残っている。当時悪ガキグループのリーダーだった内村くんを右アッパーでのしてしまったのだ。だから小学六年の時、めぐみが優華に通うと知った男子達がめぐみをかからかったこともある。その時も内村くんを討ち取った右手が唸った

のだけど。

「本だよね。ちょっと待って」

思い出発掘もそこそこにして立ち上がる。レジ下にある取り置き棚を除いた。雑誌や漫画に紛れて孝士の名前が書いている伝票を見つめる。取り出すと数学の問題集だった。

「勉強してるんだ」

「部活やってたら塾にも行けねえしな。いくらだっけ？」

本に表記された金額を伝えて孝士からお金を受け取る。本を袋に入れて渡した。

孝士は受け取った本ではなく、机に置いていた私の洋書をまじまじと見つめる。

「よく原文なんか読めるよな。いくら英語好きだからってそこまでできねえよ」

孝士は洋書を手に取りながら呟いた。

「辞書があればどうにでもなるよ。難しい文法があつたら高校生の参考書とか見てる」

「いや、どうにもならねえから。あれ、今家誰も居ねえの？」

誰も居ないので店の奥は電気を消していた。孝士が住居口を覗き込む。

「うん、今高速道路の集会行ってる」

そう言うと孝士の表情が曇った。物心ついた時からの付き合いである孝士は、うちが高速道路開通に大反対しているのを知っている。

そしてそんな家の空気に、私が憂鬱な気分を抱いていることも。

「じゃあ俺の家も誰も居ねえな。うちも反対だし。周りに逆らわないだけみたいだけど」

頭を軽く叩かれた。励ましてくれる時の孝士の癖。

「もうそろそろ帰ってくるだろ。じいちゃんばあちゃんは寝るの早いしな」

孝士の軽口が耳に心地よく響いた。気分も軽くなってくる。

「そっだね」

「まあ本でも読んで待つとけよ。あ、家の電気付けておいた方がいいぞ。これじゃ今お前一人ですって言うてるようなもんじゃねえか。いくらこの辺りが平和だからって少しは用心しとけって」

少し見ててやるから付けてこいと言われたので好意に甘えることにする。居間の電気を付けたら、自然と唇が弧を描いた。

孝士はいつでも私の気分を上昇させてくれる。

教室に入ると隣の塚本くんは既に登校していた。後ろからそっと席に着く。椅子を引いた時の音に反応したようで、塚本くんがこちらを見た。反射的に目が合う。

「あ、おはよう、ごっさいます」

途切れ途切れの挨拶になってしまった。合った視線はすぐにはずす。おかげで目のやり場に困った。

塚本くんの返事を待たずに席に着き、鞆のファスナーを開ける。別に無視されたって構わない。目をつけられなければなんでもいい。

「なんで敬語なんだよ」

背筋に冷たいものが走った。どうポジティブに考えても「機嫌が悪い」という答えしか

出てこないようなきつい口調。

声、まともに聞いたの初めて。

恐る恐る首を横に曲げてみると、塚本くんが刺すような視線でこちらを見ていた。

確かになんで「ございます」なんて付けてしまったんだ。いくら地主の子だからってここではクラスメイト以外の何者でもない。

これじゃ私も『媚びてる奴』と変わらないんじゃないだろうか。

「い、めんなさー」

「謝る理由も分かんねー」

ドツポにはまっていく気分だ。来たばかりだけど帰りたい。

なんて返そうかぐるぐる考えているとチャイムが鳴った。談笑していたクラスメイトが自分の席に着いていく。ほどなくして担任が入ってきたと同時に孝士が息を切らしながら後ろに入口に滑り込んだ。部活の朝練がギリギリまであったのだろう。とにかく続けたくない会話を切るに絶好のタイミングだった。塚本くんももうこちらには一切興味なさそうに正面を向いている。

連絡事項を伝えるショートルームが終わると授業ではなく前期の委員決めに移った。学級委員やらなにやらを決めなくてはいけないのだが、受験生になった三年生にとつて煩わしい役割の場合が大半だ。最初は立候補だが、最終的にはくじ引きで決まることが多い。

初めに決める学級委員は予想通り誰も立候補せず、くじ引きになったけれど私は当たらなかった。このままなにも当たらなことを祈りたい。後期は委員をしなくていいので、ここでやり過ごせたら一年楽だ。

全委員くじ引きで決まるかと思っただけど、立候補があった。体育委員に、孝士。当然、対立候補も居なかったのもそのまま決定となった。

孝士は去年も体育委員をやっている。仕事を覚えてるだろうし、くびに怯えるよりやり慣れてる委員をやった方がマシと思っただのかもしれない。

体育委員、美化委員と続いて図書委員の番になった。もしどうしても委員をやれと言われたら図書委員だけど、進んでやりたいわけではない。ここもくじ引きになるだろう、そう思っていた。けど。

予想とは裏腹に手が上がった。クラス中が上がった手に注目する。

正しくは、手を挙げた人物に。

「塚本か。男子、他には？」

担任が他の立候補は居ないかと聞いたが誰の手も上がらなかった。元々希望者なんて居ないだろうし、居たとしても塚本さんと委員の座を争うなんて無謀なことは誰もしない。

女子の委員になった子は大変だな、と半ば他人事に思ってしまった。自分が当たるかもしれないから心の中で「当たりませんように」と全力で祈ることにする。

「それじゃ、女子の図書委員は……」

「……」

女子の候補を聞いているはずなのに、なぜか男子の声がした。

注目を浴びたのはまたもや塚本くん。

と、誰かを指した親指。

と、その親指が指す先に居る私。

言葉も出なかった。

「高橋、図書委員立候補でいいか？」

自分で言っていないので担任が確認をとってくれた。そうだ、ここで「違います」と言ってしまう方がいい。でもそんなことを言ったら塚本くんから不興を買うことは必須だ。

その塚本くんは横目でこちらを睨んでいた。

「てめえやらねえなんて言うんじゃないぞ」と視線が言っている。

私に与えられた選択肢は一つしかなかった。

「やります……」

こうして私は気難しい地主の子と同じ委員という、クラス一不憫な生徒に転落した。

「谷中のとこ行ってさっきの決定撤回してもらおうぜ」

委員決りが終わり休み時間になると、すぐさま孝士に廊下に出された。話の内容はもちろぬ図書委員のことだ。

「もう決まっちゃったし、今からくじ引きで決め直すなんて言ったらひんしゅく買うよ。

谷中先生だって困るだろうし」

担任の谷中先生はことなかれ主義だ。塚本くんに関わることなら尚更だろう。

「だからって、おかしいだろあんなの。地主だからって勝手なことしやがって」

「だめだよ下手なこと言っちゃ」

どこでなにを聞かれているか分からない。本人に聞かれなくても他人経由で知られる可能性も否定できない。

こんな娯楽もない土地では噂なんてあつという間に広がる。

「大丈夫。前期だけだし図書委員なんてそんな仕事ないし。それに」
それ以上口に出すことができなかつた。孝士も察してくれたようでもなにも聞いてこ
ない。

商売をしている以上、地主を敵に回してはいけけない。なにかあつたら即時に店を潰され
かねないから。高速道路なんて言っている場合じゃなくなる。

お母さん達があの場合に固執している理由を小さなころから聞いてきた。だからでき
ば高速道路も開通しなければいいと思つている。

でも、時代とか、世間の空気とか、必然とか、逆らえないものがたくさんあるというこ
とをもう、十四年生きてきてそれなりに知つていた。

それがまさに今だ。

「なんとかやるよ。大丈夫」

自分にも言い聞かせるように言つた。孝士はまだ納得していなかつたみたいだけど、小
さなため息を吐いただけだつた。

時計を見るとチャイムが鳴る時間になりそうだったので教室に入る。

何度も何度も聞いてきたお母さんの話を思い出した。

うまくやろう、あそこは私が育つた場所でもあるんだから。

* * *

お母さんも元々この近所に住んで、本が好きだったからここに何度も通ったわ。店番をするお父さんと顔を合わせることも多くて、同い年だし昔から仲がよかった。

学校にも一緒に登下校した。クラスの子に下世話な悪口を言われたり、お父さんを好きだった女の子に喧嘩を売られたりもしたけど、お互いにちっとも気にならなかった。

小学校を卒業しても、高校に入っても、本屋には通い続けて。ずっと同じ学校だったから変わらず学校まで一緒に歩いて。

そのころになると、誰も居ない道で手を繋いでた。帰りはそのまま本屋に寄ったりもしたっけ。一回店番任されたこともあったわ。

私にとってもお父さんにとっても、この店は大事な場所なのよ。話しきれない思い出が詰まっているからね。

小さなころこの話を聞いて、純粋に羨ましいと思った。

一緒に聞いていた姉は興味がないみたいで同じ話をされると「またあ？」と嫌な顔をしていたけど、私は何度でも聞きたかった。

そしていつか、自分にもそういつた相手があればいいのにと。最後に聞いたのはいつだっただろう、

革命は、思い出話を犠牲にする力も持っていた。

三日前にあった委員会で図書当番を決めた。内容は放課後、図書室で本の貸し借りの受付をする難しくもなんともない作業だ。順番は三年一組から順番なのが慣例だから決めたというより日取りを確認したという方が正しい。私は一組なのでトップバッター。三学年合わせてクラスが六つしかないのですぐに順番が回ってきそうだけど、三年生は受験生ということも考慮されて二週間に一回程度で済んだ。作業のことだけを考えると思った以上に気楽な委員だと思う。

委員会、あろうことか塚本くんは欠席した。学校を休んでいたわけじゃない。ホームルームが終わると「俺今日用事あるから、決まったこと明日教えて」とだけ言って帰ってしまったのだ。抗議できるわけもなく、教室を出る背中を見送るしか出来なかった。

今にも塚本くんに殴りかかっていきそうな孝士を宥めて委員会に出席したけど、内心ほっとしていた。一人で出席する方がよっぽど気が楽だから。

当番もサボって一人にならないかな、と淡い期待を抱いたけど、その期待は見事に打ち砕かれた。

初めての当番の放課後。カウンターにはパイプ椅子が二つ。

一つは私が。もう一つは、塚本くんが座っている。

いや、これが本来正しいのであって。これからの当番もこうでなくてはいけなくて。そうなんだけど、この静寂な空気の中二人きりは辛すぎる。

放課後図書室に寄る生徒なんてほとんど居ない。今のところ二年生が授業で使ったと思われる資料集を返しにきたただけだ。本を読まないんじゃないかと、読みたいような本——小説などが全然置いていないからだ。あるのは辞書や授業で使うような資料ばかりで、図

書室というより資料室と言った方が正しいんじゃないかと思う。

時計の針の音が大きく聞こえるほど、室内は静か。

塚本くんはパイプ椅子に行儀悪く座り、ポケットに手を突っ込んでどこかを見ている。つまるところ、ぼーっとしている。

私はというと、教室に居る時よりも緊張して肩に力が入りっぱなしだ。

今は四時。終了時間は五時。あと一時間、思った以上に拷問だった。

時計の針が四時ちょうどから五分移動すると、塚本くんがいきなり立ち上がった。パイプ椅子が起こす乾いた音にびっくりして過剰に反応してしまう。

塚本くんはカウンターから出て本棚を物色し始める。急になんだろうと思いつつ、カウンターから塚本くんを見守ることしかできない。

お目当ての本を見つけたのか、塚本くんは一冊本を持ってカウンターに戻って来た。

椅子に座って本をパラパラとめくった後、最初のページに戻ってじっくり読み始める。こちらからは裏表紙しか見えなくてなにを読んでいるのかは分からない。けっこうな分厚さではある。

……本を読んでいいなら私も読みたい。

鞆の中には昨日買った洋書が入っている。

私も読んでしまおうか、なんて思っていると、本に目を落としていた塚本くんの視線が、不意にこちらに向いた。

「なに睨んでるんだよ」

と言ってる塚本くんの方が睨んでいる。さつき椅子から立ち上がられた時より萎縮して

しまう。

「に、睨んでない」

です、と言いつうになつたのを必死で抑えた。

「思いつきりこつち凝視してたじゃねえか。なんだよ、お前も本読みたいなら読んでればいいだろ。こんなとこに来る奴なんてそうそう居ねえんだし。そうじゃなきゃこんな委員自分からやらねえよ」

最後の方は愚痴みたいな口調だった。こんなにしてるのを聞くのは初めて。先生達も遠慮してるのか授業で当てられることもないし。

今の話によると、塚本くんは本を読む時間が欲しくて図書委員になつたのか。

家で読めばいいんじゃないかと思つたけど、家は家でなにか事情があるのかもそれない。それでなくても地主なわけだし。

あと疑問に思つてゐることは。

「なんで女子の委員を私に指名したの？」

本に戻りかけていた視線が、私をはつきりと捉えていた。

真顔。呆けた顔というべきか。

こんな表情も初めて。今日は初物だらけだ。

「お前、喋れるんだな」

思いもしなかつた返答に、今度はこつちがポカンとしてしまった。

「いま話してたじゃない」

「そりゃ俺が聞いたからだろ。ちゃんと質問もできんじゃない」

ばかにされているのだろうか。でも本気で言ってるようにも思える。

「俺に質問してくる奴なんて基本俺の家のことしか聞いてこなかったからな。なんか新鮮。それでなくても最近他人とろくに口利いてなかったし。あ、質問の答えはお前ん家、本屋だろ。本の取り扱いとか手慣れてそうだと思っただから。あと言うこと聞きそう」

塚本さんの口から言葉がいくつも紡がれた。この人、こんなに喋る人だったんだ。意外だ。教室じゃ基本黙っててむすっとした顔しか見せなかったから。

それより言うこと聞きそうってどうということだ。

あと。

「私の家が本屋って、知ってたの？」

「知ってたのって、当たり前だろ？ 俺が生まれる前からある店じゃねえか。高橋書店」

「本屋の存在は知ってたかもしれないけど、その家の子が私って」

「俺をばかにしてんのか？ 一年の時同じクラスだっただろうが。特徴くらい知ってるの」

今までもろくに喋ったから私のことなんかさっぱり知らないと思ってたのに。

「じゃあ、私の特徴は本屋の娘ってこと？」

「それ以外にねえじゃん」

断言されてしまった。確かに自分でもそれ以外の特徴なんて思いつかない。

一瞬嬉しい気持ちになったけど、一気にクールダウンした。考えてみれば一学年六十人、知らない人が居ない方がどうかと思う。私だってほとんど関わったことのない人でも顔と名前くらいは一致する。

聞きたいこともなくなったし、少し減入った気分を晴らすために私も本を読むことにした。鞆から洋書と電子辞書を取り出す。

数ページ読み進めて、ここは読書をするのに最適な場所だと気がついた。

家に居ると店番を任せられたりすることも少なくないからリラックスして読める時間があるわけではない。

でもここは、嫌でも静か。人もそう来ないと分かっている。

塚本くんはこの空間が欲しかったのかもしれない。

時間がいつもよりゆっくり流れているように感じた。

慎重に接しないといけない人が横に居るのに、なんだか心地がいい。

「おい高橋、コーヒー買って来い。微糖」

「実験の後片付け、お前やっというて」

「お前のノートきれいなそうだな。俺寝るから後で俺のにも書いとけ」

めぐみが言っていた通り、地主の子は傍若無人な人達ばかりなのだろうか。

図書当番の翌日から塚本くん小間使いのような扱いを受けている。

クラスメイト達はそんな私を同情するような目で見て、そしてあまり関わらなくなった。

私経由で塚本くんを目を付けられたら事だからだ。仲が良かったはずの友達もあちらからは話しかけてこないし、こちらから話しかけても気まずそうにしている。仲がいいと言っ

でもクラス内で話す程度の仲だったけれど。

いわばスケープゴートとでも言えればいいだろうか。

「あいつ、いい加減しばく」

「だめだよ、なにかあったら部活の大会に出れなくなっちゃう。私気にしてないから」

孝士をなだめるのもそろそろ限界に達しようとしていた。

気にしていないといったら嘘になる。なんで私なのかって。隣で口ごたえしないからだろうけど。

けれど逆らうわけにはいかない。下手に騒ぎにしたくもない。これ以上目立ちたくない。日直だった今日はクラスの雑務も加わって忙しい一日だった。もう一人男子の日直が居るけどほとんど働いてくれない。「やって」と言えればいいだけの話なんだろうけど、その勇気を出す労力を考えると、一人で片付けてしまった方が楽だった。

ホームルームが終わってクラスは解散したけど、私にはまだ黒板消しと日誌の仕事が残っている。もう一人の日直は「ごめん、俺部活だから」と私の返事も聞かずに教室を出ていった。

「手伝おうか?」

「いいよ、孝士も部活遅れちゃうよ」

後ろ髪引かれているような孝士を送り出して黒板を消し始めた。最近孝士に心配をかけたばなしな気がする。もっとしつかりしないと。

黒板を消している間にクラスメイト達は全員教室を出ていた。部活に出た人、受験に備えて塾に行った人、友達が帰ったので早々に帰る人、私も普段はさっさと帰っている。

教室が静かになって外の雨音に気付いた。ホームルームの時は曇っていただけなのに、通り雨なのか大降りまで雨が降っている。

折りたたみ傘も持っていない。職員室で置き傘を借りる算段を立てた。早いところ終わらせてしまわないと。

六時間目の授業が背の高い先生の数学だったため、黒板の上の方にまでびつしりと数式が書かれていた。背伸びをしても自分の背丈だけでは届きそうにもない。

下からギリギリのところまで消してみたけど、案の定上から三十センチくらいの数式に黒板消しはたどり着けなかった。

仕方なく教卓の椅子をとおうと手に取った時、教室の入口の方から物音が聞こえた。

「あれ、お前まだ残ってたのかよ」

校内で唯一髪の色素が薄い生徒が、引き戸を手にかけて立っていた。

「日直だから」

「にしたっていつまでやってんだよ。あとなに残ってたんだ？」

「黒板消しと日誌」

「しゃあねえなあ……と塚本くんはめんどくさそうな顔をしながら教室に入った。自分の席ではなく何故か隣の私の席に座る。

「日誌書いてやるから、さっさと黒板消せよ」

そう言って机の上に置いていた日誌をめくった。

「え、いいよ悪いし」

「お前、この薄暗い大雨の中を一人でちんたら帰るつもりか？ 車呼ぶからついでに送っ

てやる。感謝しろ。だからさっさとこんなもん終わらせるぞ」

一緒に置いていた筆箱を勝手に開けてシャーペンを取り出した塚本くんは、日誌を書き込み始めてしまった。

送ってくれるって、いいのだろうか。

「男子の日直誰？」

「三上くん」

「俺にこんなことやらせやがって。今度しめる」

やらせてって、自主的にしてくれてるのに。でも三上くんにはいいお灸かもしれない。

……けれどこういう時って、普通黒板消しを手伝ってくれないものだろうか……。

消し跡を見れば上まで届かないことは明白だ。孝士ほどではないけど、私よりは背の高
い塚本くんなら上の数式も楽々消せるはずなのに。

そんな思考を視線にして塚本くんに送っていると、

「黒板消しなんか粉で咳き込むし制服汚れるだろうが」

思考を読まれ、さも当たり前のことかのように返された。手伝ってもらっている身だし、
正論なのでなにも言い返せない。

とにかく早く終わらせようと椅子に乗って上の方の数式を消した。確かにけむい。

椅子を移動させつつようやくやくすべて消し終わると、塚本くんも書き終わったようだった。
た。

「終わったか？　じゃあこれ職員室に出して帰るぞ」

日誌と自分の鞆を持って出て行ってしまったので私も慌てて鞆を持って教室を出る。

小走りで追いつき、塚本くんから日誌を受け取る。急に中身が不安になってきた。

日誌を開いて今日のページを見ると、私の字とは似つかない整った字が並んでいた。上から目線を滑らせるように見ていくと、一番下の『今日の感想』欄でちよつとずつ動いていた顔がぴたつと止まる。

「塚本くん、この感想欄」

「あ？ 本当のことだろうか」

欄には“三上くんが無能でした”と書かれていた。こんなの出せるわけがない。慌てて鞆から筆箱を取り出す。

「消すなよ」

「消すよ！ こんな先生に見られたら大変」

その場にしゃがんで念入りに消しゴムで消す。上に「今日は寒かったです」とどうでもいい感想を書き加える。

「そのしゃがみ方、パンツ見えるぞ」

「体操服の短パン穿いてるからお構いなく！」

とんでもないことを言われとんでもない切り替えしをした気がするけど今はそれどころじゃない。

書き換えを終わらせて立ち上がった。少し足が痺れている。塚本くんは「つまんねえの」という顔をしていた。

「にしてもお前、思ってたよりもキャラあるじゃん。普段からそうしてりゃいいのに」
「キャラ？」

「普段はぼーっとしてるか佐々口にひつついてるだけじゃねえか」

佐々口は孝士のこと。やっぱり孝士とばかり一緒に居るように見られているんだ。確かにことあるごとに話しかけてくれるし、私もそれが自然だと思ってしまうていた。

「もつとしゃべればいいんだよ。面白そうだから。今時お構いなくなると言う中学生が居るとは。ばあちゃんくらいしか言わねえぞ」

面白そうなんて初めて言われた。胸のあたりがくすぐったくなる。

塚本くんにも同じことを言い返してやりたい。口は悪いけど、きっと気の合う男子が居そうなのに。

日誌を職員室に置いて昇降口へ。雨は未だ止みそうにない。送ってもらえるのは正直助かる。濡れてぐちゃぐちゃになった道を自転車を通るのは危ないし、歩きで帰るにしても塚本くんの言った通り暗くて少し怖いからだ。

塚本くんは鞆から携帯電話を取り出していじりだした。メールでもしているのだろうか。

その携帯をまじまじ見てしまう。めぐみが持っている携帯とは全然形が違っていた。ビジネス系の雑誌の表紙に載っていたのを見たことがある。iPhoneだ。

「なに見てんだよ」

通話を終えた塚本くんが訝しげにこちらを見た。

「iPhone 初めて見たからちよっと珍しくて。そもそも携帯持ってないし」

「なんだ持ってねえのかよ。アドレス聞こうかと思ってたのに」

「ええ？」

なんで私の連絡先なんて知りたがるの？

「休日もなにかあったら呼びつけるのに便利じゃねえか」

休みの日にまで使われるところだった。携帯を持っていなくてよかったと思ったのは初めてだ。

外から車が走ってくる音がした。昇降口の外に目をやると、どう見ても高そうな黒塗りの車が止まっている。

塚本くんは昇降口を出た。車の運転席からもスーツ姿の男の人が出てきて塚本くんにお辞儀をしている。

「早く来いよ」

いつまでも私が動かないのでせかされた。

もしかして、今から私、これに乗るの？

こんなテレビや本の中でしか見たことなかった車に。

「やっぱり私、一人で帰ろうかなあ？」

「馬鹿か。つべこべ言わずさっさと乗れ」

拒否は不可能のようだった。諦めて上履きを脱ぎ換え昇降口を出る。

スーツの人から受け取っていた傘をこちらに差し出されたので中に入る。塚本くと並んで車の方まで行き、スーツの人がドアを開けてくれていた後部座席に乗り込む。

ほんの数秒、相合傘だった。

塚本くんはこれっぽっちも意識していないだろうけど。

車のシートには白いカバーみたいなのがかけられており、とにかく高級感が漂っていた。このカバー、汚してしまつたら一体いくら弁償すればいいんだろう。

そんなことを考えているうちに車は静かに走り出した。

そういえばまだお礼を言つてなかつた。

「あの、送つてくれてありがとう」

「ついでだついで。けど感謝するなら今後也大いに使われるよ」

塚本くんは携帯をいじつたままどこちらを向かない。

薄暗い車内の中、塚本くんの唇がいつもより固く結ばれているように見えた。

十五分ほど走ると見慣れた高橋書店の看板が見えてきた。車は店の反対側に停車する。

雨足はさつきより弱くなつていた。

「本当にありがとう。運転手さんも、ありがとうございました」

二人にお礼を言うくとスーツの人が車から降り、私の方のドアを開けた。

ドアを開けてもらうなんてタクシーに乗つた時以外されたことがない。

「傘をお使いになれますか？」

車から降りると運転している最中も一切口を開かなかつたスーツの人が初めてしゃべつた。ちよつとびつくりしてしまう。

「すごそこのので大丈夫です。ありがとうございました。塚本くん、また明日」

「んー」

一瞬だけ横目で目があつただけ。スーツの人に頭を下げて店へと走つていった。

「千伽、どうということなの」

ほんの数秒雨の下を走ったおかげでわずかについた水滴を払い店の中に入ると、お母さんがものすごい剣幕で立っていた。なんでそんな顔をしているのか皆目見当もつかない。

「なにが？ 私にかした？」

「なにかしたじゃないわよ！ あんたが塚本の分家の次男に媚売ってるって噂が出回ってるのよ！ 今日の集会でどれだけひんしゅく買ったと思ってるの!？」

なにそれ。そんな噂、どこから流れたの？

「ちがう」

「なにが違うのよ！ 今だって送ってもらったあの車、塚本家のじゃない！」

なにも言い返せない。物的証拠はそろってしまっているのだ。学校でのあの使われようは、見る人が見れば媚を売っているように見えなくもない。道路開通反対派の家の子が視点を捻じ曲げて言いふらしたのか。

「今高速道路がどういう状況かこの前教えたわよね？ こんな時に塚本の分家と繋がってるんだなんて、あんたそんなにこの家潰したいの!？」

お母さんの目が潤んでいることに気付いた。何度も聞いた思い出話を思い出す。

そうだよ、潰したくなくて言うこと聞いたんだよ。図書委員もやろうって決めたんだよ。

最初は我慢してた。塚本くん怖いし、変なこと言わないように気をつけてたし。

でも、塚本くんは塚本家の人間ではあるけど、高速道路には関係ない。

うちが反対派の筆頭みたいな位置にいることはきつと知っているはずだ。それでも日直

の仕事を手伝ってくれたし、話をしてくれた。

今、もう、塚本くんのこと、あんまり怖くないんだよ。

“もっとしゃべればいいんだよ。”

さっき聞いた言葉が、耳の奥で響いた。

「違う、媚なんて売ってない」

自分を奮い立たせるように、強く言った。

「でも噂じゃ」

「お母さんは根も葉もない噂と娘の言うこと、どっちを信じるの？ それに塚本くんの家は賛成派かもしれないけど、塚本くんは関係ない。道路の話なんてしていいもの」

「じゃあお母さんは、集会であんたはその子のなんなのかどう説明すればいいのよ！」

答えられなかった。小間使いなんて口が裂けても言えるわけがない。

でもなにか言わないと。お母さん達が肩身を狭くしたのは紛れもなく私のせいだ。

私は、塚本くんのなに？

「友達ですけど。なあ？ 千伽」

頭になにか柔らかいものが乗った。人間の手。乗ったというより掴まれたと表すべきかもしれない。

「つかもと、くん」

すぐ後ろにとづくに帰ったと思っていた塚本くんが立っていた。

「反対派のみなさんは中学生の付き合いにまで目くじら立てるんですか？ 確かにうちは賛成派ですけど、俺自身は関係ないですよねえ。こういうのって教育的によろしくない

気がするし、第一、大人気なくないですか？」

突如現われた地主の子にお母さんは哑然としてしまっていた。無理もない。いくら近くに住んでいるからつてそうそう口を利けるものではない。

「と、いうわけで。くだらないことをごちゃごちゃ言うようでしたら集会で使つてる公民館を使用禁止にするとか色々考えるんで。それじゃ」

言いたいことだけを言うと、塚本くんは持っていた傘を開いて店を出て行った。頭が軽くなる。

店が静寂に包まれた。

お母さんは呆然としたまま。私は無意識に塚本くんの後を追うべく店を出た。

「塚本くん」

車に乗り込もうとする塚本くんを呼び止める。

「おま、そんな所突つ立つてたら濡れるだろうが」

こちらに気付いた塚本くんは私の傍に駆け寄ってきた。

道路の真ん中で、また一つ傘の下。

「友達つて」

「パシリだなんて言えるわけねえだろ。お前、今日からダチな。その方が体裁いいし」

そう言いながらそっぽを向いた。言っていることと表情が少しずれている。

「名前は」

「ダチつて名前で呼び合うもんじゃねえの？ お前が第一号だからよく分かんねえけど」

まさかの事実を告げられた。どこからそんな知識を、その前に友達いなかっただつて。

「ほら、もう中入れ。風邪引くぞ」

塚本くんは傘を私に渡して、小走りですりに乗り込んだ。

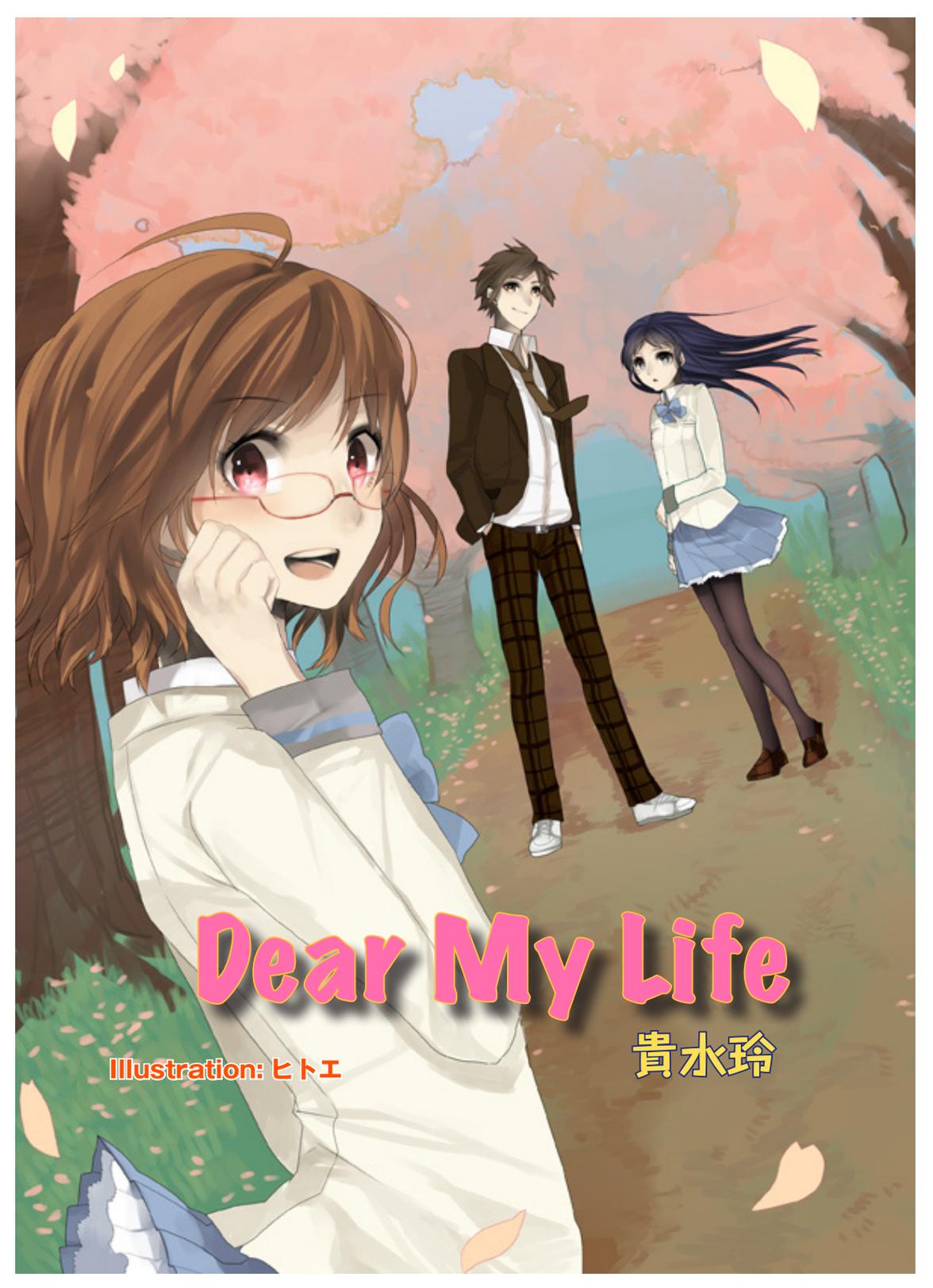
ほどなくして車は発進し、角を曲がって姿を消す。それまで見送ってしまった。

受け取った傘を見上げる。

今、友達が一人増えたらしい。相手はなんと地主の次男。

私も名前で呼んだ方がいいのか、これで小間使いが公認されてしまったのか、そんなことを考える前にお母さんに説明しないと。

色々な思念が飛び交って気が遠くなりそうになる。けど、ほんの少し胸が温かくなっていくのに気がついた。

An illustration of three anime-style characters in a park with cherry blossom trees. In the foreground, a girl with long brown hair and red-rimmed glasses looks towards the viewer with a slight smile, her hand near her face. In the background, a boy in a brown suit and a girl in a white school uniform with a blue skirt stand on a path. The scene is filled with soft pink and orange tones from the blossoms and falling petals.

Dear My Life

Illustration: ヒトエ

貴水玲

十河 星流
(そごう すばる)

高二。政治家一族の息子で女子に人気が高い。



西野 花
(にしの はな)

高一。何事にも一生懸命な、素直で心優しい少女。



塚本 ありさ
(つかもと ありさ)

高一。プライドが高く利己的な旧家の娘。



第一話 新しいはじまり

「に、^{にじの}西野花^{はな}です！ と、東京から来ました。お母さんと二人暮らしでした。それから、ええと……」

——ああ、何を言えればいいの。

机の下で震える両足に、花はぐっと力を込めた。同じ教室にいる二十九人の少女たちの視線が自分に向かっているのがわかる。

高校入学、二日目。早くも花はピンチに見舞われていた。

一時間目のHRはここ数日の大まかなスケジュールの説明と、自己紹介。一人ずつ順番に簡単なプロフィールを発表していくだけなのだが、これが花にとっては大仕事。

心臓がバクバクいつている。言葉につまって花は俯いた。少し大きい赤ぶちのメガネが鼻からずり落ちそうになる。

『大丈夫、いつもの笑顔でね』

頭の中でママの声が聞こえた。

大好きなママ。大輪のバラみたい^に華やかで明るくて、みんなの人気者。あんなにきれ

いでやさしくて、そして凜とした女の人を花は他には知らない。それに引き換え娘の自分は、昔から不器用でこれといった取り柄もない。

十五年間暮らした東京を離れてこのN市の優華女学院に入学することになったのだった、ママの導きがあつたからだ。——そう彼女のあの一言で、花の人生は大きく変わるこ
とになったのだ……。

「ねえ、花！ この高校を受けてみる気ない？」

母の咲さきが女子高のパンフレットを手に部屋に飛び込んできたのは、去年の夏休みだった。

「ここ、ママの母校なの。すごくいいところよ。まあ偏差値はあんまり高くないけど、制服もかわいしいし、東京よりは田舎だけど海も山も近くて環境もいいし。花も絶対気に入ると思うんだけど」

エアコンを弱に設定した快適な室内に、廊下の熱風が吹き込んでくる。シャーペンを握る手を止めて、花は窓辺の机から椅子ごと振り返った。

「……どうしたの、急に。ていうかママの高校って花嫁学校じゃなかった？」

外の気温は三十四度。窓の外には眩しいほどの青空が広がっている。けれど咲は起きたばかりらしくパジャマ姿だった。

銀座の一角で小さなクラブを経営している咲は、昼と夜が逆転している。お昼前のこの時間に起きているのは珍しい。

「まあ、メインはそうなんだけど。でもちゃんと普通の勉強もするわよ。花は英語得意で

しょ？　なんか今国際教育にも力入れ始めてて、変わった授業もあるみたい」

フーリングにパンフレットを広げ、咲が手招きする。すっぴんの笑顔は三十四歳にしては幼く無邪気だ。これで夜になると女優みたいにきりっとしたクラブのママに切り替わるのだから不思議だ。

「ふーん……でも私、高校は近くでいいよ。だつて他県じゃ通えないもの」

「あら、もちろん東京からはムリよ。向こうに住んで通うの」

「はっ？　引越すの？　だつて去年このマンション買ったばかりじゃない」

「違うわよ、花だけ行くの。大丈夫、知り合いがこの学校の近くで下宿をやってるから、頼んであげる。一人暮らしよ、花！　すごいでしょ。ね、どう？　どう？」

「え。ど、どうって……」

一人盛り上がっている母の前に、花は温度差と困惑を隠せなかった。

ここを離れて一人で暮らす？　そんなの唐突すぎる。ホステスだった母の都合で住処を転々とするのはあったが、基本的に花は東京以外の場所に住んだことがない。突然見知らぬ場所へ行けなんて、追放宣告されたような気分だった。

「きゅ、急に言われても困るよ！　そんな遠くの学校なんて」

「あはは、大丈夫よー。他県っていったつて東京から新幹線で二、三時間の距離だもん。そんなに遠くないわよ。心配することないない」

「し、心配ないって……」　どんどん複雑な気分陥っていく花とは対照的に、咲はけろっとしてる。それが何だかショックだった。

「なんで急にそんなこと言うの？　ママは私がいなくなっても寂しくないの？」

思わず涙声になる。

花には父親がいけない。生まれる前に病気で亡くなったと聞いている。

物心ついたときから母と二人支え合いながらやってきた。夜中働く咲のかわりに料理や洗濯をするのは小学生頃から花の役割だった。二人の生活はバランスがとれていた。花も頼られているのがうれしかった。なのに――

「寂しいわよ、もちろん！ 花のゴハン食べられなくなるのも、一緒にテレビ見たり買い物出来なくなるのも。でもいいチャンスだと思うの。新しい生活の始まりって新しい自分の始まりでしょ？ うちは母子家庭で、しかもあたしは夜の仕事だから花のことをほとんどまかっただけあげられない。本当はそばにいてあげるべきなのに、家のことも任せっきりで。でも花には新しい世界に飛び込んで、いろんなことを学んでほしいの。だから提案しようと思ったの。新しい環境で一からやり直すのも素敵じゃない？」

新しい環境で、やり直す。

その言葉が花の胸に大きく響いた。そして咲の真意もわかってしまった。

母は知っているのだ。口には出さなくても花が心の奥で思っていることを。本当は東京から逃げ出したいと思っていることを――。

「……でも、自信ないよ私」

椅子を元の位置までくると戻し、花は机の上にあるハート型の鏡を見た。

「だって私、ダメだもん。あがり症だし、鈍くさいし運動音痴だし。ママの子なのに全然美人でもないし……いいとこないもん。うまくいかないよ」

鏡の中の、赤ぶちのメガネに天然パーマのせいでぼさぼさ頭の自分。

このさえない容姿のせいで昔からどれほどいじめられたか。それ以来花は俯きがちなつた。みんな私を見ると笑ってばかりにする。そんな風に思うようになって人とうまく接することができない。だから学校でも花は一人だ。夏休みにプールや買い物に誘ってくれる友達もなく、ほとんど家で過ごしている。出かけるのは近くのスーパーか図書館くらいだ。「はーな」

後ろからふわりと咲が抱きしめてくる。ほんのりとバラのコロンの香りがした。

「何言ってるの。花は本当はとつてもかわいいのよ。自分では気づかないだけ。くりつとした目と鼻はお父さん似。このふわふわの髪はママ似。昔はすごいくせつ毛で苦労したわ。でも花の髪だつてちゃんとセットすればきれいな巻き髪になるのよ」

毛先がくるくるした花の髪を指に巻きながら、咲が微笑む。

「ねえ、花——人が何て言ってるか知らないけど、花にはいいところいっぱいあるよ。我が家をきりもりしてくれるしつかり者なところとか。あたしが落ち込んでいると励ましたり愚痴を聞いてくれるところとか。花は思いやりがあつてとーつてもやさしい子よ。不器用なところもあるけど、でも何でも一生懸命やるでしょ。あきらめないで。あたしはそういうまつすぐなところ好きよ。何より花の笑顔が好き。花の笑った顔を見るとどんなに疲れても元気になるの。うちのお店のサエやミクも笑顔がかわいいつて言ってるわよ」

「や、やめてよ。はずかしいから」

鏡に映る自分と咲の姿から目をそらし花は俯いた。だがすかさず咲の手に顎を掴まれ、ぐいと上を向かされた。

「だめよそれじゃ。いいことは下になんか転がつてないのよ。目の前からやつてくるの。」

だから見逃さないように前を向かなきゃ。大丈夫——花はだめな子なんかじゃない。なんたつてもとNO1ホステスのあたしの子だもの。それに花の笑顔には魔法があるんだから」

ひまわりみたいに咲が鮮やかに笑う。

それだけで、心がすうっと軽くなる気がする。魔法を持っているのはママの方よ——そう思いながらはにかんで、花は鏡の自分を見つめた。

そしてその向こうの、未来の予感を見つめた。

——ああ、うまくいかなかったな……。

一時間目後の休み時間。ざわざわした教室内の自分の席で、花はしゅんと俯いていた。

結局思い描いていた自己紹介は出来なかった。緊張で頭が真っ白になってしまつて。入学が決まつてからずっと頭の中でシミュレーションしていたのに。満足に言えたのは名前と東京から来たということだけだ。

——きつとみんな変な子つて思つただろうな。

ああ、また友達は出来ないかもしれない。意気消沈。恥ずかしい。もう帰りたい。

そう自己嫌悪に陥っていると、

「西野さん、だっけ？」

突然頭の上から降つてきた声に、花はびっくりして顔を上げた。そこには二人の少女が立っていた。

「ねえ、東京から来たんでしょ？　すごいね、遠くから。ちょっと話してもいい？」

「えっ」

花はメガネの奥で目を見張った。

どうしよう、話かけられてる？ 予想外の出来事に花は動転しそうになったが、慌ててコクコクと頷いた。

「う……うん、もちろん！ うれしい！」

「あたしたちも外部生なんだ。といってもN市内の中学から来たんだけど。ここって中部から持ち上がり内部生が多いから、みんな知り合いなんだよね。だからちよっと話しかけずらいっていうか……肩身が狭い感じ」

「そうそう、しかも派閥みたいなのもあるんだって。ちよっと怖いよね」

二人が控え目な声で言う。そういえばまだ入学二日目なのに、クラスメイトたちはずいぶん打ち解けた雰囲気なのに花は気がついた。

優華女学院は中等部、高等部と短大から成り立っている。ほとんどの生徒は中等部から入学してそのまま高等部、短大と進学するらしい。だからもうすでに内部生たちの間では外部生は入りづらい彼女たちだけの“世界”が出来上がってしまったているのだ。

「西野さんはどうしてこの学校受けたの？ 都会なら高校たくさんあるでしょ？」

「あ……うん。お、お母さんの母校なの。それでパンフレット見て、興味あって……。私東京から出たことなかったから、いい機会かなって」

「へー、あたしだったら東京にいたいけどなあ。何でもあって便利そうだし。でもこの学校って人気あるんだよね。なんとってあの男子校と接点があるから！ 今度の歓迎会、超楽しみなんだけど」

「……歓迎会って？」

「あれ、予定表見てない？ 今週の金曜日、近くの昇星学院との合同新入生歓迎会があるんだよ。毎年恒例なんだって。それ目当てにこの女子高を受験する子も多いんだよ」

「え……なんで？」

花はきよとんと首を傾げた。その反応に二人が顔を見合わせた。

「あ、知らないんだ。ここと昇星ってね、昔から交流がさかんで一年の行事でも時々一緒にやったりするの。それで生徒たちが知り合って卒業後に結婚したりするパターンが多いんだって。この学校って昔は花嫁学校だったから、それで淑女教育？ に今も力入れているらしいよ」

「そ、そうなんだ。知らなかった……」

そんなこと、ママは言っていないなかった気がするけど。パンフレットに書いてあったかな？

「えっと、じゃあ二人は……もしかしてそうなの？」

いいのかなと思いつながら、おずおずと花は尋ねた。

「私は家から近いから。でもちよつと期待はしてるよね。昇星ってお金持ちばっかり通う進学校なの。知り合う機会なんてめったにないじゃない？」

「うんうん、それにけっこうイケメン多いんだよねー」

「そつ……そうなんだ」

盛り上がる二人を交互に眺め、花は目を瞬いた。

——みんな勉強のために高校へ来るんじゃないんだ……。

今まで学業メインで生活してきた花には衝撃だった。

それに男子と知り合いたいからなんて。男の子イコール怖い、いじめる、のイメージの花には考えられないことだ。ここを受験することに決めたのは英語のカリキュラムに興味があったのと、伝統ある女子高だったからなのに。正直あんまり関わりたくないな……と思うと自然と顔が下がってしまう。

「だから楽しみだよー金曜日。西野さんも出るよね？」

話を振られて花ははっとした。えっと、と言いながら手元にある担任から配られたスケジュール表に目を落とす。確かにそこには『二校合同新入生歓迎会 十五時より 男子校内講堂にて』の文字が印刷されていた。急に花は不安に駆られた。

「あ、あのこれって全員参加なのかな？」

他校の生徒と歓迎会なんて、また知らない人とたくさん会うのか。しかも男子生徒と。さっきの自己紹介だけでも大変だったのに……。

「え、出ないの？ でもたぶん強制じゃない？ 学校行事だし」

「そ、そっか……」

思わず笑顔が引きつりそうになるのを花はこらえた。

わかっている、頑張らなきゃいけないのは——そのためにやって来たのだ。

でも人見知り体質がすっかり染みついた花の体はあからさまに反応してしまう。想像するだけで緊張しそうだ。その心のざわめきに重なるように、その時チャイムが鳴った。

「あ、鳴っちゃったね。次って視聴覚室だっけ」

「うん、そうそう。確かガイダンスDVDみるって。場所どこだっけ？ 西野さんわかる？」

「あ、うん！」

花は立ち上がった。

昨日の朝早く来て入学式の前に校内を見て回っていたので場所は知っている。これはチャンスだ——花は次の言葉を言うために息を吸った。

「じゃあ一緒に行こうよ」

だが切り出したのは二人が先だった。花が言おうとしていた言葉。すごく自然に誘われたのがうれしくて、花は大きく頷いた。

「う、うん。ありがとう！」

空が急に晴れるみたいに心がぱつと明るくなった。緊張とは違うドキドキが花を包む。

ペンケースとノートを持って花は二人と一緒に教室を出た。

——金曜日のこととは忘れよう。後で考えればいい。

今のこと集中しよう。せっかく友達ができるチャンスなのだ。

——あとで二人の名前をちゃんと聞かなきゃ。

少し小走りで二人を誘導しながら花は思った。自己紹介の時は自分のことでもいいじゃない、他の人の話を聞く余裕がなかったのだ。

なんだか楽しくやれそう——廊下の窓の外、中庭はパステルピンクに染まっている。始まりを呼ぶ満開の桜が運んでくれたきっかけを花は素直に喜んだ。だが急いで廊下の角を曲がろうとした時、同じように角を曲がって来た誰かと思いい切り正面からぶつかった。

「きゃっ」

二つの悲鳴が重なる。バランスを崩して花は尻もちをついた。その衝撃でメガネがはじ

け飛んだ。

「ご、ごめんなさい！」

慌てて花は顔を上げた。視界がぼやける。相手の顔はよく見えない。でも制服のリボンの色は赤。花と同じ新入生だ。

「いったあ……なんなの、もう」

苛立ちを含んだ呟きに、「だいじょうぶう？」という友人たちの声。だがすぐに妙なざわめきが周囲で起こった。

「え……うそでしょ」

「まじ？　なんで？」

「……なに……？」

ヒソヒソ囁く声に居心地の悪さを感じて、花は急いで落ちていたメガネを拾った。そして視界を取り戻し立ち上がった時——ぶつかった相手とちやうど目が合った。

——わあ……お人形さんみたい。

長い髪のすらりとした少女だった。

憧れのストレートヘアに思わず見とれる。だがそれもつかの間、花は強張ったまま動かない相手の顔から目が離せなくなった。

「えっ……」

思わず声もれる。——彼女の顔は、花とよく似ていた。メガネをとった花に、とてもよく似ていた。まるで鏡を見ているみたいに——。

「……なんで？」

険しい表情のまま少女が呟いた。花もまた同じ気持ちだった。赤いメガネがずれて鼻に落ちた。二人はしばらくお互いを見つめていた。

二日目は四時間目までで学校は終わり、花は徒歩で下宿先のアパートに帰っていた。学院からアパートまで徒歩で二十分弱。駅前にある大きなショッピングモールを通り越し郊外の方へ向かってとぼとぼ歩く。

アパートの大家さんには自転車の方がいいよと言われたのだが、花は自転車が苦手だった。ただ道を走るだけならいいのだ。でも雨の日とか風の強い日とか狭い歩道とか、何か負荷が加わると、絶対にケガをする。昔からそうだ。だから自転車は控えて、多少時間がかかっても徒歩を選んだ。

小さな白い二階建てのアパートにつくと、花は階段を昇り始めた。ワンワン、と犬の鳴き声がある。大家さんの飼っているママ柴のロクだ。

大家の有川さんの家はすぐ隣の敷地だ。奥さんと旦那さんと高校生の息子の三人暮らし。アパートの管理は奥さんの百合子がしていて、一人で暮らす花の面倒も何かと見てくれる。

咲と百合子は昔からの知り合いらしく、百合子は花のことも知っていた。入学が決まって咲とアパートの下見がてら挨拶に来た時、「大きくなったわねえ！」と言われた。会ったのは赤ちゃんの頃だというから花にはまったく覚えがなかったけれど。百合子は元気で気さくな人で花はすぐに好きになった。

階段を上がってすぐの角部屋のドアを開け、花は中に入った。

「ただいまあ」

呼びかけてももちろん返事はない。返ってくるのは静寂と、まだ慣れない新しい部屋の匂いだけ。

——やっぱり寂しいな……。

部屋の入り口に立って花は小さく息をついた。

東京でも花は家にほとんど一人だった。でも咲が帰ってくるってわかっていたから、寂しいと思ったことはなかった。でも今はこの六畳一間の世界が果てしなく広く思える。

「……早く慣れればいいのにな」

一人の生活も、新しい学校も。昨日今日は特に、不安と緊張と期待と色んな気持ちがあつたから……。まぐるしく入れ替わってクタクタだ。それに今日はあんなことがあつたから——。

廊下で起こったあの出来事。自分とそっくりな顔をした女の子に出会うなんて。

世の中には三人自分と似た人がいるって聞いたことがあるけれど……。

学校指定のカバンを置いて花は部屋の隅にある小さなドレッサーの前に座った。

メガネをはずして鏡に顔を近づける。こうしないと裸眼では自分の顔も見えないくらい花は目が悪い。

「……偶然なのかな？ それとも、私ってよくある顔？」

一つ一つのパーツをぺたぺたと手で触って確かめる。——でも似すぎていた気がする。もちろんスタイルや髪型や雰囲気はまるで違っていたけれど。

「名前聞けなかったな」

あの後通りかかった教師に叱られて慌てて教室へ向かったので、結局あの子が誰なのか

わからなかった。同じ一年生ならまた会うこともあると思うけれど。

「……ママに話してみようかなあ」

咲は信じてくれるだろうか。こんな不思議なこと。でもどんなことでもちゃんと聞いてアドバイスをくれるはずだ。咲は花の母親でもあり、唯一の親友だから。

「でもとりあえず腹ごしらえかなあ」

お昼ごはんを要求するおなかをさすり、花はメガネをかけた。

買い置きしてあったカップラーメンで簡単にお昼をすませて、花はショッピングモールに買い物に行くことにした。

駅の近くのショッピングモールはまだ出来たばかりらしく、平日なのに混雑していた。スーパーから本屋まで色々なお店があり、充実している。足りない生活用品だけ買うつもりだったのに、結局二時間ほどうろろして花はアパートに戻った。

両手の荷物を玄関に降ろして一息ついた時、部屋の方から音楽が聞こえてきた。

携帯の着メロ。咲からだ。慌てて部屋に駆け込み、テーブルの上に置き忘れていた携帯を取った。

『もしもし、花あ？』

のんびりと、少しだるそうな咲の声。たぶん起きたばかりなのだろう。

「おはよう、ママ。今日はもう起きたの？ 後でモーニングコールしようと思ったのに」

『うん、そう。なんか勝手に目が覚めるのよねえ最近。やっぱ一人って寂しいわねえ』

「ママ、彼氏もいないもんね」

同じこと思ってたんだ、と花は笑った。

まだ日は浅いけれど、離れて暮らすようになってから咲は何だか子供みたいだ。自分で送りだしたくせにやっぱ寂しいらしい。仕事に行く前には必ずこうして電話がくる。

『どうだった今日は。もう授業は始まった？』

「うん、明日から。今日は色んなガイダンスだけ」

『そっか。ねえ、生活は平気？ 体調悪くない？ あ、クラスはどう？ 友達はできた？』

矢継ぎ早に質問され、電話口で花は苦笑した。

「うん、がんばってるよ。自己紹介はちよつと失敗したけど……クラスの子と話したよ」

『ほんと？ やったじゃん、花！ さすがママの子！ みんなに報告しなきゃ』

「えっ。大げさだよ、話しただけで……」

みんなというのは咲のお店のホステスとスタッフのことだろう。

咲は絆をととても大切にしている。お互い以外に身寄りのない花たちにとって、彼らは家族のような存在だ。誕生日やクリスマスもいつも一緒に祝う。花が女子高に合格した時もサプライズパーティをしてくれた。

『そんなことないわよ、大事なことよ。その子たちと友達になれるといいね。大丈夫よ、いつも笑顔の素直な花なら。きつとすぐに溶け込めるわ』

「うん……そうなるといいな」

今日はすぐくうれしかった。こんな日が明日もくれればいいと思う。咲の励ましに支えられながら、花は小さく頷いた。

『あ、ねえ聞きたかったんだけど、今も昇星学院との交流ってあるの？』

思いついたように咲が話題を変えた。それはあまりうれいしい話題ではなかった。

「交流って言うか……金曜日に歓迎会があるみたい。なんかみんなはしゃいでた。その学校の生徒と知り合いたくて入学する子もいるんだって。なんか……変だよね」

『あはは、ママがいた時だつてそうだったわよ。勉強そっちのけでみんな男の子に夢中。でも高校生ってそんなもんじゃない？ それにもともと女子高つて花嫁修業みたいな授業が多いし。お裁縫とか、マナー教室とか』

「えっ、ちよつと待つて。じゃあなんでママはここを勧めたの!？」

『えー、花にもそういうの必要かと思つて。人生の勉強つていうの？ 花はちよつとマジメすぎだから。勉強も大事だけど、人間には心のふれあいも大事なの。せつかくだからカッコよくてセレブな彼氏でもつくつて楽しい高校生活送つてほしいじゃない？ あ、積極的になね！ 人気のある子はすぐとられちゃうから』

「えっ!?! いいよ私は！ そういうの苦手だし……自分にも自信ないし。それに女の子つてコワイもん。いじわるだし」

「それは花がまだ出会つてないから。大丈夫、本物の王子様はかつこよくて強くてやさしいから」

「……王子様つて。あのねママ、おとぎ話じゃないんだから」

「何言つてんの。女の子の幸せはね、まず王子様に出会うことだよ」

映画の台詞みたいに咲が言う。これは咲の口癖だ。咲はすぐロマンチストなところがあつて、時々こういうことを恥ずかしげもなく口にする。でも花には苦手な話題だ。

「いいの、私は。今はそれどころじゃないし……。あ、そうだママ。今日ね、大変なことがあつ

て——

ふと思い出し花は午前中の出来事を話そうとした。その時玄関のチャイムが鳴った。

「あれ、誰か来た」

『あら、じゃあ切ろうか？ ママも支度するし』

「あ、うん。じゃあまたね」

——誰だろう？

不審に思いながら携帯を切って花は玄関に向かった。のぞき穴だとよく見えないのでチェーンをかけたままそつとドアを開ける。

「あ、いた。よう、ちよつといいか」

その隙間からひよいと顔を覗かせたのは、大家の息子の十夢^{とむ}だった。低い声にびくびくしながら花は「こ、こんにちは」と小さく返しチェーンをはずした。

有川夫妻の一人息子の十夢は花の一つ上の十七歳。N市の公立高校に通っている。

ドアを開けるとぬつと大きな体が近くなった。バスケットボール部所属の十夢は背が百八十センチ近くある。その威圧感に百五十センチちよつとの花は飲み込まれそうになる。

「悪いな、急に。なんかかーさんが呼んで来いって……ってすげーなそのケータイ」

そう指差され、花は自分の手の中を見た。

ピンクのラインストーンでデコレーション携帯電話は母からの入学祝いだ。全部スワロフスキーというクリスタルなので確かに異様なほどキラキラしている。

「あんた地味なのに、けっこー持ちモノはハデなんだな」

じろじろと見られて花は決まりが悪くなる。思わず花は携帯を後ろに隠した。

十夢は結構ずけずけと物を言う。

朝ご飯と夕飯は百合子の好意で花は有川家とつている。だから十夢とは面識十分はあるのだが、いつもびくびくしてしまう。

「ごめんね、無愛想で。でも怒ってるわけじゃないのよ。もともとこうなの」と百合子は言っていたが、どうしても怒られているような気分になる。

「あ、あの大家さんが呼んでるって……」

この状態から抜け出したくて花は思い切って聞いた。ああ、と十夢が思い出したように話題を戻す。

「そうだ、そんなことどうでもいいんだ。母さんが呼んでる。なんか客が来てるって」「え……？ お客さん？」

心当たりがなくて花は首を傾げた。いったい誰だろう、知り合いなんていないはずなのに……。

とりあえず花は十夢について行ってみることにした。

「あ、花ちゃん！」

有川家の玄関につくと、奥から百合子が小走りにやってきた。

「ごめんね、来てもらって。どうしても花ちゃんに会いたいってお客さんが来てるの。塚本さんっていう地主さん。花ちゃんと同じ学校にお孫さんがいるって……心当たりある？」

「塚本さん……？」

心当たりがなくて花は首を横に振った。クラスの子だろうか？ でもその人の家族がどうして花の下宿先を知っているのだろうか？

「ともかく、ちょっと会ってみてくれる？ 私もお茶を淹れたら行くから」

百合子に促され、花は靴を脱いで廊下に出た。そして突き当たりの和室に通された。部屋の中央にあるテーブルの向こう側には見覚えのない女の人が二人座っていた。

「……驚いた。本当だわ」

花が入って行くと四十くらいの中年の女性の方が口元を押さえた。

「圭祐によく似てる。ねえ、お母さん」

そう隣の女性に呼びかける。お母さんと呼ばれた厳格そうな老年の女性は、無表情のまま花をじつと眺めそして口を開いた。

「あなたが西野花さんね」

ひんやりとした声音に「はい」と花は小さく頷き、二人の向かいに座った。

「私は塚本と言います。孫のありさからあなたのことを聞いてきました。今日偶然廊下で会ったそうね」

廊下——それを聞いて花の脳裏で辻つまのあう話の一つだけあった。学校でぶつかったあの少女のことだ。花とそっくりな顔をした——あの子は塚本ありさという名前なのだ。

「あ、あの」思い切って花は切り出した。

「どうして私に会いに来たんですか……？ あの、もしかして今日そのありささんとぶつかったからですか？ け、けがでもしたとかか？」

まさかそれで訴えにきたのでは——思いついたことを口にして血の気が一気に引いた。だが老婦人は「いいえ」と静かに否定した。

「あなたに会いにきたのは、確かめたかったからです。でももう必要はないわね。確かに圭祐の子のようだよ」

「……え？」

「あなたの母親は、西野咲さんというんでしょう？」

「は、はい。そうですけど……」

——どうしてお母さんを知ってるの？

花は目を見張った。驚きのあまり言葉が出ない。そうしていると老婦人の隣の女性が我慢できないと言った様子で口を挟んできた。

「やっぱり、あの女の子なのね！ 弟をたぶらかして連れていった——。まさかと思ったけど本当に子供がいたなんて。ねえ、お母さん！」

——え？ ちょっと待って……。

花は困惑した。

話が見えない。子供？ たぶらかす？ わけのわからない単語が頭の中を飛び交う。

「……落ち着きなさい、多恵（たえ）。花さん、学校から一人で暮らしていると聞いたけど、今咲さんはどこにいるの？」

興奮した様子の多恵を一瞥し、端然と座ったまま老婦人が花を見た。

「お、お母さんは東京にいます。お店を持っていますので……」

「お店？ ……そう、水商売をしているっていうのは本当なのね。じゃああなたはどうし

てわざわざ地方の学校へ来たの？」

「え……と、お母さんに勧められてです。母校でいいところだから……」

「うそだわ、そんなの」再び多恵が口を出した。

「絶対に偶然なんかじゃないわよ。わざと寄越したんだわ、それでお父さんが死んだらちやつかり遺産相続に名乗りを上げる気なのよ！」

「やめなさい、縁起でもない。本当に聞いてないんでしょう。あの娘のやりそうなことだわ。こんな風に今さら知らせてくるなんて——」

「あ、あの……どういうことですか？ お母さんと知り合いなんですか？」

「どうやらこの二人と咲とは何らかの関係があるらしい。意味不明なやりとりの中でそれだけはわかった。」

「知り合い？ ……ええ、そうね。よく知っていますよ」

花の質問に、老婦人の眉間がぴくりと動いた。だがその小さな変化は一瞬で消え失せた。「あなたのお母さんは、昔このN市に住んでいたの。そして私の息子の圭祐と駆け落ちして姿をくらました」

「え？」

何を言われたかわからなくて花はぼかんと口を開けた。老婦人は冴え渡る声で続ける。

「あなたは、塚本家の跡取りだった私の息子、圭祐の娘なの。つまり私の孫ということになります」

「……はあ」

翌朝、学校の下駄箱の前で花は何度目かのため息をついた。

昨夜はあまり眠れなかった。ずっとぐるぐる考えていて。

あの後百合子がお茶を持ってきたところで、「これで失礼します」と老婦人とその娘は帰って行った。帰る時は二人とも、花のことをちらりとも見なかった。

すぐに部屋に戻って花は咲に電話をかけた。でも出かけた後らしく出なかった。その後待っていたが結局電話は鳴らなくて——今朝確認した時も着信はなかった。

——あの人たちが私のお父さんの家族なの？

顔も知らない父親。咲は時々触れるだけで父のことについては多くを語らない。小さい頃から、子供心に聞いてはいけないことなのだと思っていたから花も訊かなかった。知っているのは花のようにメガネをかけていたことと、「ケイスケ」という名前だけ。あの人たちが口にしていた名前と一緒に。

——どうしてママは話してくれなかったの？

そんな人たちがいるなら。しかもこのN市に。知らなかったわけではないはずだ。もしかして花をこの学校に入れたがったのも理由があったのだろうか。

——ああ、考えるとよけいわかんなくなる。

不安と戸惑いがおさまらない。もうずっとそわそわして落ち着かないのだ。

とりあえず上履きを履いて靴をしまうと、花は教室へ向かうことにした。だが振り返った直後、数人の生徒に行く手を塞がれた。

「ちよつとごっつ。」

その中から進み出てきたのは、昨日ぶつかった長い髪の少女、塚本ありさだった。自分

とよく似た顔立ちに花は改めてはつとずる。

「昨日、おばあちゃんから聞いた。あんた、わたしの従姉妹なんだってね」

朝の挨拶どころかニコリともせず、ありさがつつけんどんに言った。見下すように花をじろじろと見回す。彼女を囲む友人たちも冷やかな視線を花に無遠慮に向けてくる。

「でもわたしは認めないから。あんたが突然現れたせいでうちは大変なんだから」

どん、と肩を押されて花はよろめいた。

「あんたの父親の圭祐おじさんはわたしのお父さんの双子の兄なの。だけどあんたの母親のせいで勘当されて出て行ったんだって。だからうちの家族はあんたの母親を恨んでるの。それなのにあんたが現れたから、すごいメーワク。もう変なウワサになってるし。わたしの株が落ちたらどうしてくれるの」

響き渡るありさの声に通りがかる生徒たちがチラチラと視線を送ってくる。突然インネンをつけられて花はカバンを抱きしめて固まった。

「あ、あの、わ、私——」

「とにかく、認めないから。ていうか、さっさといなくなつてよね！ いこうみんな」

花が今まで一度もしたことがないような目つきで睨みつけ、ありさは長い髪を翻した。

取り残された花は、呆然とその場に立ち尽くしていた……。

その後教室内の空気もおかしいことに花は気がついた。

皆の視線が痛い。なんだだろうと思って顔を上げると目を逸らされる。でもひそひそと嫌な感じの内緒話がつつと続いているのだ。

それに昨日話しかけてくれた二人の様子も変だった。

教室に入ってすぐ姿を見つけたので「おはよう」と声をかけたら、そっけなく返されて背を向けられてしまった。

何か悪いことでもしてしまったのかと焦ったが思い当たる節はない。それともやはりおどおどしたりまごまごしている自分の挙動を軽蔑したのか——後者だと勝手に重い花は落ち込んだ。

だが翌日、翌々日と時間がたつにつれ、理由が別にあることに花は気付いた。きつかけは偶然耳にした“隠し子”という言葉。

あれはきつと自分のことだ。ありさとの一件でおかしな噂がたっているのだろう。

この学校の生徒はほとんどが地元出身者で中等部からの持ち上がり。そういう狭い世界では、噂話は過剰にデコレーションされてどんどん大きくなっていく。

しかもありさの家・塚家は由緒ある旧家で、学院内でも彼女は影響力のある存在らしい。みんなの態度がよそよそしいのはそのことが関係しているようだった。

——隠し子なんて、そんな言い方ひどい。

ロマンチストな母いわく、父と母は大恋愛の末に一緒になったのだという。結婚生活は短かったけれど……幸せだったと。

自分は母の言葉を信じてる。咲が父を騙したなんて、それで父が家を追い出されたなんて嘘だ——。

結局咲からは連絡があつたけれど、花は言うことが出来なかった。何度も聞こうと思つたけれど、言いだそうとすると勇気がしぼんでしまうのだ。大事なことなのに、とても大

事なことなのにこの話をしたら、何だか咲との関係が変わってしまいう気がして。咲から笑顔と元気を奪ってしまうような気がして。

やっぱり花は一人でいることを選んでしまったのだった。

生徒たちで溢れかえる講堂内は笑い声とざわめきに満ちていた。

昇星学院内の講堂は歴史を感じさせる重厚な木造建築だった。窓には幾何学模様のストンドグラスがはめこまれ、教会のような雰囲気も持っている。

壁際にずらりと並べられた椅子の一つに花はぼつんと座っていた。

昇星・優華合同の新生歓迎会が始まってすでに一時間ほど経過していた。

フロアには両校の生徒たちが思い思いに散らばり会話を楽しんでいる。今日は立食形式になっていて、軽食や飲み物が用意されたテーブルもある。まるでパーティみたいだ。楽しそうなその光景を花はぼんやりと眺めていた。

——別にいいんだ。

大勢の中に一人は慣れてる。いつものことではないか。でもあとどれくらい我慢していればいいんだろう。

——なんでこんなことになっちゃったんだろう……。

ただ楽しい学校生活を送りたいと思っただけなのに。思わぬところから事件はやってきて、花を巻き込んだ。

“隠し子”の噂話は校内にあつという間に広がったようだった。どこへ行ってもひそひそ囁かれ、じろじろ見られる。

どんな風に話されているのかは知らない。でも雰囲気、花に不利な展開になっていることはわかる。

心配した担任の教師は「気にすることはない」と励ましてくれたけれど、特に何か対処してくれるわけではない。相談に乗るとは言ってくれたけど、何を話せばいいのか。

花だって状況をよく理解できていないのだ。

ありさともう一度話したいと思ったが、すれ違えば睨まれるしとても無理だった。その顔からは花のことを心から嫌悪しているのがうかがえた。

——ずっとこんな状態なのかな……。

このまま卒業まで。それではせつかく人生を変えようと思った意味が全然ない。

頑張れると思ったのに。でも顔を上げればみんなの視線が怖い。逃げ出したくなる。早くも花は挫折始めていた。

「ねえねえ！ ほら、あの人じゃない？」

その時近くにいた優華の生徒たちの声が花の耳に飛び込んできた。

「あ、そうそうあの人だよ、星流様！ わー超かっこいいじゃん！」

「ちょっと近くいって見ない？ もしかしたら話せるかもしれないよ」

——スバル様？

女の子たちがきゃあきゃあ騒ぎだす。

誰のことだろう、と花は気になる。でもちょうど彼女たちの背中に向こう側は見えない。

「すごいお金持ちなんだってー。お父さん政治家だし。たまにテレビで見るよね」

「超頭もいいんですよ？ 生徒会の副会長だし。それで顔もいいってすごいよね」

——そ、そんなにすごい人がいるんだ。

壁際で小さくなりながら、花はこっそりと彼女たちの話に耳を澄ませる。

どうする、どうする、と彼女たちは真剣に相談しあっている。その星流様というのはいぶん人気のある生徒らしい。

どんな人だろう。かっこいいって芸能人みたいなのかな。

それならちょっと見てみたいと首を伸ばそうとしたが、花はそこではたと思いつまらな。

——でも、私には関係ないか。

すつと気持ちが冷静になっていく。そんな人は別世界の人のだ。きつと関わることはない。興味を持ったって無駄なんだ。

肩の上でやわらかくカールする髪の手を花はつまんで眺めた。

咲に言われた通り、毎朝髪はセットするようにしている。放っておくとぼさぼさになってしまうから、ドライヤーを使つて。大変だけどそうすると確かにきれいな巻き髪になる。

でもそんな風にしても、結局花は花のまま。

せめて咲のように社交的な性格だったら、もう少し自信が持てるのに。

積極的になんて無理な話だ。花はいつも待つことしか出来ない。

でも誰も気付いてくれない。大勢の人間の中では花なんかすぐに空気の一部みたいに溶け込んでしまう。

「あ、待って。でも星流様って塚本さんと仲いいよね」

盛り上がり過ぎていた少女たちの一人が思い出したように言った。

「あーそういえば中等部の時から狙ってたよね。生徒会に入ってたのも星流様目当てだっ

たつて聞いた。じゃあヤバいかなあ」

どうする？ と今度はテンションの低い相談が始まる。

塚本、という名前にひやっとして、花は反射的に立ち上がった。

後ろにいるのを気付かれたらまた何か言われるかもしれない。そそくさと花はその場を離れた。

別に逃げることはない。悪いことをしたわけではないのだから。気の弱い自分が情けない。

何か飲もうと花は近くの飲み物が並ぶテーブルへ行った。オレンジジュースのグラスを一つとつて人混みを抜ける。そして人気のないところを探しきよろきよろしていると、

「なんだ、あんた来てたの」

冷やかな声に呼び止められる。ありさだった。この間と同じ取り巻きの少女たちもいる。「なんでいるの？ すごい目ざわりなんだけど」

「だ……だつて学校行事だから……」

視線を泳がせてもごもごと言い始めると、容赦なくありさの声が覆いかぶさってくる。

「だったら目立たないところにいなさいよ。あんたと顔が似てるなんてバレたらすごい恥ずかしいから」

その言葉にかつと顔が熱くなった。どうしてそんな風に言われなきやならないんだろ——まるで自分が全部悪いみたいに。すぐく理不尽だ。そう思ったら自然と花はありさに言い返していた。

「あ、あの、そこまで言わなくてもいいんじゃないですか。私別に……あなたに迷惑かけ

るつもりは」

「そうなる前に消えろって言うてんの」

花の手からありさがグラスを奪い取った。そしてその中身をためらいもなく花に向かつてぶちまけた。

「あっ」

白いシャツが、制服の上着がたちまちオレンジジュースまみれになる。甘い匂いが鼻をかすめ、頭が真っ白になった。

「やだ、きたない」

取り巻きたちが、あははと笑う。ちょうど囲まれていたので他の生徒たちには見えない。それをいいことに花をその場に放置して、ありさたちは笑いながら通り過ぎて行った。

——なんで？

花は震える唇を噛みしめた。

なんでこんな目に合わなきゃいけないの？

ちょうどその時通りがかった男子生徒の肩とぶつかり、花はよろめいた。足がぐくつとなったせいでバランスを崩し、寄木の床の上に座り込んだ。

「うわ、なんか腕についた！ きったねえ」

ぶつかった男子生徒が声を上げた。周りがざわざわとし始める。床についた手を見つめたまま、花は動けなかった。

——もう、最悪。

顔が上げられない。恥ずかしい。

ぷつと誰かが吹き出した。それを皮切りに、くすくすと笑い声が広がっていく。
——いつそのこと消えてなくなりたい。

どうしようもない悲しさが花の胸に込み上げた。色んな気持ちがごちゃまぜになっていく。目頭に熱いものが浮かぶのを止められなかった。だがそこへ、ふわりと優しい声が降りてきた。

「——どうしたの？」

コツコツと近づいてきた足音が近くで止まる。

「大丈夫？ 立てる？」

問いかけとともに差し出されたのは、誰かの手。

涙を飲み込んで花はゆつくりと顔を上げる。かがみこんで手を差し伸べてくれていたのは、きれいな顔立ちをした男の子だった。

『女の子の幸せは、まず王子様と出会うことよ』

急に咲の言葉を思い出した。目の前の男の子があまりにそれにびつたりで。

「星流様」

思わず見とれそうになると、近くで誰かが呟いた。その名前に花ははつとする。

——この人が、“星流様”？

どうして自分の目の前にいるんだろう。

「立ってる？」

きれいなこげ茶色の瞳にもう一度問いかけられて、花は頷いた。少年の手に掴まると、力強く引っ張り上げられる。

「……負けちゃだめだよ」

腕から手を離すのと同時に、ぽつりと星流が言った。え、と花は目を瞠る。ぽちりと目があうと、星流が小さく微笑んだ。

ふいに流れ星のような一瞬の何かが、胸をかすめたような気がした。

——なんだろう、この感じ……。

緊張するどきどきとはちよつと違う、それは——不思議な気持ち。

あの日鏡の中に見えた始まりの予感に、花が出会った瞬間だった。



NONSTOP



やるうぜ!

土本強

Illustration:U35

田尻すなお

自称「どこにでもいる平凡な高校生」。昔ゲームをやっていたことはあったが最近は無沙汰。



横井ひろこ

今年の春大学を卒業したばかりのぴちぴち女教師。22歳独身。



中村ひかる

孤高の眼鏡。なぜか4年以上前のゲームはよく遊んでた。プログラムはほとんどしたことがないが、コンピュータに興味はある。

第一話 ロケットの夏

市立中央高校、一年二組。

昼休みの教室はそれなりに人で賑わっていた。

副担任の横井ひろこは窓際で窓越しに中庭を見ている。微妙に太った体をきつそうなタイトスカートのスーツに押し込み、喧噪を聞くともなく聞いていた。

男子生徒はだいぶ運動場や体育館に出かけている。女子生徒も余り多くはない。残っている人間と言えば未だに弁当や購買部のパンをかじっている者、しゃべっている者。よっぽど声の大きい人間はいない。

ゴールデンウィークも明け、入学して一ヶ月たったクラスの中にはちよつとした派閥ができてあがりつつあった。緩やかにグループが作られ、休み時間もつれだつてどこかに行っているらしい。教室にいるのはどちらかというところ一人になってしまった者ばかり。

教室の後ろの方の席では田尻すなおがちよつど最後のパンを口に放り込んでいた。何となくゆっくり咀嚼してほとんど話したことのない隣席の男子生徒を見る。背が高く、堅そうな眼鏡をかけている。確か中村ひかるという名前だった気がする。

やろうぜ！

中村は熱心に雑誌を読んでいた。カラフルなページ。どこかで見たことがあるようなイラスト。ただ、そのイラストをどこで見たのかは田尻には思い出せない。

「よお、田尻、体育館にバスケットしにいかねえ？」

不意にかけられた声に田尻は振り向いた。教室の後ろの扉に知人がいる。名前は思い出せないが、何度か一緒に昼休みにスポーツをやったことがあるような気もする。

「いくいく」田尻は首だけ中村に向き直った。中村はやつと田尻の存在に気づいたのか雑誌から顔を上げて田尻を見た。「バスケ、一緒にやらない？」

「いや、いい」中村はすこしだけ眉をひそめてから答えた。不機嫌そうではないが、予想外だったらしい。「バスケは苦手なんだ」

「そっか」

田尻は立ち上がった。そのまま教室の後ろの扉の男子生徒の元へと歩く。

副担任の横井はその風景も何となく見ていた。特になんの感動もない。

☆

翌日。昼休み。

今日も横井は窓際前方の席で窓越しに中庭を見ていた。天気は晴れ。五月に入ってからまだ一度も雨は降っていない。

教室はいつも通りの緩やかな喧噪につつまれている。教室に残っている生徒は大きな声を出すこともなく、まだ春の気分の抜けない日差しを浴びている。

田尻は弁当箱に残っていた最後のおかずを口に運んだ。ちくわの海苔揚げ。塩味がついていておいしい。また今日も何気なく中村の方を見る。中村は昨日とは違う雑誌を読ん

やろうぜ!

いた。色味や編集の感じは違っているが、どこことなく昨日のものに似ている気もする。「グラウンド使えそうなんだ。今日はサッカーやろうぜ!」

教室の後ろの扉から声がした。昨日と同じ生徒。走ってきたらしくすこし息が乱れている。

「いくいくいく。久しぶりだなー」田尻は弁当箱を閉じて立ち上がった。再び中村の方を見て声をかける。「中村はどうする?」

「いや、俺はいい」中村は今度は声をかけられるのを予想していたらしい。口の端をゆがめて自嘲的に吐き出した。「サッカーは苦手なんだ」

「そっか」

田尻は立ち上がった。すこしだけ肩を回しながら教室の後ろの扉へと歩く。

副担任の横井はその風景も見ていた。

☆

翌日は雨だった。いつもは表に出ている生徒も今日に限っては教室にたむろしている。雨音に紛れていつもより多い声が教室内に渦巻いている。

今日は副担任の横井は教室にいなかった。昼休みあけの五時限目に他のクラスでの数学の講義があるらしい。

田尻の今日の昼食はサンドウィッチだった。ハンカチにつつまれた最後のトマトサンドを手にとってゆっくりと咀嚼する。午前中の間にトマトの汁がパンにしみ出していた。田尻は飲み込んでからサンドウィッチを包んでいたハンカチで手を拭いた。

田尻がいつものように何気なく隣を見ると声をかけることを予想していたらしい中村と

目があった。

「今日はどこか行かないのか？」

「いやまあ」 田尻は頭をかいた。「スポーツって気分じゃない日もあるよね」

田尻はそのまま中村の手元の雑誌を見た。昨日とはまた違うように見えるが、その写真には見覚えがある。

「ところで、それ……」

中村は雑誌を取り上げて表紙を見せた。ファミ通。2006年40号。

「昔のゲーム雑誌。楽しいぜ」

「へえ。中村、ゲーム好きなんだ」

「まあ、好きと言えば好き、かな」

田尻は席を寄せて中村の隣に来た。中村は雑誌を机に置くと田尻に相對するようにずらす。

「うわー、懐かしいなー。あー、これ持ってた持ってた。好きだったなー」

「ほう？」 中村は器用に片方の眉を持ち上げて雑誌を眺めた。DVDで表現されたアクションゲーム。グラフィックの雰囲気からすると携帯機ではなく、テレビにつなぐタイプのゲームらしい。「また渋いものを知ってるな」

「あ、そうなの？」

「それほど売れたタイトルじゃない」

中村はページを雑誌冒頭の売り上げリストへとめくった。いくつか見覚えのあるタイトルと一緒に、週刊販売本数と累計販売本数が載っている。

やろうぜ！

「ほら。ここ」中村が指さした先にはそのゲームのタイトルが載っていた。「6位。売れていると言えば売れているが、扱いは決して大きくない。「この週で6000本。累計で8万本しか出てない」

「それって少ないの？」

「この年もっとも売れたタイトルが、300万本。100万本売れたタイトルだって何本かあるはずだ」

「中村詳しいなー」

田尻は感心した目で中村を見つめてからページへと目をおろした。

「あー、でもわかるなー。楽しかったんだけど、もうちょっと何とかならないかって感じだったんだよね」

「ほう？」

中村は再び片方の眉を上げた。目には興味を示す光が輝いている。

「やつぱさ、強くなった感触ってほしいじゃん。ただ数字やメッセージでパワーアップしました！ っつのじゃなくて、こう、指で強さがわかるような」

「わかるのか？」

「わかるさ！」田尻は勢い込んで叫んだ。周りにいた生徒が怪訝な顔をするのに全く気づいていない。「明らかに強い機体と、弱い機体ではボタンの感触だって全然違うし、もう、触ってるだけで自分が強い！ っで感じが伝わってくるもん」

「それは、なんだ？」中村はすこしだけ身を乗り出した。「何か電波でも出てるのか？」

「違う違う」田尻は口に笑みを浮かべ、軽くため息をつきながら答える。「こう、ゲームの

中に自分がいるとするじゃん。そうすると自分の指示で動いているわけだよ。機体の強さやスピードが、自分の手の先から伝わってきて、それで動くっていうか。だから、ゲームの中で強いってことは、自分がほんとに強いってことで、そんなこと言葉で説明しなくても体で感じ取れるわけで……」

「……」

中村は田尻をじっと見つめていた。怒っているわけではないが、その目には何か強い意志を宿している。

「……あ、ごめん。何言ってるんだろ僕」

中村はいつの間にか立ち上がっていた椅子に座り直した。中村はしばらく田尻を見つめたあと、雑誌のページを見つめて眉をひそめた。

すこしの時間がたった。田尻が薄笑いを浮かべて頭をかいていると中村はおもむろに顔を上げた。背筋を伸ばして田尻を射貫くように見つめる。

「やってみるか？」

「え？」

「ゲームだよ。田尻の感じをゲームにすれば、楽しいんじゃないのか？」

田尻には中村の言っていることが理解できなかった。いきなり宇宙語を話し始めたかのように感じる。確かに言語としてはわかる。だが、田尻の世界にその発想はなかった。

「ゲームって、作れるの？」

「作れるさ」中村はこともなげに答えた。「誰かが作ったんだからゲームになってるんだろ？」

やろうぜ！

「そりゃ、そうかもしれないけど……」

田尻は必死に反論を考えた。反論する理由なんか無いのかもしれないが、自分の世界観と異なるのでとっさには言葉が出てこない。

「ほら、プログラムとか、いろいろあるじゃん」

「プログラムは俺がやる」

中村は高らかに宣言した。田尻はますます答えることができなくなる。

「え……？　できるの？　高校生なのに？」

「俺が初めてプログラムを組んだのは小学五年生の時だ」

中村はそこまで言うてから、すこし歯切れ悪く自嘲した。

「もつとも、ゲームが完成したことは一度もないが」

「へえ」田尻の心に何かが引つかかった。「凄いなそれは。小学五年生ってことは、ちょうどこれが出た頃か」

「俺もやってた」中村はそこまで言うてからすこし考え込んで続ける。「たぶん、俺も田尻と同じように感じてたんだと思う。それがどうしてなのかはわからなかったけど」

「僕だってわからないよ」

「だから、さ」中村は口元に笑みを浮かべた。「作ってみようぜ。田尻がいれば、今度こそ完成できそうな気がする」

☆

中村の家は森の間にある小さい一軒家だった。二人が家に着いた時、家には人が無く、中村は鞆から鍵を取り出して家の引き戸を開けた。

まだ外は明るい。中村は食堂の隅にあるデスクトップパソコンを立ち上げると掃き出しのサッシを開けてから冷蔵庫に向かい、牛乳のパックを取り出した。

「牛乳でいいか？ 麦茶がいいか？」

「ん。牛乳がいいな」

田尻は食卓から持ってきた椅子の上に座ってパソコンの立ち上がるのを見ていた。起動画面に見覚えがない。何となく古そうに見える。

じきログイン画面になる。中村は器用にキーボードのあちこちを同時押しした上でログインした。パソコンのハードディスクがかりかりと大きな音を立てる。

中村はそのままデスクトップにあるアイコンをダブルクリックした。タイトルのスプラッシュスクリーンが出てまたしばらくハードディスクが音を立てる。

「これは？」

「プログラムを作るためのプログラム。Forteというらしい」

「ふおるて。なんか強そうだな」

何がどう強そうなのかわからないまま適当に田尻が答えた。

「これでJava言語のプログラムを作る」

しばらく時間がたつて、画面全体を覆う大きなウィンドウが開いた。見慣れない画面。ボタンひとつとっても何か違和感がある。

中村はいつの間にか本を手にした。教則本らしい。表紙にはちよつと幼稚で時代遅れのイラストが載っている。

「ちよつとやってみよう。一から作るのは久しぶりだからいろいろ忘れてる」

やろうぜ！

「僕なんかこのソフト自体見るの初めてだよ。 どうやるの？」

中村はマウスを片手に手慣れた操作を始めた。 忘れていたようには見えない。

☆

「とりあえず、こんなもん……か？」

中村は言いながらFontのウィンドウの中のあるボタンをおした。

しばらくの間、教則本を元にいろいろためしながらプログラムのソース（元になる文章）を打ち込んでいった。 初めのうちはプログラムの起動の方法すらもわからない二人だったが、徐々にその動きはスムーズになっていった。

ハードディスクがかりかりと動き、そのうち小さなウィンドウが現れる。 中にはパソコンの中に入っていた適当な画像が表示されている。

「おー、すげー。 絵が出た。 コントローラで動く？」

「いや……まだだ」

中村は肩を落として首を振った。 その後、いつの間にか食堂の中が暗くなっていることに気づいて食堂の照明のひもを引いた。 円形の蛍光灯が二本、数回瞬いた上で点灯する。

「もうこんな時間なんだな」

点灯を待たずに中村は食堂の壁に掛かっているアナログ時計を見た。 六時十五分。 五月はまだ日は長くない。

「うわ、やべー。 今から帰っても怒られそうだ。 遠いんだよな、ここ」

「すまない」

顔を伏せた中村に慌てて田尻が答える。

「中村が悪いんじゃないよ。でも、もう少しやっていきたいなあ」

「そうも言っていられないだろう」中村はウィンドウの中のプログラムソースファイルの文字を眺める。今ならば一行一文字とも何をやっているのかわかる。「田尻の家のパソコンは？」

「Forteはないなあ。というか、うちに来ても使わせてもらえないよ。ねーちゃんたちにとられてる」

「田尻には姉がいるのか」

中村が意外そうにつぶやいた。

「まあねー。帰宅部ばかりだから夕方も早くから家でごろごろしてるよ」

「そうか……」中村は再び眉を寄せて考え込んだ。「学校はどうだろう？」

「学校で作るの？」田尻はあつけにとられた。「作れるの？」

「Forteはフリーウェアだからどのパソコンでも無料でインストールできる。それがどこにあってもいいだろう」

「あ、いやいや、そうじゃなくて」慌てて田尻が付け加えた。「学校のパソコンって、使えるの？」

「それはわからないけど、何力所かにあるんじゃないかなかったのか？」

田尻は入学当時に案内された校内施設を思い返した。何力所かパソコンが置いてあって、だいぶ人が集まっていた気がする。

「ネット使えるところは、凄く混んでた気がするんだけど」

「だよな」中村はため息をついた。「どこかにパソコン余ってないかな」

やろうぜ！

だいた古そうなデスクトップパソコンを眺めてつぶやく。

「これだつて結構古いんだが、これぐらいのでいいんだけど」

☆

翌日、最後の授業が終わって、担任のホームルームがおざなりに行われた。例によつて副担任の横井は歳のいった担任の横について何も言わずに立っていた。余り覇気がない。

ホームルームはすぐに終わり、下校前の掃除の時間になった。掃除の時には担任はいなくなり、横井だけが残される。横井は掃除を邪魔するでもなく、かといって手伝う気配も見せずに教室に残っていた。

中村と田尻はちょうど教室担当の掃除当番だった。机を運びながら何となく話をする。まじめに掃除をしている女生徒が、話しながら作業をしている二人を怪訝な顔で見る。

「とりあえず、あとで横井先生に聞いてくるよ」

田尻が呆けている横井を見ながら中村に言った。

「中村も一緒に行かない？」

中村は横井を見た。その顔を見て眉をひそめる。

「いや、俺はいい。あの先生、どうも苦手だ」

「そう？ どこが？」

「どこがつて言う……」中村はしばらく考え込んだ。思わず机を運ぶ手が止まる。「何となく？」

「なんだそりゃ」

田尻も思わず手を止めた。女生徒の叱責が飛んでくる。慌てて二人は掃除に戻った。

☆

「あの、先生、よろしいですか？」

掃除が終わって帰ろうとしていた横井を田尻は呼び止めた。中村は先に教室を出ており、あとで中庭で落ち合う予定になっていた。

「はい？」呼び止められるとは思っていなかったらしい横井は、一瞬まぶたを瞬かせてから、慌てて表情を取り繕った。「あああ、はい、いいわよ。なに？」

田尻は横井の不思議な表情の変化を気にせず続けた。

「学校にパソコン、余ってませんか？」

「うーん」横井は宙を見上げた。そこに何か答が書いてあるかのように。「余ってるパソコンねえ。教材って、使わなくなったら業者に処分してもらうので、余り古いのは残ってないのよ」

「そうですか……」

田尻は肩を落とした。

「パソコン、欲しいの？」

横井は普段よりもだいぶ生き生きした目で田尻を見た。

「いえ、パソコンが欲しいんじゃないなくて、学校でパソコンが使いたいなーって」

「パソコンでなにをするの？」

「ゲームを作るんです」

「パソコンでゲーム……」横井は予想外の返答に答えを詰まらせた。「ああ、昔流行ったわね。私が子供の頃は専門の雑誌もあったし」

やろうぜ！

「え？ みんな作ってたんですか？」

「まさか」横井は吐き捨てるように言った。その声に嘲笑が含まれているように田尻は感じる。「作っていたのは一握り。ただ、今よりも作るのに抵抗がなかったってぐらいかな」「へえ……」田尻はその答えに驚きを隠さなかった。昨日から似たようなことで何度も驚いている気がする。「ゲームって、子供が作ってたのか」

「まさか。子供がゲーム機のゲーム作っていた訳じゃないわよ。でも、今作ってる人たちだって、昔は子供だったんだし、いきなり作れるようになった訳じゃないわよね」

「そう……ですか？」

今ひとつ納得できない田尻。あの遊んでいたゲームを作った人が、作れない時代があったなど考えられない。

「そうよ。大人になれば何でもできるー！　なんて訳ないじゃない」

横井はいつもよりもだいぶ演技過剰でそう言った。

「徐々にできなかつたことができるようになって、プロになっていくのよ」

「はあ……」

結局田尻には横井の言っていることが理解できなかった。横井は田尻の不審顔を全く無視して明るく聞いた。

「そうだ。ネット、使わないわよね？」

「はい。プログラムが作ればそれで大丈夫です」

「じゃあ、視聴覚教室のパソコン、使わせてもらえないかしら」

「視聴覚教室……ですか？」田尻は一瞬その単語の意味がわからなかった。視る、聴くを

覚するで視聴覚。昔そんな単語を聞いた気がする。「どこですか？」

「校舎三階の外れ。行ったことないか」

横井は「の字型に曲がっている校舎を窓から見る。田尻もその視線の先を追いかけた。確かにその先には、余り使われていなさそうな、一度も行ったことのない教室がある。

「確か、ネットにはつながらないけど、古いパソコンがそれなりに残っていたはず」

「使っていいんですか？」

「うーん」横井は視線を田尻に戻した。田尻は横井を期待して見ている。横井はすこしもつたいつけてから語り始めた。「ちょっと調べてみないとわからないけど、たぶん、大丈夫。ただ、教室の使用許可をもらうには校内の団体じゃないとならないかも」

「そうですか……」田尻は肩を落とした。「じゃ、無理かなあ」

「何言ってるのよ」横井はあきれ声で田尻に語る。「あなたが団体を起こせばいいのよ。メンバーを集めて」

「え？」

田尻は落とした肩のままあわてて横井を見上げた。実際には横井の方がずっと背が低いので見上げる格好にはならないのだが、明らかに横井の方が大きく見える。

「五人集まって、生徒会の承認が降りれば部活動が作れるわ。もし集まらなくても二人いれば同好会だってできる」

「へえ」田尻の声はたいそう間抜けに響いた。「部活動って作れるものだったんですね」「生徒手帳の校則、読んでないな。生徒会の先輩たちの汗と涙の結晶だぞ」

田尻にその声は届いていなかった。田尻はじっと中村のことを考える。来ないわけがな

やろうぜ!

い。

「同好会って、二人いればいいんですよね?」

「そう。もうひとつ、顧問の了解を取り付けな」と

田尻は慌てて横井を見た。

「顧問……って、先生ですよね?」

「そう。なんなら、私やろうか?」

「え?」田尻は素っ頓狂な声を上げた。「いいんですか?」

横井はにっこりとほほえんで答える。田尻は今まで横井のこんな顔を見たことがない。

「夕方までに、何をやる予定か文章にまとめて職員室に持ってきてよ。よつぽど酷くなければ顧問やってあげる」

☆

放課後はずっと田尻と中村で頭をつきあわせていた。

話の内容はどうやって作るのか、そもそも作るのか、何を作るのか。話は堂々巡りして、これといった結論にはたどり着かない。

結局、二人はレポート用紙に「ゲームを作る」という以上のことが書かれていない文章をでっち上げて職員室へと向かった。

職員室はだいたい教師が帰っていた。職員室の入り口で横井に面会を求めると職員室中の教師が一瞬怪訝な表情をしたような気がしたが、とりあえず田尻は気にしないことにした。

「作ってきた?」

「はい。一応」

消しゴムで消したあとの目立つレポート用紙を受け取るうとした横井は、田尻の隣に立つ背の高い生徒に気づいた。

「あら、中村くんも一緒だったのね」

「中村がプログラムを組むんです」

「二人で作るの？」

「はい」

「まあ」横井は目を輝かせた。「それはいいことだわ」

田尻と中村は何を喜んでいるのかわからない。

横井はタイトスカートの足を組んで苦労の跡の見えるレポート用紙を読んだ。田尻の丁寧な文字から、あふれてきて、それでも何をすればわからない何かを敏感に感じ取る。横井は思わずにやけるのを隠せなかった。

「作るだけ？」

「は？」

田尻は間抜けに一言答えた。あわてて中村と顔を見合わせる。中村も全く想定外の答えになにも答えられない。

「ほら、どこかで人に見せないの？」

「考えてませんでした……。どこで見せればいいんですか？」

「そうねえ」横井はまた宙を見上げた。「Webページに載せるとか、売るとか」

「売る!？」

やろうぜ！

田尻は思わず叫んだ。職員室が一瞬静かになった気がするが、細かいことに構ってられない。

「いやいや、そんな大それたことは」

身振り手振りをつけて慌てて否定する田尻に向けてこともなげに横井が伝える。

「なにも、お店で売ってもらうんじゃないわよ。即売会で手渡しで売の」

「即売会」田尻にはその漢字が一瞬想像できなかった。「デパートとかでやってる、物産展みたいな」

「違う違う」横井はおかしそうに笑った。「来るのも作る人、売るのも作る人って集まりがあるのよ。聞いたことない？ コミックマーケット」

「コミック……マーケット？」

「そ、コミケ」

首をかしげる田尻に対して、はじめて中村が口を開いた。

「聞いたことがあります。東京でやっている、何万人も来るイベントですね」

「そうそう」横井は背の高い中村を見上げて嬉しそうに手をたたいた。「とはいっても、東京の本当のコミケは半年も前から準備しなくちゃならないから、今から登録しても間に合わないけど」

横井は鞆からスマートフォンを取り出した。手慣れた動きでブラウザを立ち上げ二人にページを見せる。検索しているような気配は全くない。

「これなんかどうかしら。六月にあるんだけど」

二人はスマートフォンの小さい画面の、更に小さい文字をじっくり読んだ。

「コミックマルシェ・ローカル48……」

田尻が詳しい要項を読んでいる最中に中村は画面から顔を上げた。

「隣町ですね。電車なら行けるか」

「出展締め切りが今週末……明日だから、まだ間に合うわ」

田尻はスマートフォンスクロールの仕方がわからない。結局指を出しては引っ込めることを繰り返してあきらめる。

「でも、先生」指を引っ込めて田尻が神妙な顔をした。「ここに出すつてことは、それまでに作らなくちゃならないつてことですよね」

「そうね」

あっさり横井は答えた。田尻は神妙な顔を更にこわばらせた。

「作れるでしょうか……」

横井はため息をついてあきれた。

「なに弱気になってるのよ。創作なんか、締め切りがなければいつまでだって完成しないわよ。締め切りこそが創作の原動力なんだから」

「そう、なんです……か？」

横井の言い切りに圧倒されながら田尻はかろうじて言葉をひねり出した。

「そうよ！」横井は断言する。「別にオフセに出す訳じゃないんだから、直前まで作業できるわよ」

田尻はオフセという言葉の意味がわからない。わからないがいちいち突っ込んでいきりがないので流すことにした。

やろうぜ！

「どうする？ 中村」

中村には元から不安な所などなにもなかった。力強く答える。

「俺は構わない。締め切りがあれば完成するのなら、むしろその方がいいだろう」

「じゃ、決まりね」横井はレポート用紙を机において手をたたいた。「活動内容を、定期的に校外発表するために作る、って書き直してね」

「定期的に！」田尻は音がするほど勢いをつけて横井の方に向き直った。「一年に何本も作るんですか！」

「あなた」横井は更にあきれて続ける。「9月に出してそれでおしまいにするつもりだったの？」

「いや……」田尻は言われて初めて気がついた。目先のことはともかく、活動が続けるのならそれではおかしい。「そうですね。そうかあ。何本もゲームが作れるのかあ」

「違うわよ」横井は力強く言った。この横井は教室での呆けている姿とはまるで別人に見える。「チャンスは天から降ってくるんじゃないの。作るの。あなたたちが」

☆

結局その日のうちに「中央高校ゲーム制作同好会」というなんのひねりもない集団名に決定した二人の集まりは、横井のスマートフォンからコミックマルシェ・ローカル♠の登録を行った。携帯電話すらも持っていない二人は当然のようにメールアドレスもなく、スマートフォンからフリーメールのアカウントを取得して今後は田尻が家からメールのチェックを行うこととなった。

週を挟んだ月曜日の放課後、二人と横井は校舎三階の一番奥の視聴覚教室へと集まって

いた。鍵は毎日横井が開け、活動終了後に横井が閉めに来るようになっていた。

「あーっ」

田尻が声をかける。中村は横井にもらったアカウントとパスワードを手にパソコンの前に座って電源を入れた。一応液晶のディスプレイ。小さい筐体。フロッピーディスクドライブのついていない前面。使われていない割には最近のものに見える。

「うん。これはいい。俺のパソコンよりずっといい」

ログインしてシステムの詳細を調べていた中村が結論づけた。当然教育用ソフトは入っていない、開発用のツールはなにも入っていない。中村はひとしきりうなずいたあと、鞆から教則本を取り出した。CD-ROMに開発ツールが入っている。

「ソフトのインストールはできないわよ。管理者権限じゃないから」

「そうなんですか？」

横井の発言に対して中村の代わりに田尻が答える。中村はそもそも管理者権限という言葉

葉を聞いたことがない。

「ちよっと貸して」

中村は横井に席を譲った。横井は一端ログオフした上で管理者権限で入り直した。

「これなんだ？」

「CD-ROMですか？」

横井がスーツの胸元から薄いディスクを出した。どこから出したのかという突っ込みを待たれている気がしたが、田尻はさくさく受け流した。

「あなたたちにプレゼント」

やろうぜ！

横井はCD-ROMをドライブに入れた。自動起動になっていないので、ファイルのリストを開く。

「なんですか？」

「ゲーム開発に使えそうなツール一式。インストールしたらあなたたちあげるわ。家でもやりたいでしょ」

「ありがとうございます」

中村が神妙な顔をして答えた。横井は満身の笑みでそれを聴く。

「ところで先生」田尻が教室を見渡した。「ここ、何で人來ないんでしょう？」

横井は田尻に答えた。

「ネットもつながらないし、ゲームも禁止されてるしねえ。放課後はしまってるし」

「僕たちはいいんですか？」

「いいんじゃない？ ゲーム作っちゃダメとは言われてないし」

話をしながら横井は次々と開発に必要なツールをインストールしていく。Java開発キット、フォトレタッチソフト、NetBeans。

「先生、Forteは？」

横井の手元を見ていた中村が不意に声をかけた。

「あ、それ、今作ってないんですって。今はNetBeansを推奨しているそうよ」

「使い方は……」

「何とかなるでしょ。マニュアルもついてくるはずだし」

中村は教則本を握りしめた。最後まで作ったことがないとは言え、慣れ親しんできた

Fortieを離れるのは心細い。

「先生、詳しいですね」

「あ、うん。ちょっと、ね。ちょっとだけ」

横井は慌てて答えながら目をそらした。

☆

「これ、いける！」

中村が叫んだ。

インストールが終わったあと、中村のユーザーで入り直している間にもう一台のパソコンに横井は一通りのツールをインストールし始めた。中村は早速NetBeansを立ち上げて一通り試していたが、あるときから興奮した独り言をつぶやくばかりになってしまい、田尻の声は聞こえなくなってしまうらしい。田尻はため息をついて中村を眺めながら横井とどうでもよいような雑談をしていた。

横井はコンピュータだけではなく創作物全般に詳しくかった。アニメのこと、漫画のこと、小説のこと、音楽のこと、果ては宇宙開発から料理までその知識の範囲はとんでもなく広がった。横井は田尻と話しながら、失敗したかのように口ごもることが何度もあったが、それでも授業中の退屈なしやべりとは全く違う何かになっていた。

中村が叫んだ時には画面には先日と同じような画面ができあがっていた。インストールからわずか二十分足らず。二度目の同じようなプログラムであるとはいえ、明らかに速い。

「おお、凄いいじゃん」

「NetBeans 凄いですよー。これならいける」

やろうぜ！

興奮しながら中村は田尻にできあがったものを見せた。

「おおー」

「凄い。マニュアル英語だけど、打ち込んでる端から次にやるべきことが選択肢として出る。本を見なくても解説が画面上に出るし」

「それも英語なんでしょ？」

「そうだが……でも、読める。凄い」

☆

「ちよつとまで、なんで下に動くんだ？」

「うーん。く軸つて上がプラスのはずなんだけど。今日もやったでしょ、一次関数」

「ちよつと思っただけどさ、もしかしてこの左上が原点じゃない？ 左下じゃなくて」

「だって数学では……ええ？ ほんとに？」

☆

「キーを押してる間だけ動くつてのは、やっぱ問題だよね」

「プレイヤーはいい。問題は敵まで止まってしまおうということだ。スムーズに動かないのも気に入らない」

「この、イベントが来たときに動かすつての、根本的に間違つてない？ もしかして」

「俺もそんな気がする」

「仕方ない、調べよう。中村はリファレンス（索引）当たつて。僕は本を調べるから」

「わかった。……すっかり英語読めるようになったな」

「ツール自体は日本語なのに、なぜかリファレンスだけ英語なんだもんなー」

☆

「うまく絵が描けないな」

「それ、レイヤー使ってないせいよ。ちょっと貸して」

「はい」

「あーん、ペンタブ無いとやりづらいわねえ」

「ぺんたぶってなんですか？」

「！……あー、いいの。気にしないで。……つと、こんなもんかな」

「先生。絵上手ですね」

「！！ほら、教師なんだし、色々できないとダメじゃない、ねえ、人として」

☆

「だいぶそれっぽくなってきたな」

「そうだねー」

二台目のパソコンを前に田尻は答える。微妙にネットワークは通じているような感じなので、一応データのやりとりはできる。

液晶の画面上にはウィンドウの中に小さなキャラクターが動いている。キーとマウスに反応し、ゲームという体裁は整っている。

「まだなんか、いろいろ足りないけど、雰囲気は出てきたよね」

「足りないか」中村はソースを前に考え込んだ。「やっぱりそう思うか」

「えと、中村は凄いよ。うん」

慌てて田尻がフォローする。中村は全く聞いていない様子でつぶやいた。

やろうぜ！

「何が足りないか、どうすればそれがなおるのか。俺たちには知識が少なすぎる。もっと抜本的に補う必要があるんだ」

「どうやって？」

「それが……」中村はそれだけ言ってからため息をつき、自嘲的な笑みを浮かべて田尻を見た。「わかればいいな」

「あ……うん、そうだね」

☆

「同好会行けないと張り合い無いなー」

中間テスト一週間前となった昼休み、田尻はいつも通り中村の席に来て弁当を広げていた。試験前なので横井は教室にはいない。

テスト前一週間は部活動、同好会活動は停止となっている。作りかけのソースは惜しいが視聴覚教室には入れない以上一緒に作業はできない。

中村はすでに持ってきた弁当を食べ終わり、英語で書かれた「B」の教則本をプリントアウトしたものを読んでいる。日本語版の資料はもう何年も前に絶版になっているが、原語ではまだアップデートが続けられており、書籍とは別にPDFのデータが無償でダウンロードできるようになっていた。

「まあ、仕方ないな。勉強しろということだろう」

「そういう割には中村もやって無いじゃないか」

「テストなんてのは直前に勉強すればいいってものじゃないだろう。普段の成果を試す場なんだから」

「へえ」田尻は中村を尊敬する目で見た。「中村、成績いいの？」

「いや、別に」

田尻は素っ気ない一言に体を崩した。

「いやいや、だったら勉強しなくちゃまずいよ」

中村はこともなげに答える。

「成績が悪いのは俺がそこまでだったということだ。付け焼き刃でどうにかしたところで役には立たない」

「いやまあ、それ自体はかっこいいけどさ……」

田尻は言葉が続けることができない。中村は顔を上げて教室前方の黒板をみた。直前の横井の授業の最後の図と式がそのまま書かれている。黒板の前では女子生徒が数人、数式について何かと論評している。いまいち的を射ない。

「みろよ。あれ、わかるか？」

「んあ？」田尻は中村の視線の先を見た。右に向かう×軸、上に向かう△軸。途中を這う数本の直線とその脇に書かれた数式。「直線。一次関数だね。懐かしいな」

「一次関数なんかやり直したの一週間前だ」

中村は田尻に向き直った。

「俺たちにはあれが、×座標にすこし足し、△座標をちょっと引くキャラにしか見えない」「ああ」田尻は答えた。「そうだね。ゲームの為に覚えたことが、現実にしみ出てくるのって変な感じだね」

「たぶんそれが、学問なんじゃないかと思う」

やろうぜ！

「でもさ」田尻は中村に向き直った。「それって国語とか社会とかは勉強したところで使えないってことじゃない？」

「……」

中村にはなにも答えられない。

☆

テストはある意味さんざんな成績だった。二人とも数学と英語だけはやけに答案を埋めることができたが、それ以外の科目は今ひとつ。不思議なことに理科はほとんど勉強していないにもかかわらずほとんどの問題の意味がわかる。田尻に至っては今まで考えもしなかった世界の法則をテスト中に新たに続々と発見しては叫び、試験監督にたしなめられるほどだった。

テスト開きの午後。午前中は最後のテストを行っていたが、午後は部活動や同好会は活動再開。職員室に入ることはできないが、横井はわざわざ二人に鍵を渡しに来てくれた。当の横井は採点のためにすぐに職員室に戻った。

田尻と中村はテスト期間も含めると約二週間前に作っていたソースを眺めていた。ただか二週間なのに、NetBeansの画面を見るのも懐かしい気がする。

「僕、思ったんだけどさ」

田尻はソースをみながらつぶやいた。細かい部分はわからないが、何となくの動きはわかる。シンプルとは言い難い。

「なんだ？」

中村はそのつぶやきに答えた。

「怒らないで聞いてくれる？」田尻は様子をうかがいながら続ける。「これ、ルール残したまんま、一端作り直さない？」

中村はすぐには答えなかった。ソースをじっと見つめた上で絞り出すように続ける。

「……実は俺もちょっと考えていた。最初の頃作ったプログラムが、見てると気になって仕方がない。気にするぐらいなら作り直した方がいい気がする」

あっさり肯定された意見に慌てて田尻は付け加える。

「大丈夫かな、ほら、締め切りとか」

「たぶん……」中村はソースを見つめた。それによって何かが生まれてくるかのように。「大丈夫。問題ない」

☆

三日間、中村は視聴覚教室でほとんど会話をしなかった。たまにぶつぶつとつぶやいては自分でそれを解決するという繰り返し。田尻は直接手を出すこともできず、テスト前に出来ていたゲームを遊んだり、中村の持っていた「LIFE」の教則本を読んだりしていた。そのうち日本語の教則本は覚えるくらいに読み終わってしまった。テスト前に中村が読んでいた英語のプリントアウトにまで手を出す。英語はほとんどわからなかったが、ソースを見るとおぼろげながらいつている意味がわかる。

「よし、できた！」

不意に中村が叫んだ。

「うわぁ」田尻は動いている画面を見て間抜けな声を上げた。「二週間の成果が三日で終わりかぁ。凄いね」

やろうぜ！

「今なら何でも作れそうな気がする」

中村は興奮して答えた。

そこに視聴覚教室の扉が開く音がした。田尻は一瞬肩をすくめたが、逆光にぼんやり浮かぶその姿は横井だった。電灯をつけ忘れていたので部屋の方が外よりも暗い。

「あなたたち、まだ残っていたのね」

「先生、見て下さい！」

中村が胸を張って招き入れる。横井はその姿を見てほほえんでから二人の後ろに立った。

「あら、なんか、この間と違うような……」

「全部一から作り直しました。ソースもずっと美しいです」

「プログラムに向かつて美しいだなんて」

横井はため息をついた。しかし、なぜか嫌そうではない。

「中村くん、あなた、相当アレよ」

「アレ？」

田尻が聞き返す。横井は再びほほえんで答えた。

「なんかすつかり魔法使いみたい」

「あの」田尻は言いかけてから慌てて言い淀んだ。教師に下ネタをいうのはどうだろうか？

「三十歳まで童貞だとなるとかいう……」

「そつちじゃなくて」横井はころころと笑った。「コンピュータに詳しい人のこと。呪文を使って世界を変えるから魔法使い」

横井はソースに目を移した。テスト前は三人で活動していたのでプログラムの内容も何となくわかる。

「大学の時、周りに何人かいたな。私は全然コンピュータ使えなかったけど」

「先生って、大学で何やってたんですか？」

「数学。今時の数学って、手で計算なんかしなくて、コンピュータに計算させるのよ。私はコンピュータはワープロや絵を描くぐらいにしか使ってなかったんだけど」

そこまでいってから横井はのぞき込んでいた上体を起こして二人を見た。田尻と中村はその不思議な視線の色に横井を見つめてしまう。

「そっか」横井が唐突に口を開いた。「あなたたちはロケットを打ち上げようとしているのね」

「は？」田尻は慌てて答えた。中村も眉をしかめる。「ロケットですか？」

「あら、知らない？『遠い空の向こうに』って映画」

中村の記憶に何かが引つかかった。

「テレビか何かで……見たような。NASAの宇宙開発の話……でしたっけ？」

「ちょっと違うわよ。現役NASAエンジニアが高校生の頃に父親と反発しながらロケットを打ち上げる話。NASAは直接出てこないわよ」

横井は夢見るように続ける。二人は口を挟めるような状況ではない。

「男の子四人が協力し合いながらロケットをいくつも打ち上げるの。周囲からの逆風、努力、友情、そして愛！」

「あ、いや、その。愛は結構ですから、せめて勝利に」

やろうぜ！

☆

「この動き、軽くない？」

「なぜ同じディスプレイ上のものなのに、重さを感じないんだ？ あのゲームはもっと重かったぞ」

「うーん……物の、重さ？ いや、そのまんまだなあ」

「……わかった。物理学だな。ちょっと待ってる。図書室いつてくる」

「僕も行くよ。何かわかるかもしれない」

☆

「うわ！ なにこれ！ 光ってるんだけど」

「コンポジションとグラデーション。加算半透明だ。絵を描かなくても、プログラムだけでいくらでもエフェクト作れる」

「凄い！ どこで見つけたの？」

「リファレンス。知らない単語があったので調べていたらここにたどり着いた」

☆

「微分……って、なんだろう？」

「わからん。聞いたこともない」

「あら、あなたたち何難しい物読んでるの？ 二次導関数？ 凄いわね、それ、三年生のやつよ」

「先生、知ってるんですか！？」

☆

「オブジェクトが、触れる」

「うん。触れる。もしかして、重い？」

「ああ。重い。だがまだ足りない。なんだ？ 何が足りない？」

☆

「よし、いける！」

即売会まであと二日。日々ゲーム制作のことばかり考えている田尻は、いつものように視聴覚教室でマウスを握りしめ、キーに指をおいてゲームに勤しんでいた。

日曜日にやる即売会の前日はCDROMをデブリケートするために使うので残っている作業は不具合の修正だけ。今から新規要素を付け加えるのは現実的ではない。

「楽しそうだな」

直前までの修正作業が一段落した中村が田尻を見た。田尻は画面から目を離さずに答える。

「そりゃ楽しいさ。中身知ってても、夢にまで見たゲームだもん」

「夢に……」中村が考え込む。「ああ、そうだな。楽しいな。当然だ」

「僕はいいいよ。こうして妄想が形になっていくんだから。中村はどうなの？ 巻き込まれちゃってるだけじゃん」

「いや」中村はソースを見た。一行一行に思い出がある。「もちろん楽しいに決まってる」

中村はつぶやくように続けた。

「俺は巻き込まれたなんて思っていない。自分の意志でこうして作っているんだ。そうじゃなければこんなに入れ込まない。ここまで来ても、俺は信じられないんだ」

やろうぜ！

「何を？」

「そうだな……」中村は目を伏せて眉を寄せた。少し考えた末、田尻のことを見る。「自分がここにしていることが、かな」

「なんだ、まただいぶ哲学的だなあ」

「うん。俺はここにいます。これが、作るってことなんだな」

中村は首だけではなく体ごと田尻に向き直った。

「なあ、勝てるかな、俺たち」

田尻は思わず腕を掲げていた。

「そりゃ、勝てるさ！ 努力、友情ときたら、あとは勝利しか残ってないだろ？」

「ああ」中村は大きく息をついた。口の端を持ち上げて力強く答える。「そうだ。当然だ」

☆

夏はもう、そこまで来ている。

NONSTOP



From · N

番棚葵

Illustration: 伊藤由希

谷川来夢



隆也のお隣さん。地元への愛にあふれる少女。

新井隆也



進学を目指す高校生。田舎町である地元を嫌う。

第一話 ビギニング・メン

新井隆也は、自分が住むこの町に辟易としていた。

〇〇県N市。海と山に挟まれた、のんびりとした風情と情緒にあふれる町。そう言われれば聞こえはいいが、実際のところはただの田舎だ。

JRの路線は、ローカル線が一つ敷かれている限り。もちろん急行など停車しない。中心部の大きな駅の近くには、最近出来たショッピングモールがあるから、一見暮らしに不便はないように思える。が、山に向かって数キロほど離れば、そこはもう畑と住宅と思いついたように小さな売店が同居する、寂れた住宅街なのだ。

生活の上で自転車は必至。自動車もあるに越したことはない。来る時間を待つのに電車とバスは当てにはならなかった。

こんな暮らしにくい町を、我が故郷と自慢するのは、まだ若い彼には不可能だった。もっと住みやすく、もっと華やかな町で暮らしたい。そう思っていたのである。

「一緒にN市の名物を作ろう」

目の前で女の子にそう告げられた時は、どうして自分がそんな相談を持ちかけられなければならぬのか、と暗澹たる気分にならざるを得なかった。

「お前は何を言っているんだ？」

隆也は窓際にある勉強机の椅子に腰掛けたまま、ややずれた眼鏡を押さえると、少女に告げた。自分に相談を持ちかけた少女である。

彼女は笑顔をたたえたまま、再び繰り返した。

「だから、一緒にN市の名物を作ろうよ」

そして隆也の返事を待った。そのにこにことした表情から、どうやら受け入れてもらえる自信があるらしい。

ちなみに、隆也と少女との距離は数メートルもないが、両者の間には深い溝があった。

比喩表現ではない。彼らは別々の家屋にいて、窓越しに話していたのである。

少女はいわゆる、隆也の「お隣さん」であった。小さい頃からのつきあいなので、幼なじみとも言う。

「あんな、来夢^{らむむ}」

「なに？」

「えっと。とりあえず、こっちに来て。返事はそれからだ」

隆也の提案に、来夢と呼ばれた少女は「うん」とうなずくと、一度顔を引つ込めた。ぼたん、という音が鳴り、そして、ててて、という小走りの音が続く。

そして数分後には、彼女は隆也の部屋に来ていた。

相変わらず笑顔を浮かべて、カーペットの上に女の子座りに座り、わくわくと隆也を見ている。その小動物を思わせる小さな背丈と無邪気な顔は、身につけた可愛らしいワンピースと相まって、下手をすれば小学生に見えるが、それでも隆也と同じ高校生だ。

その来夢が口を開いた。

「で、隆くん。返事は？」

「これだ」

ずびしつ。脳天にチョップを食らって、来夢は「わっ？」と驚きの声を上げた。

眼が大きく開かれ涙目になったが、隆也としては満足のいく結果だった。このためにわざわざ彼女を部屋に呼んだのだから。窓越しじゃ、手が届かない。

「ひ、ひどいよ、隆くん。いきなり何するのさー」

「お前が唐突に、しかも訳のわからない提案をしてくるからだ！ どうして俺がN市の名物を作らなくちゃいけないんだ？」

「だって、隆くん頭いいんだもん。私、かしこくないから、こういうの苦手です」

そうこぼしながら、小さくなって胸前で指をつき合わせる来夢を見やりつつ、はぁ、と隆也はため息を吐いた。

彼は来夢が言った通り、決して頭は悪くなかった。市内でも進学校として名高い、私立の高等学校に通っている。

しかし、それには理由があり、彼は子供の頃からこの町を出て、いつか都会で暮らそうと決意していた。そのためには有名な大学に入る必要性があると考え、それで進学の道を進んでいたのだ。

そんな自分に、N市の名物を考えろと言う。

何かの皮肉じゃなからうか。相手が幼い頃から知っている来夢でなければ、そう疑っているところだ。残念ながら、彼女にそれだけの知性はないと断言できるが。

「ともかく、お断りだ。俺には、そんなことにつき合ってる暇はない」
「でも」

「俺が何していたかわかるだろう？」

椅子に座ったまま、彼は机を手で示してみせた。参考書とノートが開いている。それを見て、なぜか来夢が不服そうな顔をした。

「また勉強？　せっかくの日曜日なのに。それに中間考査って、まだなんですよ？」

「公立の高校に通ってるお前にはわからないだろうが、私立は定期的に実力テストがあるんだよ。さ、勉強の邪魔だから帰った」

「うう、でもお」

今度は来夢は泣きそうな眼で隆也を見てくる。本当に表情がころころ変わる娘だが、困ったことに彼女のそういう顔には、隆也はてんで弱かった。

「どうしても、ダメなの？　隆くん」

「あ、当たり前だろ。はよ帰れ」

心を鬼にして言ったが、くい、とポロシャツの袖口を未練がましく引つ張られた。「ねえ、お願い。話だけでも聞いてえ。名物を作る理由だけでもお」

すがるように言われれば、男としては色々とくすぐられるものがある。

「……はあ。仕方がないな、話だけだぞ」

「うん、隆くん大好き！」

承諾した瞬間、明るい笑顔に戻った来夢を見て、隆也は「間違ったかな」と後悔した。

「町おこし？」

一階のリビングにて。ティーポットにパックの紅茶を放り込みながら、隆也は尋ねた。ちなみに両親は出張で出かけていて、しばらく帰ってこない。

ワイドスクリーンのテレビの前に、ローテーブルと白いソファのセットがある。来夢はそこに腰掛けて――もちろん、ソファの方に――楽しそうにうなずいた。

「うん、そう。この間テレビ番組で、地方の町おこしの特集をやってるのを見たんだよ」「ふうん」

相づちを打ちながら、頃合いを見て隆也はカップに紅茶を注いだ。来夢に差し出すと、その考えを証明するかのようには、備え付けのミルクと砂糖をどぼどぼ入れ始める。

「うえ」

見ているだけで胸やけしそうな光景に、思わずうめいてから、自分もソファに腰掛けた。口直しにストレートで紅茶をすすり、ふと話を元に戻す。

「で、そのテレビ番組と、N市の名物を作ることに、何の関連があるんだ？」

「だからね、紹介された町おこしの中で、その町の名物を作ってそれで人を集めるっていうのがあったの。私、それを見て、びん、と来たんだ」

その言葉を聞いて、隆也も、びん、と来た。嫌な予感が。

「N市も名物を作って町おこしすれば、沢山人が来るんじゃないかって」

「そうか、なるほど。それで名物を俺に作れと言ってきたわけだ。納得した」

隆也はうなずくと、ローテーブルからテレビのリモコンを取り上げてスイッチを入れた。日曜日の午後、ちょうど歌番組が再放送でやっていて、今日日本で話題を独占しているアイドル歌手の『常盤しみり』が、十代の若さと美貌を振りまきながら、熱唱している。

「うんうん。常盤しみりはやっぱり顔だけじゃないよな。これだけ歌唱能力があるから、人気も沸騰しているんだろうし。間違いない、今の日本の歌手でもトップスターだな」

「そうだよ。私もしみりちゃん大好きだよ。学校の友達とか、芸能界にうとお父さんも、しみりちゃんの大ファンだからね」

そのコメントに、来夢は笑顔でうなずくと、ふと顔つきを微妙なものに変えた。

「……って、そうじゃなくてえ。隆くん、理由話したんだから名物考えるの手伝ってよ」

むう、と口をとがらせる彼女に、しかし隆也は半眼を向けるだけだった。

「だから言っただろ、話を聞くだけだ。俺は最初から、そんなの考えるつもりねーよ。しかも理由が町おこしをしたって言うなら、なおさらな」

「え、どうして」

「そりゃ、お前。俺はこの町があまり好きじゃないからだ」

そのことは隠すでもなく、割と小さい頃から目の前の少女には話してきたと思うのだが。しかし、来夢は納得いかないらしく、胸元で拳をぎゅっと握ると、

「でもでも、私はこの町いいと思うよ。のんびりしているし、風情はあるし、自然は綺麗だし。他の人にも、もっとN市を見て欲しいって思うんだよ」

「……よくわからんな、その発想は」

愛郷の念もそうだが、他人に自分の故郷を見て欲しいという気持ちだが、隆也には理解できなかつた。もつとも、来夢ではなく自分の感性がズれているのかもしれない。住めば都、ということわざもあるくらいだし、人間住み慣れた町には愛着を感じるものなのだろう。「でも、だからって名物作って町おこししようとするか。普通、そういうのは市役所とかそういったところが企画するんじゃない」

「テレビだと、一般の人が発案してたよ。実行に移したのは役所の人だけど」「うーむ」

思わず隆也は考え込む。実は、彼としても名物を作ること自体には、興味がないわけでもなかつた。

名物を作り出すということ。つまり、自分が生み出したものが、世間に広まっていくということだ。隆也もまだ十五歳である。自己顕示欲を刺激されるような行為には弱かつた。

だが。やはりそれでも、この来夢の企画には抵抗を感じる。

「やっぱりダメだ。N市のための行為ってのが気に入らない。それに……どうせ、名物の案を出したところで役所でハネられるのがオチだと思っしな。無駄な努力だよ」

「えー。きつと大丈夫だよ。かしこい隆くんならきつといいアイデア浮かぶって」

「おだてたつて無駄だ。絶対にやらないぞ」

半眼で幼なじみをにらんでやる。少女はそれでも訴えかけるように、上目遣いでこちらを見ていた。胸元で両手を組み合わせている。意図は丸見えだ。

（おねだりするなら勝手にしろ。さっきの二の舞にはならないからな）

心に固く誓う。案の定、来夢はしおらしい声を出してきた。

「ねえ、隆くん」

「ダメだ」

「お願い、一緒に……」

「ダメだつて言ってるだろ」

「でもお……」

うるうる瞳をうるませる。うつ、と隆也は息を詰まらせた。なぜかわからないが、罪悪感を感じたのだ。来夢のこれは演技だとわかっているはずなのに。

（いや、しかし。こいつなりに真剣に考えてやっつてるみたいだし、全部が全部演技つてわけでも……いや待て、さっきはそう思ってたころつと騙されたんだぞ……いやでも）

頭の中で、相反する感情がせめぎ合う。そして、その結果。

「……ああもう、わかったよ。ちょっと手伝っただけだからな」

「わぁい、隆くん大好き！」

先ほどと同じく、ころつと態度を変えて笑顔を浮かべる来夢に、しかし怒りきれないのが自分の未熟なところなのだろうなど、隆也は長々と息を吐いて実感するのであった。

○

N市は前述した通り、山と海に挟まれるような形で存在している。隆也や来夢が住んでいる家は、山のふもとより少し海寄りの場所にあった。

そこから唯一と言っているほどの大きな道、幅員七メートルほどの道路を歩いていけ

ば、やがて横手からのびる国道にぶつかる。T字を折れ、今度は国道沿いに進み、その先数キロメートルの距離にあるのが中央の市街だ。

隆也はぶらぶらと、あまりやる気のない足取りでその国道を歩いてきた。隣には対照的に機嫌のいい来夢が、鼻歌を歌いながら歩を進めている。

彼女を見て、隆也は気だるそうに言った。

「なあ、やつぱりバスの方がよくないか」

「せっかくのいいお天気で日曜日だもん。お散歩の方が楽しいよ」

「散歩というか、ウォーキングの範疇内なんだが、これ」

あまり運動に慣れていない隆也は、深々と息を吐いた。中央市街にある学校にはバスで通っているのだから、疲労感はことさらだ。

まあ、今更戻るのもしんどい距離ではあるのだが。そんなことを考えていると、ふと来夢が楽しそうに言葉を付け足す。

「それに、私は隆くと歩くの楽しいよ」

「そうか？」

「うん。こうやって二人で歩くの久しぶりだよね」

「まあな」

二人は中学から違う学校に通っている。昔と比べ、必然的に顔を合わせる回数も減っていた。もっともお隣さんなので、窓越しに時々話をしていたりはしたが。

(そういや、来夢が俺の部屋にまで上がったのって、小学生以来だな)

しかし、そのレアなケースに、こんなお願い事をされるとは思ってもみなかった。隆也

はまっすぐ前方を向き、今はまだ見えぬ目的地を見透かすように目を細めた。

二人は今、駅前にある中華料理屋に向かっている。理由は簡単で、名物を何にしようか考えた時に、ふと来夢がつけっぱなしにしていたテレビを見て声を上げたのだ。

「そうだ、名物はラーメンがいいよ」

カップ麺のCMを見てその発想をするのも安直だが、名物＝ラーメンという思考もいかなものか。隆也は思ったが黙ってOKを出した。これで来夢の気が済むならいいかと考えたのである。

ただ、彼女が「じゃあ研究するために、本格的なラーメンを食べよう」と言い出した時は閉口したが。さらに「中央市街に同級生の家が経営している中華料理屋があるから、今からそこに行こう」と主張した時には、ラーメン案は却下すればよかったと後悔した。

だが、承諾した手前、男としてはその意見を見苦しく変えたくはない。かくて二人はその中華料理屋を目指すことになったのである。

数十分後。

「ここがそうか」

中央市街は飲食店が並ぶ通りの一角で、隆也は首を上げてつぶやいた。

そこにぼつんと建っている、一戸建て程度の大きさの店。看板には「中華飯店ラ・ソルティ」と書いてある。首を傾げてから、来夢の方を見た。

「……変わった名前だな」

「話によると、この店主の人が元々フランス料理を目指していたんだけど、面倒くさい

から中華料理屋に転向したんだって。でも店の名前はそのままにしたんだってさ」

「えらく大雑把な……というか、『ソルティ』って英語なんだが」

肩をすくめてから「まあ、いいか」と気を取り直し、隆也はのれんを潜った。

「いらっしやい」

愛嬌のある声が響いてきた。和服をアレンジしたような制服に身を包み、前掛けをした少女が現れる。それを見て、背後の来夢が笑顔で軽く手を振った。

「浅野さん、こんにちは」

「あら。あなた谷川さんだっけ？ 何か用なの？」

谷川とは来夢の名字である。その来夢が、にこやかに言葉が続けた。

「あ、うん。家が中華料理屋やつてるって聞いたから、ラーメン食べに来たんだよ……隆くん、こっちは浅野奈美さん。さっき言ってた、私のクラスメート」

「よ、よろしく」

隆也はおずおずと頭を下げた。浅野奈美は、ちらつ、と視線を向けてから、

「ふーん」

一言つぶやく。その声が若干不機嫌なような気がして、隆也は「？」と疑問符を頭の上に浮かべた。彼女は目を閉じ、軽く頭を振っている。

「まあいいわ、こっちに座って」

そして隆也は来夢と共に、奥のテーブル席に案内された。

「注文決まったら、呼んでちょうだい」

メニューを渡して、そそくさと厨房に消える浅野某。それを見て、隆也は首を傾げた。

「なんだ？ 何か、いきなり愛想悪くなってるのか」

「そうかな？」

「そう思うぞ。ほら、こっちの方にらんでるし」

厨房の陰から、なぜかじつとこちらを見てきている彼女を確認し、隆也はちくちくとした感触を首筋当たりに受けた。それだけ目線が鋭いのだ。

隆也はいたたまれなくなつて、何となく「ラ・ソルティ」の中を見渡した。

やや狭い店内には、薄汚れた床と壁、数の少ない机と椅子、部屋の角に取り付けられた棚、その上に設置されたテレビ——常盤しみがまたも映っていた——などがあり、若干レトロな飲食店の雰囲気を出している。昼時を外したせいか、自分たち以外に客はいない。それがまた、居心地の悪さに拍車をかけている気がする。

向かい側の来夢は気にした風もなく、メニューを開いて中をのぞき込んでいる。

「うわ、黒豚使用の餃子だつて。美味しそう！ これ頼もうかなあ」

「ラーメン研究に来たんだから、それはダメだろう」

「あ、そうか」

「とりあえずラーメンの研究だ。まずは出汁から見ている。基本的な奴はすべて頼んで、食べ比べてみようぜ」

気がつけば、隆也はてきばきと指示を出していた。彼には若干研究者肌などところがあり、渋々引き受けた手前であるものの、ラーメンの研究というテーマに興味をそそられ、積極的に動く気になっていたのだ。

幸い、この中華料理屋には、醤油、塩、とんこつ、味噌と、オーソドックスな出汁はそ

ろっている。小遣いの残りが若干厳しいことになるが、二人は四種類をすべて頼んで、食してみることにした。

浅野女史を呼んで、注文をする。彼女は「注文承りました」と営業口調で答えると、持っていた伝票にボールペンを走らせてから、厨房へと再び戻った。

「ふふふ、楽しいなあ」

ラーメンを待つ間、ふと来夢が微笑を浮かべる。隆也は首を傾げた。

「そんなに名物作るのが楽しいのか？」

「違うよ。あ、名物を作るのも楽しいけど、隆くんと一緒にお店に来たのが初めてで楽しいなあ、と違って」

「なんだ、そりゃ。確かに二人だけで来たことなんてないけどさ」

来夢とは幼なじみとは言え、保護者もなしで二人きりで店に入ったことは一度もない。それを経験しそうな中学時代から、二人はあまり一緒に行動していないのだ。

ふと、思う。目の前でここにこ笑っている来夢は、若干幼い感じがあるとは言え、れっきとした同じ歳の、しかも年頃の少女だ。そんな彼女と二人、休日に店の中にいて談笑しているのは、周囲からはどう見られるのだろうか。

「どうしたの、隆くん？ 何か顔赤いよ」

「あ、いや何でもない」

柄にもないことを想像してしまった。隆也が後悔した、その時である。

「ねえ、これってデザートに見えるのかな」

来夢がちょうど自分が考えていたものと同じ言葉を口にしたので、隆也は口にくぐんだ

冷水を噴き出しそうになった。

「な、何言い出すんだ、お前」

「だって、日曜で店内で男女二人だよ。そう見えなくもないじゃない？」

「発想が安直すぎるだろ。それだけでデートなんて、無理があるって」

自分のことは柵に上げて、隆也はぶつきらぼうに言った。来夢のことだから、深い意味は持たずに状況を言っているだけなのだろうが、何か勘違いしそうになってしまう。

来夢は少し苦笑して首を傾げた。

「うーん、無理があるかぁ」

と、唐突に、その顔から笑みが消える。

「それでも、私はデートに見られたいかな……隆くんとなら」

「えっ？」

意味深な言葉に、隆也は目を見張った。来夢は顔を伏せがちにして、こちらの様子を上目遣いだろうかがついている。耳が赤く見えるのは気のせいだろうか。

何だか彼女が、自分が知っている来夢じゃないような気がして、隆也は緊張につばを飲み込んだ。

「なあ、それって……」

うわずつた声で、尋ねかけた瞬間。

「はい、お待ちどうぞさま！」

どんつ、とラーメンが横手から置かれた。我に返ってそちらを見ると、トレイを片手に立っている奈美の姿がある。その白く細い腕には、なぜか血管が浮くほどの力がこめられ

ていて、どんぶりが悲鳴を上げそうだった。

「……あの？」

「他の注文も、すぐお持ちしますから」

奈美はつぶやくと、じろり、と隆也と来夢を交互ににらみ、

「店内でイチャツつかないでもらえますか？」

ドスの利いた声を残して、再び厨房へと去っていった。大股で、ずかずかと。

「……はい」

何だか恥ずかしくなって、隆也は小さくつぶやいた。理不尽なことに、来夢はいつもの来夢に戻り、平然とそのクラスメートを見送っていた。ぶんぶかと手を振る。

「浅野さん、よろしくねー」

「……ごめん、俺、お前がわからない」

先ほどまでの雰囲気はどこに行っただ。隆也はうめきつつ、どつと机に突っ伏した。

浅野奈美は大変立腹していた。

日曜日なのに家の手伝いということで、ウエイトレスをやらなければならない。それだけでも業腹なのに、クラスメートのんきにラーメンを食べに来ているのである。

しかも、男を連れて！ ここが奈美の一番気に入らないところであった。

（こちとら休日なし、遊ぶ暇なし、男作る暇なしで灰色の青春を送っているのに！ 何よ、嫌味のもり？ まったく、カップルなんて全員滅びればいい！）

注文の四品を運び終えてから、厨房で心中毒づく。ちょうど料理担当の父親が、外に煙

草に吸いに出ている。今のうちに、あの二人を追い出そうかと考えたが、客商売でそれはまずいと思い直した。せめてもの嫌がらせに、厨房から二人のいる席に向かつて、ひたすらに「お前らなんて別れる」と念じている。

と、その時。来夢がつれている男が、こんなことを尋ねた。

「どうだ、ラーメンの方は」

すると来夢はこう答えた。

「うーん、ちよつとありきたりかな」

(え……?)

「やつぱり、もうちよつとインパクトがないと売れない気がするんだよね。これじゃ普通すぎて、物足りないよ」

奈美は激怒した。

「ちよつと、どういうつもりよ！　うちのラーメンにケチをつける気？」

浅野奈美がいきなり叫びながら飛んできたので、隆也は慌てた。瞬時に、その原因が来夢の発言だと理解し、フォローの言葉を探す。

「ち、違うんだ。これはそういうつもりじゃなくて」

「私達、名物になるラーメンを作ろうとしているの」

来夢がやんわりと続ける。彼女なりの、弁解だったのかもしれない。どちらにしろ、怒り心頭に来ているらしい奈美には通じなかったが。彼女は来夢に指を突きつけると、

「下手な言い訳はやめなさい！　あなたにそんなもの作れるはずがないでしょう！　この

間の調理実習で同じ班だった時、変な料理作ってたの覚えているわよ！ 甘い味噌汁なんて生まれて初めて食べたわ！」

「あう」

来夢は涙目になったが、隆也はこれに対して援護のしようがなかった。そういえば彼女は子供の頃から、料理の類は苦手だった気がする。

「と、とにかく。今来夢が言ったことは嘘じゃないんだ。俺達が名物を作ろうとしているのは本場で、名物にするにはインパクトが足りないとかそういうことを来夢は言いたかったんだと思う」

「ふん。たとえそうだとしても、うちの料理をバカにしたことに代わりはないわ。それに今の発言は、営業妨害にもなりかねないのよ？ どう責任取ってくれるの！」

奈美は半眼になると、「あ？」と絡むような視線を二人に向けた。どことなく、チンピラの風情が漂っている。

隆也は「えーっと」と言葉に詰まる。ある意味向こうも正論なので、やりにくい。

と、そのやさぐれた目をすっと細め、奈美はこう言葉を続けた。

「そうね、どうしても許して欲しいって言うのなら、その名物ラーメンとうちのラーメンで勝負をしないさい」

「え。どうしてそうなるんだ？」

「それがうちのラーメンより美味かったら、さっきの暴言をチャラにしてあげるって言うてるの。もしも無理だったら……そうね、あなた達罰として別れなさい。以後、口を利くのも禁止！ いいわね？」

「はあ？」

実はこの機を活かして、カップルを破局させてやろうというのが美奈の魂胆なのだが、彼女の心情を知るはずもない隆也は、この暴挙とも言うべき提案に目を丸くした。

「いや、あんな。別に俺達は」

「いいよ」

あっさり到来夢が言ったので、隆也はさらに驚いた。

「来夢、お前な。状況理解できてるのか？」

別にこの提案を呑む必要はない。向こうにはそんな権限はないし、そもそも自分達はつき合ってもいないのだ。が、来夢はやる気満々の表情で、

「隆くん、これはチャンスなんだよ。ラーメン屋にも認められるような名物ラーメンを作ることができれば、それはほぼ完成だと思わない？」

「……いや、まあ、そうかもしれないけど」

味噌汁も作れないような奴が、満足のいくラーメンなど作れるものか。

しかし、来夢は元氣よく奈美に指をつきつけると、

「必ず、名物ラーメンを完成させてみせるよ！」

「ふ、楽しみにしてるわ。男にうつつを抜かしている女がどういう目に遭うのかをね！」

挑発が微妙にかみ合っていない。隆也はどっと疲れを感じた。どうしてこうなってしまったんだらう。遠くで常磐しみが歌っている声が聞こえる。

そんな彼の無常感がくみ取ってもらえるはずもなく、勝負は一週間後ということに決定したのであった。

「お前、バカだろ」

「あうろう」

その日の晩、新井家の台所で、隆也は床に崩れる来夢に率直な意見を述べた。

流しに置かれたどんぶりの中には、ぐちゃぐちゃになったラーメンが入れられている。来夢が作ったもので、しかもインスタントだ。来夢が新しいラーメンを作るための参考に、仕入れたのだが。

「インスタントラーメンも満足に作れないのに、どうして名物ラーメンを作ろうなんて言い出したんだよ。想像以上の料理オンチだぞ、これ」

「その辺は、隆くんがナイスなアイデアを出してくれないかなと」

「出るか！」

自分だつて料理は得意な方じゃない。来夢ほどではないが、本格的なラーメンなど作れるはずがない。知識でなら製作法は、ある程度は知っているが。

「もう、勝負するのは諦めろ。というか、もういつそのこと名物作るのを諦めろ。素人が手を出したつてどうにもならないつて、今回のことでわかっただろ」

「だ、ダメだよ。名物は絶対にするんだから」

少し意固地になったように、来夢は立ち上がると、鍋を洗って湯を沸かし始めた。どうやら、もう一回インスタントラーメンに挑戦するらしい。

隆也は、小さく息を吐く。

「まったく、そんなにN市を有名にしたいのか」

「うんと、それもあるんだけどね」

彼に背中を向けたまま、来夢が答えた。

「N市が有名になったら、隆くんもこの町を嫌いにはならないよね」

「ん？」

「そうしたら、ここから出ていく必要ないと思うんだよ」

つぶやく来夢の声は、どこか寂しそうではあった。

「中学校からずっと勉強ばかりで、辛そうなんでもん、隆くん。夜もずっと勉強ばかりだよ……」

「……お前、それで町おこしを？」

どこまで幼稚な発想なんだ。大体、自分は勉強を苦に思ったことなど、一度もないのに。隆也は呆れたが、怒る気にはなれなかった。来夢の精神レベルはどうかであれ、自分のことを考えての発言だと思ったからである。

だが、現段階では新しいラーメンどころか、インスタントラーメンの作成にすら手こずっている始末である。これでは名物ラーメンの開発など、夢のまた夢と思えた。

（やっぱり、俺が何か考えないといけないのか）

ため息を吐いて、隆也は来夢の方を見た。彼女はちょうど、流しに置きっぱなしにしているどんぶりを持ち上げたところであった。

「もったいないから、このラーメンも食べちゃわないとね」

端に口をつける。瑞々しい唇が柔らかく形を変え、それが何だか艶めかしいと隆也は思ってしまった。やはり、言動がお子様でも来夢は女の子なのだ。

(ん?)

瞬間、彼の頭に何かがひらめいた。どんぶりを傾ける来夢の横顔を眺める。来夢も気づいて、苦笑を浮かべてこちらを見てきた。

「どうしたの、隆くん？ そんなに見つめられると、照れるんだけど」

「あ、いや。ちょっと思いついたことがあってな」

隆也はそうつぶやき、リビングの隅に転がっているはずの、町の情報誌を取りに行った。

○

次の日曜日の夜。いよいよ勝負の瞬間がやってきた。

「ラ・ソルティ」にやってきた隆也と来夢を、腕組みした奈美が迎えた。意気揚々と上から目線で、隆也達を見る。

「二人とも、別れる準備はできた？ こっちは『責任を持つて別れる』という意を示すための契約書を用意し、契約の際には公平を期してこの客に立ち会ってもらう手はずを整えたわ。さらに万が一のために、客の中でも井戸端会議が好きなおばさん達に頼み込み、あなた達がこっそりつき合っていないか情報を随時リークしてもらおう予定だから、無駄なあがきはしないことね」

「……ものすごい熱意だな。そこまでして、俺達を別れさせたいのか」

そもそも、別につき合ってもいないのに。隆也がつぶやこうとすると、来夢が心なしか顔を赤くして叫んだ。

「え！ 私達つき合っていたのっ？」

「向こうが一方的に勘違いしているんだよ！ お前、この間何を聞いていたんだっ！」

どうやら名物ラーメンをかけたの勝負という単語にのみ反応し、後はよく話を理解できていなかったらしい。道理であっさりと勝負を引き受けたと思っただ。

「ちなみにもう一度念押しするけど、別れた後に口を利くのも禁止だからね。わかってるわね、谷川さん」

「う、うん。隆くんとお話できなくなるのはイヤだもんね、私頑張るよ」

「……今頑張ってもしょうがないだろ」

隆也は嘆息する。何しろこっちの『仕掛け』はとづくにできあがっているのだ。

あとは一つ条件を満たせば、完璧になるのだが……。

「さてと。それじゃ、私から始めましょうか」

いきなり奈美がそんなことを言い出したので、隆也は「は、何を？」と聞き返した。

「決まってるじゃない。料理対決の順番よ。うちの店からラーメン出すわよ」

「ちよつと待て、いきなりそっちから始めるのか？ というか、そんな交互に食べてもらう対決方式だと、後攻が不利になりそうな気がするんだが」

「安心しなさい、一杯分丸々食べさせたりしないから。半分だけ食べてもらえればいいって言うわよ、それならあんた達のラーメンも入るでしょう」

そう言ったので、隆也の不安は解消された。少なくとも、不公平な審査をされる心配はない。それどころか。これは彼と来夢にとって、チャンスでもあるのだ。

「わかった、いいだろう」

隆也は来夢と目線を交わしから、そう言っただけで黙った。

審査員は、夕食を食べに訪れた客から適当に選ぶことになった。この審査員の選出方法を提案したのは隆也で、奈美もそれを承諾する。

のれんをくぐってきた客を「ちよつとすみません」と呼び止め、愛想もよくしゃべり立てて、無理矢理審査役を務めさせることにする。この辺はさすが店の看板娘だ。

客は中央市街の社員寮に住んでいる独身サラリーマン数人。最初は驚いていたが、N市の町おこしラーメンを作っていると聞くと、楽しそうに引き受けてくれた。

「ほお、N市のためのラーメンか、こりゃ面白いねえ！」

「しかし俺達も、ラーメンにはうるさいよ？　ちよつと出汁や具材を変えたくらいのラーメンじゃ、名物ラーメンとは認められないなあ」

「ですよー。そんなわけでうちのラーメンと食べ比べて、どこがどうダメダメなのか、この二人にびしりと教えてもらえますー？　もちろん、お代は取りませんから」

顔には天使の笑みを浮かべ、心には「絶対こいつら別れさせてやる」という悪鬼のような決意を燃やし、こびるように奈美が声を出した。

そして店の奥に向かって、「塩ラーメン四つ」と声を上げる。彼女の父である「ラ・ソルティ」の店主は、「変なことに巻き込まれたなあ」とため息を吐きながら、料理を作り始めた。それでも協力している辺り、思春期の娘には何かと弱いらしい。

「お待たせしましたー」

そして、奈美がラーメンを持ってきた。彼女が指定した通り、塩味の出汁のラーメンだ。

具はチャーシュー、煮卵、メンマ、ねぎなど。変に凝ったりせず、王道を押さえている。サラリーマン達はカウンター席に腰掛けたまま、割り箸を取ると一斉に割った。「いただきます」と口々に言っつて、麺をすすり、スープや具材を味わう。

「うん、美味しいよ」

「やっぱり『ラ・ソルティ』は名前だけあつて塩味のスープが絶品だね」

「いつものなじんだこの味、たまりませんなあ」

「今日は半分しか食べられないのが残念だよ」

全員が機嫌よさそうに言っつて、機嫌がいいついでにビールも注文し始めた。タダなことがその機嫌のよさの半分だろうが、味が美味いというのも嘘ではないのだろう。

その感想を聞いて、「ふふん」と奈美が得意そうに隆也達を見た。もう勝ったつもりでいるらしい。客達の、いや審査員達の反応を見れば、確かにそれも頷けるが。

奈美は厨房の方に指を向けると、

「さてと、次はそっちの番よ。厨房は勝手に使っつていいわ、ラーメンを作りなさい」

「ううん、作らないよ」

来夢が笑顔で即答したので、ぎょつ、と目をむいた。

「は？ どういうつもり？ まさかラーメン作りを放棄して、逃げるわけ？ 言っつておくけど、今更謝っつても許さないわよ！」

「いや、そうじゃない。ただ、俺達のラーメンはコンセプトが違う」

「コンセプト？」

「ああ。審査員の人達にはこれを使っつて欲しいんだ」

そう言うと、隆也は持つてきた紙袋の中から、新聞紙にくるんだあるものを取り出した。形状はただのどんぶりである。ただ、彼が包装を解くと、審査員役の客から、どよめき声が聞こえた。

「おお、これは」

「なんだ、ただのどんぶりかと思っただら……」

奈美は絶句していたが、やがて、その身体を震わせてつぶやいた。

「何これ……何で、しみりちゃんがこんなところにいるの？」

そう、なぜかどんぶりの『内側』には常磐しみりの顔が、印刷されているのであった。

「うひゃあ！ いいの、これ本当にいいの？」

「やつほう、たまらんなあ！」

「あのしみりちゃんと、ディープキスだよ！ 舌入れてないけどな！」

審査員達の、馬鹿騒ぎしたような笑い声が響く。

隆也はその声を耳にしつつ、肩をすくめてつぶやいた。

「……本当にいいのか、こんなので」

「でも、お客さん達嬉しそうだよ。ほら、もうラーメン食べ終わってる。さつきと同じものなのねえ」

そう、彼らが食べているラーメンは先ほど美奈が出したものであった。それをどんぶりに移し替えた瞬間、審査員達の目の色が変わった。

ちようどどんぶりの縁に、プリントされた常磐しみりの口が来ている。そして内側に唇

から上、外側に顎と首の部分が印刷されていて、ある角度でどんぶりをすすると、その唇にキスしているように見える仕組みだ。その際、顔が湾曲して見えないように調整して印刷されていることは言うまでもない。

彼らは興奮し、ラーメンをそそくさと平らげ、しみりの顔が露出し始めた頃合いを見て楽しそうにどんぶりを傾けている。その光景を見て、奈美は悔しそうに歯ぎしりした。「くっ、何これ！　こんなの卑怯じゃない！　どうして正々堂々と普通のラーメンを作らなかつたのよ！」

「いや、普通のラーメンだったら名物にならないし。それに、真っ正面から作ったところで、どうせ負けるだろ。それならラーメンじゃなくて、それに付随する何かで対抗するしかないと思っただ」

そこで隆也が目をつけたのがどんぶりだったわけである。誰もが知っている国民的アイドルとキスできるどんぶりなら、大体の人間が喜ぶと考えたのだ。

そこでオリジナルの食器を扱ってくれる店に頼み、わざわざこのどんぶりを特注した。問題は自分達がラーメンを作れないことで、いざとなったらインスタントラーメンで誤魔化そうとも考えていたのだが、奈美がラーメンを半分残すと宣言したことで解決した。

「ま、馬鹿っぽいアイテムだが、アルコールが入ったオッサン相手ならウケそうだったからな。地方の土産物屋で売っている、地名入りTシャツとかとノリは変わらないし。一応名物としてのベクトルは間違っていないだろ」

世間からはマニアックの烙印を押されるだろうけどな。これは心の中でそつとつぶやく。

ちなみにこれを来夢に提案した時、さすがにどん引きされるかと思つたが、素直に「隆くん、凄い！」とほめてくれた。来夢が来夢で良かったと、隆也は思ったものである。

と、その来夢が、おずおずと奈美の顔をのぞき込んだ。

「どうかな、浅野さん。これ名物になると思う？」

「……まあ、ある意味ね」

複雑そうに息を吐くと、奈美は隆也達に背を向けた。もう、すべてが馬鹿らしくなってきた。そう言わんばかりの声色で、言葉が続ける。

「いいわ、あなた達に別れるなんてもう言わない。むかつく気力も失せたから。馬鹿は馬鹿同士、一生イチャついてればいいんじゃないの」

「いや、ちょっと待て、俺は馬鹿じゃない！ このアイデアは仕方なく出した苦肉の策なだけで、俺も正直どうかと思ってるんだからな！ 後、こいつとつき合ってもいけないぞ！

頼むから、その辺はいい加減理解しろ……って、おい、無視してレジに行くな！ わざとらしく客の注文取りに行こうとするな！ 聞いてるのか、こらあ！」

「はえっ？」

結局。隆也の訴えは、前と同じく話をまったく聞いていなさそうな来夢のつぶやき声と共に、奈美にすべて無視されたのであった。

○

とある日の放課後。来夢は一人で市役所に訪れていた。

理由は明白で、隆也考案したラーメンというかどんぶりを、早速名物として提案しに行ったのである。この辺、彼女の行動力は無駄に高い。

本当なら隆也にも来て欲しかったのだが、「そこまで面倒見られるか」と一蹴された。

「まあ、私一人でも大丈夫だよ。お客さんの反応とっても良かったし。きっと名物として認められるよ」

そして、市役所の一室で観光課の担当者と顔を合わせることになる。二人は簡素な机を差し挟んで対峙し、パイプ椅子に腰掛けた。

来夢は今までの経緯を話すと、机にどんぶりを置いてみせた。

「……というわけで、とってもウケが良かったんです。これをN市の名物にして欲しいんですけど」

わくわくと期待のこもった口調で言う。

しかし、担当者の男性は首を傾げながらどんぶりを取り上げ、ためつすがめつした後、首を振って机の上に置き戻した。

「駄目ですね」

「え……?」

「これをN市の名物と認めるわけにはいきません」

木で鼻を括るような言葉に、来夢は泣きそうな声を上げた。

「ええええええ? どうしてですか! だってこれ、ラーメン屋のお客さんも喜んでいただきますよ! 地方のおみやげ屋さんみたいな感覚でいけるって、友達の隆くんも言っていましたし……勉強いっぱいできて、とっても頭いいんですよ、隆くんは。あと、優しくつ

て、頼りになるんです。小学生の時も遠足で私がお弁当忘れた時に……」

「その隆くんが誰かは知りませんが」

順調に脱線しつつある来夢の言葉を遮り、咳払いをして担当者は説明を続ける。

「これが、集客力があるものだというのは、まあ百歩譲って認めましょう。ちよつとマニアックな感じもしますが」

「じゃあ」

「しかしですね、問題はこれです」

そう言つて、彼はどんぶりの内側を指さした。常磐しみりの写真がある。

来夢は怪訝そうな顔で、恐る恐る尋ねた。

「しみりちゃんが、何か悪いんですか？」

「悪くはないですが………常磐しみりは別にN市の出身でも何でもありませんからね。従つて、このどんぶりを使ったラーメンは『N市の』名物にはなりません」

「あ」

ぽかん、と彼女の口は開きっぱなしになった。

「隆くんっ！ やっぱり駄目だったあつ！」

「うん、そうか」

部屋に上がり込んできて、涙目で報告する来夢を横目に、隆也は参考書とノートを開きつつドライに頷いた。

涙を引つ込ませた来夢が、きよとん、と首を傾げる。

「あれ、何かあっさりとしてるね」

「まあ、この結果が予測できなかったわけじゃないからな」

むしろ、そうすんなり行くはずないと考えていた隆也であった。だが、当人にとってそれは、どうでもいいことだった。

これで「名物作りを考えてやる」という、来夢の依頼は果たせたのだから。これだけやれば結果が失敗に終わっても、当人は納得してくれるだろう。

「ま、これでお前も名物ラーメンを作るのは諦めたよな？」

「うん……」

殊勝にうつむく来夢。さすがに今回のことが身にしみたのだろう。

そう思った隆也はまだ甘かった。

「だからね、次は違う名物を作ろうと思うの！」

「は？」

「ラーメンじゃなくて、違う奴！ それならまた作れる気がするから！」

「いやちよつと待て」

嫌な予感がして、隆也はうめいた。

案の定、来夢はうるうるとした瞳をこちらに向けてくる。

「そういうわけで、隆くんお願い」

「イヤだ」

「そう言わないで、これもN市のため、ひいては隆くんのためなんだよ」

「イヤだって言ってるだろうが！ 大体俺のものを考えるなら、そっと勉強させておいて

くれよ！」

「うー」

「だから、そんな目でこっちを見るなって……こ、今度は釣られないからな！」

しかしその決意が早くも崩れさろうとしているのは、他ならない当人が気づいていた。

どうやら、隆也を巻き込む来夢の名物作成は、まだまだ続く……らしい。



NONSTOP

An anime-style illustration of three young girls in school uniforms. The girl on the left has long blue hair and a blue headband. The girl in the center has blonde hair and a surprised expression. The girl on the right has reddish-brown hair. They are standing in front of a large clock tower with a blue roof. A large musical staff with notes is superimposed over the scene. The entire illustration is framed by a decorative green border.

響け、 私たちの歌声

広野未沙

Illustration: うらら

土田菜々子
(つちだななこ)

優華女学院合唱部部長。高三。成績優秀で教師の信頼も厚い。さばさばしている。



酒井有香
(さかいゆか)

高一。受験日当日の事故により優華女学院に通うことに。平凡な家庭で育った平凡な女子高生。



友枝ひかり
(ともえだひかり)

有香のクラスメイト。純粹培養のお嬢様。誰もが認める美少女。合唱部。



第一話 ようこそ、合唱部へ

教室の窓の外に視線を向ければ、満開の桜の花が目に入る。このN市に桜前線が来るのは、四月の半ば。ちようど新入生が新しい環境に慣れ始める頃。

もつとも、酒井有香には、思った通りの桜の花は咲かなかったのだけれど。

放課後を告げるチャイムが鳴る。その瞬間、教室がわつと華やいだ。

そんな教室の雰囲気とは対照的に、有香はふう、と息をつく。

女の子ばかりの教室というのは、やっぱりなんだか慣れない。第一、この優華女学院は中学からの持ち上りの生徒が多く、高校からの入学者は少数派だ。すでに中学時代からできあがっている仲良しグループがある。

別に話せる子がいらないわけじゃない。同じ中学から来た子だって少ないけれどいる。ただ、有香はどのグループにも入りそびれていた。

たぶん、有香自身の問題なのだろう。自分でも、どうかしなくちゃいけない、というのはわかっている。けれど——やっぱり学校になじもう、という気力がわかないのだ。

この学校に通うのは、非常に不本意だったから。

高校受験に失敗する。

有香は、まさか、自分がこんな状況に陥るとは思っていなかった。中学でも成績はトップクラス。第一志望の中央高校にも、合格確実の太鼓判を押されていた。自分が落ちるなんて、みじんも考えていなかった。

それなのに。不運としか言いようがない。

よりによって高校入試当日の朝、有香は車にはねられてしまったのだ。軽い脳しんとうで意識を失った。有香が目を覚ましたとき、受験の時間は終わっていたのだ。

つまるところ、不戦敗。いくら成績がよくても、受験できなければ意味がない。

幸い、事故による怪我は軽く、脳の精密検査の結果も異常なしだった。けれど、過ぎてしまった時間は取り戻すことが出来ない。公立高校故に、受験チャンスも一回だけ。希望をつないだ二次募集もなかった。

結局、万が一の滑り止めにと受けていた私立の女子高——優華女学院に通うことになってしまったのだ。

事情を知る周囲は、お嬢様学校って素敵じゃない、などと励ましてくれたけれど、有香にとって「お嬢様学校」はステータスではなかった。ごく普通の庶民の家に、学費の負担だつて重くのしかかる。親は何も言わないけれど、それが申し訳ない。

せめて、自分が全力でぶつかつた結果が優華女学院への進学だつたら、まだ受け入れることができたかもしれないのに。

「ねえねえ、酒井さん」

クラスメイトの友枝ひかりが声をかけてきたのは、有香が帰ろうかと思っていたときのことだった。

友枝ともえだひかり。お嬢様学校と言われるこの女子高の中でも、誰もが認めるお嬢様だ。

父親はN市に本社を持つとある企業の社長。さらに、N市では大地主として有名な塚本家とも親戚関係にあるという。くりくりとした瞳が特徴的なかわいらしい顔。少々小柄なところが、保護欲をそそる。

ひかりとは、二言三言話を交わしたことがある。でも、それだけだ。

ごく普通のサラリーマンの家庭に生まれ育ち、容姿もいたって平凡な有香にとって、ひかりは特に別世界の人間だった。

一体、そんな彼女が何の用だろう。

有香は、浮かせかけた腰を再び椅子に落ち着かせる。有香の向かい側に立っているひかりと目を合わせた。

「えっと、何か用？」

「あのね、今日、時間ありますか？」

「……何故？」

有香は首をかしげた。口にしてから、自分でもちよつと不機嫌そうだったかな、と反省する。ひかりを邪険に扱うつもりはないのだ。ただ、どうしてひかりが自分に話しかけてきたのか、疑問なだけで。

幸いなことに、あまりひかりは気にしなかったらしい。

「その、酒井さんは、まだ部活入ってないよね？」

「そうだけど」

別に部活は強制じゃない。今のところ、特に入る予定はなかった。中学時代、友だちに誘われて入った柔道部も、この学校にはない。続けるつもりはなかったから、それはかまわないのだけれど。

「酒井さんは、中学時代、どんな部活やってたの？」

「じゃあ、入ろうと思ってる部活、ある？」

「特にはないけど……」

「よかった。もう決めたって言われたら、どうしようかと思って」

ひかりはほっと胸をなで下ろしている。ふわり、とひかりの柔らかい髪が揺れる。

「それが、どうしたの？」

有香は眉をひそめる。

「その、実は、酒井さんに頼みたいことがあるというか、その、ああ、もう。単刀直入に言うね？」

ひかりは、有香の机に両手をつくくと、軽く身を乗り出してきた。

「酒井さん。合唱部に入らない？」

(どうしてこうなっちゃったんだろう)

有香は、ひかりと並んで、合唱部の活動拠点である第二音楽室へと向かっている状況に戸惑う。

ごめん。あたし、部活に入るつもりないんだ。
ひかりにそう答えて話は終わりのはずだった。

しかし、ひかりは簡単には引き下がらなかつた。もう酒井さんしか誘えるひとがい
の。見学だけでもいいから。お願い。そんなふうにも泣きそうな顔で美少女に拝み倒
されては、有香としても無碍には断れない。

(あたしって、押しに弱かつたんだ)

十五年間生きてきて、初めての発見。

結局、見学だけね、と何度も念を押し、ひかりに付き合うことになった。

ひかりは、懸命に合唱部について説明している。

「時間はね、だいたい四時から五時半までの一時間半。休日の練習は、大会前にひよつと
したらあるかも、くらいかな」

どうやら、今のところ、合唱部、新入部員がひかりだけらしい。それで、必死になつて
新入部員を捜しているところだという。

「ほら、うちの学校、吹奏楽部が強豪でしょう？ 音楽系の部活に入りたいひとは、みんな
吹奏楽部に入っちゃうんだよね」

確かに吹奏楽部が強い、という話は聞いたことがある。全国大会の常連だと学校案内に
も載っていた。中学時代、吹奏楽部の友だちが、部活のことだけを考えるなら、優華女学
院に進学したい、と語っていたことを思い出す。

「どうも、合唱部は吹奏楽部の影に隠れちゃうんだよね」

ひかりは苦笑する。

「でも、人数は少ないけど、楽しい部活だよ？」

「そう」

有香はひかりの話に耳を傾ける。実際の処、興味はあまりわかない。

合唱なんて、中学の頃の校内合唱コンクールでやったくらいだ。男子がなかなか声を出さなくて、苦勞した覚えしかない。

第二音楽室は、三階にある。近くの第一音楽室からは、楽器の音が聞こえてくる。吹奏楽部だろう。音楽室だけでは足りないのか、隣の視聴覚室にも、楽器をもった生徒がいる。「こつちだよ。酒井さん」

ひかりは、がらりと第二音楽室の扉を開けた。

広さはグランドピアノの分だけ、普通の教室よりはやや広い。机と椅子を半分ほど後ろに寄せて作った空間に、生徒たちが立っている。

その数、四人。うち、一人はピアノの前にいる。

少ない、とは聞いていたけれど、ここまで少ないとは思っていなかった。

扉が開いた音に反応したのだろう。生徒たちの視線が、有香とひかりに集まる。

ひかりは気にした風もなく続けた。

「菜々子ななこさん。見学者、連れてきました」

ピアノの前に立っていた生徒が、こちらへやってくる。彼女が「菜々子ななこさん」なのだろう。

「菜々子ななこさん」は、すらりと背が高く、大人っぽい雰囲気を持っていた。

「私のクラスメイトの酒井有香さんです」

ひかりの紹介に、有香は慌てて頭を下げる。

「菜々子さん」は軽く口元に笑みを浮かべた。

「どうも。私は、合唱部の部長の土田^{つちだ}菜々子、三年です。見ての通り人数が少ない部活だけれど、気に入ってくれると嬉しいわ」

有香は黙ってうなずいた。まさか、最初から入るつもりはない、とは言えない。

じゃあごゆっくり、そう言って菜々子はグラランドピアノの方へ戻る。

「本当は、一番最初に腹筋と背筋を四十回ずつやるんだけど、今日はもう終わっちゃったみたいだね」

ひかりは、片付けてある椅子から、一つ取り出すと有香に勧めてくる。有香は礼を言って、遠慮なく座ることにした。

「ひかり！」

菜々子に呼ばれて、ひかりが大きな声で返事をする。

「はい！」

「ほら、発声練習を始めるよ」

「今、行きます！」

そう答えてから、ひかりは有香の方に振り向く。

「じゃあ、いつてくるね。わからないことがあったら、何でも聞いてね？」

何でも聞いてね。そう言われたものの、発声練習を見ている、特に疑問がわくわけではない。第一、歌っているところに割り込むわけにもいかない。

あーあーあーあーあ。ドミソミドのメロディが半音ずつあがっていく。

(どうしてあたし、こんなところにいるんだろう)

有香は、なんだかため息をつきたい気分になった。

「酒井さん」

いきなり菜々子に声をかけられて、有香の体がびくりと震えた。

「歌ってみる？」

どうやら、発声練習は終わったらしい。楽譜を持った菜々子が、有香の前に立っていた。

「……ただ見ているだけっていうのもつまらないでしょう？」

「え、でも」

「大丈夫よ。そんなに難しい曲をやるわけじゃないから。楽譜は、私を見せてあげる」

「……は、はい」

菜々子の威圧感に負けてしまい、有香はこくりとうなずいた。

「大会まで時間もあるし、今は、いろいろな歌を歌うことにしてるの。今日は、私と一緒にアルトでいいかな。歌いにくいパートで申し訳ないんだけど」

「はい」

菜々子が出したのは、女声三部合唱集だった。誰も知っている日本の歌が女声合唱に編曲されている曲集らしい。

今、これをやっている。そう菜々子が指さしたのは、おぼろ月夜だった。

「じゃあ、こっちきて。悪いけど、これ持ってくる？」

楽譜を渡される。菜々子は教室に置いてあったキーボードを持った。

ピアノの前では、ひかりが先輩と共に歌っている。聞こえてくるのは、有香も知っているおぼろ月夜のメロディ。だが、時折、慣れないメロディになる。

「今日は私がじゃんけんにも負けたから、廊下で練習」

廊下では、吹奏楽部も練習しているらしく、フルートの音色が聞こえてくる。他にも、いろんな楽器の音が耳に入ってくる。

「まあ、ちょっとうるさいかもしれないけど、我慢して」

菜々子は、苦笑すると、キーボードを弾き始めた。どうやら楽譜のメロディーをなぞっているらしい。アルトと菜々子は言っていた。暗譜しているのだろう。楽譜を見ていないのにも関わらず、菜々子の指運びには迷いがなかった。

どうしよう。まさか、歌う事になるとは思っていなかった。

「あの、あたし、まだ」

思い切って、有香は、メロディを弾き終えた菜々子に声をかける。菜々子が、有香に視線を向けた。

「ああ。別に、無理矢理とつかまえて入部させようとは思っていないから安心して。どうせ、ひかりが強引に連れてきたんでしょ？」

否定できないので、有香は曖昧に微笑む。やっぱり、と菜々子は息をついた。あの子、昔からそうだから。そういう菜々子の口調はどこか親しげで、ひかりと以前から交流があることを思わせた。

「うちの学校って、五人以上じゃないと部活として認めてもらえないのよね。ぎりぎり五人いるから、大丈夫だって言ったんだけど」

「毎年、こんなに少ないんですか？」

「この学校では、あまり合唱の人气がないからね。まあ、うちの県自体、合唱が盛んって

わけじゃなかったりするんだけど。特に高校。全国大会いったことあるのは、中央高校くらいじゃない？」

中央高校。その単語を聞いて、有香の胸はちくりと痛む。

有香が行きたかった高校。

菜々子は続ける。

「まあ、その中央高校も、最近では地区大会の壁が突破できなくて、苦しんでるみたいだけどね。うちから言わせてみれば、大会に出られるだけでもマシって話」

「大会、出ないんですか？」

「出ないっていうか、出られないっていうのが正しいのかな。合唱協会が主催する合唱コンクールがあるんだけど、八人以上じゃないと、参加できないのよ。私が一年の時は、ぎりぎりまで参加できたんだけど」

「でも、さつき、大会っておっしゃったような気がするんですけど」

「ああ。それ。十一月に、県の合唱協会が主催するヴォーカルアンサンブルコンテストっていうのがあるの。少人数の合唱の大会、って理解してくれていいよ。それが今のところ、唯一の大会。うちの部で大会って言ったなら、アンコンのこと。もっとも、県大会で終わるんだけどね」

「十一月？ 十一月って、三年生もそんな時期まで部活するんですか？」

有香は目を丸くした。三年生は、大学受験があるではないか。今年大学生になった有香の兄は、六月には部活を引退していた。

「まあね。他の学校は、三年生が参加しないところも多いけど、うちの学校は、大会がこ

れただけだからね。それに――ほら、うちの学校は内部進学が多いでしょう？」
つまり、他の学校ほど受験がきつくない。そういうことだろう。

「……」

この学校で、有香が一番引つかかっているのがこれだった。

有香の目標は、今のところ、地元の国立大学に進学することだ。数学が好きな有香は、理系の学科に進みたいと思っている。

でも、この学校では、大半が付属の短大に進学するという。毎年外部の大学を受験する生徒もいて、その中には、有香の志望の大学に合格している生徒もいる。けれど、それは少数派だ。

ほとんどが内部進学という状況で、大学に合格できるのだろうか。しかも、理系。三年間、出来る限り自分で勉強をしなくちゃいけないのではないだろうか。

有香はうつむく。少しの間を置いて、菜々子が言った。

「じゃあ、おしゃべりはこれまで。少し、声を出してみようか」

顔を上げると、菜々子がつこりと微笑んでいる。妙に迫力のあるその笑みに、有香はおおずとうなずいた。

「歌うのって楽しいでしょう？」

帰り道、にこにこことひかりが笑いかけてくる。成り行きで、ひかりと一緒に帰ることになってしまったのだ。わざわざひかりは、いつもの送迎を断っていた。それを聞いてしまつては、有香だつて断るわけにはいかない。

方向を確認したところ、駅までは帰り道が同じらしい。ひかりは、有香が部活を見学してくれたこと自体が嬉しいらしく、とても楽しそうだ。足取りも心なしか弾んでいる。

そこまで喜んでもらえると、有香としては、逆に申し訳ない気分になってくる。

初心者の有香にとつて、アルトのパートは歌いにくかった。おぼろ月夜の曲は知っているけれど、その耳になじんだメロディがあまり出てこない。何度も何度も間違ってしまう。楽譜と違うとは分かっているけど、自分の知っているメロディを歌いたくなってしまふ。アルトだけで歌っていてもこれなのだから、全体で合わせるとまた一苦労だった。

それでも、三つのメロディがきつちりと合った瞬間は、気持ちよかった。

何かがすくとんと落ちたような、そんな感激があった。

けれど。入部する、とはとてもじゃないけれど、言えなかった。

やっぱり、三年生の十一月まで部活、というのは無理だと思う。絶対に、大学受験は失敗したくなかった。

——まあ、すぐに答えを出すのも難しいだろうし、一週間後くらいに答えを聞かせてくれたらいいよ。

部員の期待感の混じった視線の中、部長の菜々子が助け船を出してくれたときは、とてもほっとした。

ほとんどひかりが一方的に話している。有香は、聞き役に徹していた。

ひかりは、素直で屈託がない。本当に純粹培養のお嬢様という感じがする。有香の周りにはいなかったタイプだ。

そろそろ駅前にさしかかる。

駅前は、今、有香にとって辛い空間だった。

中央高校の制服を着ている生徒が歩いているから。もちろん、町のどこを歩いても見かけることはある。でも、駅前での遭遇率が一番高い。

「私、中学時代も合唱部だったんだけど、同じ学年が私しかいなくて寂しかったの。だから、無理にとは言わないけど、前向きに検討してくれると嬉しいな」

満面の笑顔。有香も懸命に笑顔を作る。ひかりのきらきらと輝いた瞳がまぶしくて、入るつもりはない、とは言えなかつた。合唱部だから、というわけではなく、どの部活にも。でも。有香は思い直す。

ここで曖昧な態度をとれば、ひかりは有香が合唱部に入ると期待するだろう。そのつもりがないのだから、きっぱりと言うべきではないのだろうか。

友枝さん。そう、有香は勇気を出してひかりの名前を呼ぼうとした。

そのとき、視界に中央高校の生徒が入った。あ、と声を上げてしまう。顔がこわばつたのが、自分でもわかつた。思わず足が止まる。

——中学の同級生たちだった。有香の憧れだった紺色のブレザーを着て、楽しそうに談笑している。

本当だったら、有香も、その中の一人だったはずなのに。

向こうも有香に気づいたらしい。足を止める。有香が中央高校志望だったことを知っているからか、気まずそうに顔を見合わせている。

「どうしたの？ 酒井さん。顔色、悪いよ？」

ひかりが顔を覗き込んでくる。有香は慌てて首を振った。

「なんでもないよ」

「行こうか、とひかりを促す。ひかりは戸惑いながらも、何も言わずについてきてくれた。酒井さん。大丈夫？」

別れ際まで、ひかりには心配をかけたばなしだった。もしかして私が合唱部に無理矢理誘ったから？ とまで言わせてしまって、有香は反省する。

ひかりは別に悪くない。悪いのは――あたし。

「大丈夫。別に友枝さんがわるいってわけじゃなくて、あたしの――問題だから」

「あの子、けっこういい声してたね」

部活が終わったあとの第二音楽室。合唱部副部長の月岡若菜つきおかわかの言葉に、土田菜々子は動かししていたペンを止めた。残っているのは三年生の二人だけだ。

場所の確保の為に後ろに片付けていた机と椅子は、元通りに戻してある。その一番後ろに席に菜々子は座り、若菜はその隣の机に腰掛けている。

菜々子は毎日、部活後に日誌を書いている。部長が気づいたことを記していく日誌は、合唱部の伝統のようなものだった。

「確かにね」

「入ってくれるかなあ」

「別に、今年はひかりが入ってくれた時点で部の存続は決まっているでしょ。今さら一人増えたところで、協会のコンクールに出られるわけでもないし」

菜々子は日誌を書く手を休めないまま答える。若菜はうんと伸びをした。

「ま、それもそうなんだけども。でも、多い方が楽しいじゃん？」

「それにあの子」

菜々子のシャープペンシルを動かす手が止まる。

「どうしたの？ 菜々子」

若菜が首をかしげる。ぴよんと机から飛び降りた。

「ちよっと昔の私を思い出した」

菜々子は、少しだけ遠い目を見ると、ぼたりと日誌を閉じる。

「今日はこれで完了。帰るよ。若菜」

朝。学校の敷地に入る度に、有香はため息をつきたくなる。今日が早く終わらないかなと思う。いかにもお金がかかっているという風情の立派な校舎。自分が通うとは、夢にも思わなかった学校。

自分でも後ろ向きなのはわかっている。でも、どうしても考えずにはいられないのだ。——どうして、あの日、自分は事故に遭ってしまったのだろうか。

本当だったら、自分は今頃、紺色のブレザーを着て、自転車で高校まで通っていたはずだ。それなのに。時間はどうして戻ってくれないのだろう。

三年間。大学へ行くためのステップとして、割り切るしかないのだろうか。

「おはよう。酒井さん！」

元気な声に呼びかけられて、有香は足を止めた。

「お、おはよう」

後ろから駆け寄ってくるひかりに、有香は少し戸惑う。

「酒井さんは、いつもこの時間？」

ひかりは人なつこい笑みを浮かべると、有香の隣に並んだ。

「まあ、だいたいは」

「そうなんだ。私もいつもこれくらいなんだ」

「……」

話が続かない。二人の間の共通の話題は学校のことしかないだろう。どうしよう、と悩んでいると、ひかりの方から話し出す。

「ねえねえ、酒井さん。今日の数学の宿題やった？」

「一応」

「そうなんだ。全部解けた？ 私、一問だけどうしても解けない問題があったの。最後の問題なんだけど」

確かにあの問題は、数学が得意な有香でも骨があると思った。

「……よかったら、私の見る？」

自分でもどうしてこんなことを言ってしまったのかわからない。

あまりにもひかりがあっさりと垣根を乗り越えて話しかけてきたからだろうか。

「本当？ あ。でも、答えを直接見せてもらうより、教えてもらった方が嬉しいな。お昼休みでいい？」

「いいよ」

「ありがとう。助かる。私、数学って苦手だから」

ひかりのリアクションが大げさに見えて、有香は苦笑してしまった。

「あのね、私、酒井さんともっと仲良くしたいと思うんだ」

「え？」

いきなりのひかりの言葉に、有香は驚く。

「あ。誤解しないでね。合唱部に入ってほしいから、ってわけじゃないから。酒井さん、私の話、きちんと聞いてくれたでしょう？ もっと邪険に扱うことも出来たはずだし、聞いている振りして適当に相づちを打つことだってできたのに。私、それが嬉しかったんだ」
屈託のない笑み。

「……」

人の話を聞くのは当たり前だ。特別なことをしたつもりは、有香には全くなかった。

「まあ、入ってくれた方が嬉しいのは否定しないけど」

えへへ、とひかりは笑う。

「でも、別に合唱部に入ってくれなくたって、私が、酒井さんと仲良くしたいのは本当だから」

ここまで素直に感情を出せる人間というのに、有香はあまり出逢ったことがなかった。ここまでストレートに仲良くしたいって言われたのも初めてだった。

きつと、ひかりは、周囲からすぐく愛されてまっすぐに育ったのだろう。そして挫折も知らずここまで来たのだろう。

「駄目、かなあ」

「駄目じゃないけど」

「ありがとう」

教室に着く。じゃあ、お昼も一緒に食べようね。そう言い残して、自分の席へと向かう。ひかりの後ろ姿を、有香は羨望の混じった視線で見つめる。

合唱部を見学してから、そろそろ一週間が経とうとしている。

あれから、なんだかんだでひかりと一緒にいることが多くなった。有香と仲良くしたい、というひかりの言葉に嘘はなかったらしい。クラスメイトに、友枝さんといつの間に仲良くなったの？ と驚かれたほどだ。

その一方で、ひかりに、合唱部に入るつもりはないことをまだ言っていない。

言わなくちゃ、と思うのだけれども、うまく言葉が口から出てくれなかった。

ひかりの方も、あまり合唱部の話をしない。部活に行くときだって、いつてくるねーと軽く声をかけてくるだけだ。見学に誘うこともしない。

見学日の押しの強さを知っているから、むしろ拍子抜けしてしまう。

(なんとなく気づいているんだろうな)

はあ、とため息をついて、有香は立ち上がった。

今日もやっと一日が終わった。早く家に帰ろう。

「酒井さん」

放課後。教室を出たところで、声をかけられる。——意外な顔に、有香は驚いた。土田菜々子。合唱部部长。

「土田、先輩」

まさか、一度しか逢っていない菜々子に声をかけられるとは思わなくて、有香は戸惑う。三年生にとつて、一年生の教室がある場所は、用事でもない限り通りかかるようなところではない。

「名前、覚えていてくれたんだ」

菜々子がほんの少し表情を柔らかくする。

「悪いんだけど、教室にひかり、いる？」

「どうやら、ひかりに用事があつてわざわざ一年生の教室にきたらしい。」

「友枝さんなら、もう部活に行きましたけど」

「ありがとう。考えてみれば、当たり前の話よね」

菜々子はひとりうなずいている。

「酒井さんは、これから帰り？」

「あ。はい」

「そうか。邪魔してごめんなさいね」

菜々子は軽く頭を下げると、正面玄関とは逆に方向へと歩き出す。

「そうだ。有香は思った。」

「ちょうどいい機会だ。今、菜々子に合唱部に入るつもりはないと言えればいいのではないだろうか。そうすれば、きっと、ひかりの耳にも入るだろう。今日だって、これから菜々子は部活にいくはずだし。」

「あ、あの」

有香は歩き出そうとする菜々子にがんばって声をかけた。

「何？」

菜々子が振り返る。

「あの、あたし、大変申し訳ないんですけど、やっぱり合唱部には入りません」

有香は思い切りよく頭を下げる。完全に有香の方を向くと、菜々子は息をついた。

「まあ、だいたいわかっていたけどね。やっぱり、時間的な問題？ 勉強したいとか」

「……え？」

凶星を指されるとは思わなくて、有香は思わず菜々子の顔を見る。

「酒井さん、アンサンブルコンテストが十一月だつていうの、けっこう気にしていたじゃない？ だから、外部受験を考えているのかなと思つてただけど。違う？」

有香はゆっくりとうなずいた。

「やっぱりね。私も入るときは同じことを考えたな。だから、私の場合、一年間だけつていう約束で最初入つたのよね」

「一年間だけ、ですか？」

「うん。私の年は、ほら、ぎりぎりでコンクール出たつて話したでしょ？ 先輩たちも必死だったのよ。あと一人確保すればコンクールつて。それで拝み倒されて折れた感じかな」
「どうして先輩はやめなかつたんですか？」

すでに菜々子は三年だ。そして部長までしている。

「気づいたら、合唱部が私の居場所になつてたから」

菜々子はさらりと答えた。口元にかすかに浮かぶ笑み。

「……」

居場所。その言葉が、何故か有香の心に響いた。

「まあ、了解したよ。ひかりにも伝えておく。悩ませちゃってごめんなさいね」

菜々子の言葉に、有香ははっと我に返る。

「いえ、あたしこそ、すみません」

去っていく菜々子の後ろ姿を見送ってから、有香は玄関へと向かう。部活をしている生徒が多いのか、この時間、玄関は閑散としている。

ずっと有香の頭を離れなかった懸案が一つ解決したはずなのに、心は思ったより晴れなかった。

頭を離れないのは、菜々子の居場所という言葉。

(あたしの居場所はどこなんだろう)

朝。なんとなく、ひかりと顔を合わせるのが憂鬱だった。ひかりはきつと、昨日、菜々子から有香が入部しないことを聞かされているだろう。

ひかりは、どう思っただろう。

校門をくぐり、校舎へと向かう道。周りには、同じ白いブレザーに青いスカートという制服を着た生徒たちが歩いている。

「おはよう。酒井さん！」

いつもの通り、ひかりの元気な声が飛んできて、有香は戸惑った。

「おはよう。友枝さん。その」

「あ。部活のこと？」

ぴよん、とひかりは有香の隣に並ぶ。

「昨日、菜々子さんに聞いたよ。別に気にしないで。確かに残念だなーとは思うけど。私だつて、けっこう強引に見学させちゃったなあって思ってたくらいだから」

きつと、ひかりの言うことは本心なのだろう。

「それに、前に言ったでしょ？ 酒井さんと仲良くしたいって。それは合唱部に入つてほしいのとは関係ないって」

「ありがとう」

有香は微笑む。心からの気持ちだった。

「昨日、菜々子さんに逢ったんだね」

「うん。友枝さんのことを探していたみたいで。それで。その、土田先輩って外部受験するの？」

「あー。菜々子さんね。うん。そのはずだよ」

そう言つてひかりが菜々子の志望だと挙げたのは、誰でも知っているような東京の有名私大の名前だった。

「菜々子さん、頭いいからね。本当はもつと進学校って呼ばれるような学校に入りたかつたんだけど、親がどうしてもこの学校に行かせたかつたんだって。大学は好きなどころ行かせてもらう代わりに、この学校に入ることになったみたい」

「詳しいんだね」

「うん。家近いし。幼なじみみたいなものだから」

だから、土田先輩、ではなく、菜々子さん、と呼ぶのだろうか。

ひとつ、はっきりとしてるのは。

(友枝さん、土田先輩が大好きなのね)

ひかりは、本当に思っていることが素直に顔に出る。羨ましい、と有香は思った。

「じゃあ、私、部活行ってくるね！」

放課後。元気に教室を出て行くひかりを見送ってから、有香はゆるゆると席を立つ。

ひかりには、悪いことをしてしまったかな、と思う。合唱部の活動自体が面白くなかったわけじゃないのだ。

でも。

——絶対に大学受験は失敗したくない。

家に帰って、すぐに勉強をするわけでもないのは分かっている。

校舎を出る。真つ青な空が広がっている。桜がゆつくりと散り、歩道は花びらの色に染まっていた。

有香はなるべく急いで家へと向かう。駅に近づくと、少しずつ他校の生徒の姿も混じるようになっていく。その中には、中央高校の生徒の姿ももちろんある。

「有香！」

あまり聞きたくなかった声に、有香は自分の体が震えるのが分かった。

駅の近く。見れば、近くのコンビニの前に、知っている顔が立っていた。

亜美だ。中学で、一番仲が良かった同級生。小柄だけれど実は武闘派で、有香を柔道部に誘った張本人。そして今は、中央高校に通っている。

「久しぶり！」

亜美は、大きく手を振ると、こちらに駆け寄ってきた。着ているのは、真新しい紺色のブレザー。

「ずっと、連絡くれないんだもん。心配してたんだよ。新しい学校どう？」

「楽しい、よ」

有香は精一杯、笑ってみせた。

「そう？ ほら、あんまり優華つていいイメージなかったじゃない？ でも、有香がそう言うのならよかったね」

亜美はにっこりと笑う。

公立の学校に通う生徒たちにとって、私立の高校はあまりいいイメージがなかった。お金持ちで高くとまっている、とか。そのことを亜美は言っているのだろう。

「あたしもね、けっこう楽しいよ。中学と高校ってやっぱり違うね。有香と違う学校になつて残念だったけど、新しい友だちも出来たし。あたし、弓道部に入ろうかなって思ってるんだ。中学にはなかったでしょ？ 面白そうだなって」

「そうなんだ」

「有香は？ 何か、部活入る？」

「あたしはまだ考え中かな」

亜美は自分の高校生活を語り出す。どうやら早速気になる男の子もいるらしい。高校生活を心の底から楽しんでいるのがよくわかった。笑顔もはつらつとしている。

——それにひきかえ、あたしは。

ひかりという友だちは出来た。

けれど、未だに優華に通っている自分にしこりがある。

「じゃあね。またメールするね！」

「うん」

亜美とは笑顔で分かれたけれど、有香は泣きたい気持ちだった。

連絡を取らなかつたのだから、高校生活に慣れるのが忙しかつたとかいうわけじゃない。亜美に嫉妬してしまうであろう自分がよくわかつていたからだ。

目頭が熱くなる。

(あたしだって、中央高校に入りたかつた)

でも、時間は巻き戻ってはくれない。今の状況を受け入れるしかない。

それはわかっている。

こんな気持ちのまま、三年間を過ごすのは有香だって嫌だ。

どうすればいいんだろう。

どうすれば受け入れられるのだろう。

ふと、菜々子の言葉を思い出した。

——居場所。

ひかりによれば、菜々子は進学校に入りたかつたのだけれど、親の勧めで優華女学院に入学したのだという。有香とは状況が違うかもしれない。でも、不本意な学校に入った、という点では同じではないだろうか。

合唱部に入れば、私にも居場所ができるのだろうか。

その言葉に、有香はすがりたかった。

昼休み。有香はゆっくりと第二音楽室の扉を開ける。

待ち合わせ相手は、すでに音楽室に来ていたようだった。

「すみません。待たせてしまいましたか。——土田先輩」

「ううん。そんなことはないよ」

音楽室の一番後ろの席で、楽譜を読んでいた菜々子が顔を上げる。

土田先輩とお話したい。そうひかりに頼んだのは、今朝のこと。どうやらひかりは携帯電話のメールで菜々子に連絡を取ってくれたらしい。

昼休み。第二音楽室。それが、菜々子の指定だった。

「それで、話って何かな？」

「あの、居場所の話を知りたい」

有香は菜々子の隣の席の椅子を、横に向ける。そしてそこに座った。

「先輩。合唱部が居場所だっておっしゃいましたよね？　それで」

何を言いたいのか、自分でもよくわからない。聞きたいことはあるのに、それがうまく言葉になつてくれない。それを察したのか、菜々子が苦笑する。

「落ちてついて。酒井さん。——酒井さんは、どうしてこの学校に？」

「……」

有香はすぐには答えられなかった。菜々子は気にした風もなく続ける。

「私は、ひかりから聞いたかもしれないけど、本当は優華に来る気はなかったんだ。本当は、

公立の進学校って言われているところに行きたかった。合格する自信もあったしね。でも、母親が、優華にコンプレックスみたいなのを持って、娘は絶対にこの学校に入れるって決めてたみたいなのよね。それで大げんか。結局、大学は好きなどころに行かせてもらうっていう約束の上で、この学校に入学したの。でも最初は嫌でたまらなかった」
懐かしいな、と菜々子は目を細める。

「ほら、この学校って、お嬢様学校じゃない？ 花嫁学校って揶揄する人間もいるくらい。実際、短大までストレートで進んで、卒業と同時に結婚っていうのが珍しくないし。だから、最初は絶対周囲の雰囲気になれないようにしようって思ってたのよね」

今、自分が考えていることと似てる。有香はそう思った。

外部受験組は、自分でがんばらないといけない。

「だから、最初は合唱部にも入るつもりはなかった。でも、先輩たちに拝み倒されて——で、やってみたら、意外と楽しかったの。部活のみんなも面白かったし。気づいたら、すつごく嫌だったこの学校が、そうでもなくなっていたのよね」

「……」

「で、もう一度聞くけど、酒井さんはどうしてこの学校——優華に来たの？」

「あたし、は」

有香は思い切って菜々子に全てを説明することにした。中央高校を志望していたこと。けれど、受験当日に事故にあっってしまったこと。

「本当は、あたし、中央高校に行きたかったんです。そのことが頭から離れなくて。こんなことじゃいけないってわかってるのに、街で中央高校の制服を見る度に考えてしまっ

て。どうして自分は、優華に通っているんだらうって」

「やっぱり、ね」

菜々子が大きく息を吐き出す。

「ひかりも言ってたんだ。酒井さんは、なんだか周りとは雰囲気が違うって。私も、なんだかこの学校に入ったばかりのときの自分を思い出したな。私も、酒井さんと同じ理由で一度は入部を断ったからね」

有香はぎゅっと手を握った。菜々子の瞳を見る。

「先輩。合唱部に入れば、私にも居場所ができますか？」

——できるよ。有香はその答えを期待していた。

けれど。

「それはわからない」

菜々子から返ってきたのは突き放すような答えだった。有香は息を呑む。

「あくまで、それは自分の心が次第だからね。どんな状況だって、受け入れられる人は受け入れられるし、受け入れられない人はいつまでたっても受け入れられない。私ができたからって、酒井さんにも出来るとは断言しないし、できない。でも」

菜々子は、そこで言葉を切った。

「挑戦してみる価値はあるかもしれない」

有香は目を見開く。菜々子はにっと笑った。

「私としては、酒井さんはけっこういい声してると思うし、合唱部に入ってくれるのなら嬉しい。もっとも、居場所以前に合唱が好きっていうことが前提だけだね」

「歌うことは、面白かったです」

それは本当だった。声を出すことは、嫌いじゃない。

「なら、私としては文句はないな。どうする？」

「でも、こんな理由で入部しても大丈夫ですか？」

「別にいいんじゃない？ 今年は、私が入った年みたいに切羽詰まっているわけじゃないし。だったら私みたいにする？ 一年間頑張って続けてみて、駄目だと思ったらやめる。どう？」

「よろしくお願いします」

有香は頭を下げた。

「じゃあ、放課後、音楽室に来てくれる？ 入部届を渡すから」

「酒井さん。どうだった？」

教室に戻ると、ひかりが何処か不安げな顔で、有香の方に寄ってきた。

菜々子とどんな話をしたのか、想像がつかなかったのだろう。

（友枝さんは、喜んでくれるだろうか）

きつと、喜んでくれるはず。有香はなるべくさらっと流すように言う。

「あのね、あたし、合唱部に入ることにした」

「え？」

ひかりは一瞬ぼかんとした顔をする。しかし、すぐに有香の方に身を乗り出してきた。

「それ、本当？」

「うん」

「本当の本当？」

「うん。入部届はまだだけど。でも、今日出すつもり」

「どうして急に？ 断ったんじゃないの？」

「それは——」

言っていないものか迷ったけれど、どうせ菜々子も知っているのだ。

「あたしも、土田先輩みたいに、自分の居場所を探してみようかなって思って。一年間の
お試し期間ってことで、入ってみることにしたんだ。駄目かな」

ううん、とひかりはぶんぶんと首を振る。

「私はとっても嬉しい」

合唱部への入部。

優華に通う自分を受け入れるきっかけになってくれるだろうか。

せつかくの高校生活。少しでも楽しいものになりたい。だから。

「よろしくね。酒井さん」

ひかりが右手を差し出してくる。少し戸惑ったけれど、有香はその手を握った。

「こちらこそ——よろしく」

受け入れられるだろうか。この学校に通う自分を。

できる。漠然とだが、有香はそんな予感がした。



平行線 シンδροーム

水島朱音

Illustration: 正午あきら

澤村葉月

ポジティブでさっぱりとした性格。
日向のことが好き。



塚本日向

飄々として掴みどころがない少年。
地主の分家出身。

第一話 隠れんぼの始まり

春。別れの季節。

穏やかな陽気と、眩しい太陽。遠くから聞こえてくる、祝福に満ちた別れの喧騒。桜が咲くには、まだ少し早い。

そんな日に澤村葉月さわむら はづきたちは、後輩たちに送り出され、教師や保護者に祝福され、市立第一中学校を卒業した。

式の後、最後のホームルームを終えて学校の外へ出ると、後輩たちによって花道が出来ていた。

「澤村先輩！」

その中から、数人の女子が飛び出し、葉月に駆け寄ってくる。葉月が所属していた女子バスケット部の後輩たちだった。皆、それぞれ手に花束やら色紙やらを持っている。

「わー、ありがとう！」

「こちらこそ、ありがとうござい、まし……うつ……」

葉月に色紙を渡した少女は、感極まったのか泣き出してしまふ。葉月はもらい泣きしそ

うになりながら、可愛い後輩を思いきり抱きしめる。

「みんな、元気でね。頑張ってね」

「先輩も、頑張ってください……っ！」

ああ、本当に良い後輩をもったなあ、と感動していると、少し遠くから名前を呼ばれた。そちらに顔を向けると、友人の鶯うぐいすも萌々がぶんぶん手を振っている。

後輩たちに、ちよっど行っていくるねと告げると、彼女の元へ小走りに近づいた。

「感動のお別れのところ申し訳ないんだけどさ。あんた、まだ言っていないでしょ？」

「え？ 何が？」

首を傾げると、萌々は啞然として口をぽっかり開けた。少し間抜けな顔である。

「本気で言ってる？」

「だから何？」

再度問い返すと、萌々がイライラした様子で葉月の耳元に口を近づけるので、少し顔を傾けてやった。小柄な萌々と、女子にしては背の高い葉月では、耳打ちするのにも身長差が邪魔をする。

「塚本つかもとくんのこと」

その名前を聞いた途端、顔から火が出そうになった。

「な……っ、なななんで日向ひなたの話が……っ」

周りに聞かれないよう、声を抑えて萌々に顔を近づける。

「なんでも何もないでしょうよ。今日しかないじゃない」

「そりゃあそうだけど……で、でも一生会えなくなるわけじゃないんだし……」

「あーっ、もうじれつたいなあ！」

急に声を張り上げる萌々。彼女が少し短気であることは、この三年間で既に学んでいた。「なんで自分のことになるとうじうじするかなあ！いつもみたいにビシッといきなさいよ！」

「そっ、そう簡単に言うけどね！」

負けじと声を張り上げる。

それに対して萌々は、やたら演技がかった仕草で肩をすくめてみせた。

「まあ、なんとなくこうなるだろうなって予想はしてたけどね。だからもう、準備は整えておきました」

「……は？準備？」

なんとなく、嫌な予感がする。

そんな葉月の予感を肯定するかのように、萌々はにんまりと笑った。

「塚本くん、もう呼び出しといたから」

何を言っているんだろう。この子は。

一瞬、本気でそう思った後、声にならない声を上げた。視線が一斉に集まったが、それどころではない。

「なっ、なに、呼び？は？何言ってるの？何してるの？」

「自転車小屋からテニスコートの方に回る道あるでしょ？あの辺りで待ってもらってるから」

「いやいやいやいや」

ちょっと待って、と頭に手を当てる。混乱で頭痛が起こりそうだ。

しかし萌々は、そんな葉月にびしっと人差し指を突きつけた。

「この二年分の想いを、今伝えなくていつ伝えるの！」

強引だ。強引すぎる。

そう思うのだが、今の萌々は有無を言わせぬ迫力をまもっている。

「ほらほら、塚本くん待たせちゃ悪いでしょー」

手を引かれ、無理矢理にでも連れて行かれそうになったので、そこで慌てて萌々を止めた。

「待って！ わかった、わかったから！ あたし一人で行くから！」

その言葉を聞き、ようやく萌々の顔がパツと笑顔になる。

「ようやく決心ついた？」

「……つくしかないでしょ……この状況じゃ……」

ハア、と重いため息をつく葉月とは対照的に、萌々は満足そうに笑っている。

「よしよし、行つといいで！」

ぽんぽん、と気合を入れるように背中を叩かれる。本当にもう、腹をくくるしかないよ
うだ。

それに萌々の言う通り、いつまでも彼を待たせておくわけにはいかない。

「戻ってきたら、覚えてなさいよ！」

「へいへーい」

ひらひらとにこやかに手を振る萌々を恨めしく思いながら、先ほど彼女が言っていた場

所へと、足を進めた。

彼と初めて話をしたのは、一年の終わり頃である。その日は、春先だというのにひどく冷え込み、昼ごろからは雨が降り出していた。

部活が終わり、体育館の掃除当番だったので他の部員たちより一足遅く学校を出ることになった葉月は、昇降口で途方に暮れていた。

(けっこう降ってるなあ……)

朝から空は曇っていたが、寝坊して遅刻しそうだったこともあり、天気予報も確認せず傘も持たずに家を飛び出してきてしまった。

走って帰るには少しキツイ降水量である。

しかし、待つにしてもなかなか雨は止みそうにない。

(お母さんがもう帰ってたら、迎えに来てもらうかなあ……)

父親は帰宅時間が夜中になるが、母親は夕方頃に仕事を終えて帰ってくる。もしかしたら、もう家にいるかもしれない。

そんなことを考えていたら、背後に人の気配を感じた。

振り返ると、一人の男子生徒が靴を履き替えているところだった。同じ学年の子だ。クラスが違うので話したこともないが、顔は知っている。

(塚本くんだ)

塚本家とは、この辺り一帯の地主である。有力な旧家で、本家をはじめとして、分家が市内のあちこちに散らばっている一族だ。

彼、塚本日向はその分家の子らしい。分家とはいえど、葉月と同じ学年では日向が唯一の塚本家の人間なので、ひっそりと知名度があったりする。

視線に気付いたのか、靴を履き終えた日向が顔を上げた。ぼつちり目が合う。

葉月が彼を見ていたのは明らかで、今更顔を背けることもできなかつた。

(どうしよう……!)

何か話しかけないと不自然だ。しかし、咄嗟に言葉が出てこない。

そんな葉月を見て、日向は何度か瞬きした後、小さく首を傾けた。

「……誰か待ってるの?」

「えっ」

まさか向こうから話しかけてくるとは思わず、しかし会話の糸口を作ってくれたことに心の中で感謝した。

「ううん、そうじゃないんだけど……傘、忘れちゃって」

降り続ける雨にちらりと視線をやって、あははと苦笑する。

すると日向は鞆の中をゴソゴソと漁って、黒い折りたたみ傘を取り出した。

「はっ」

「……ええ?」

そして、それを葉月の方へと差し出してきたのだった。

「あげる」

にっこりと笑い、声変わりしたてといった感じの幼さの残る声で、彼はそう言った。

予備の傘を持っていたから、ということだろうか。それにしても、『貸してあげる』ではなく『あげる』とは。

「あ……っ、ありがとう……。……明日、返すから」

とても助かるが、流石に貰うわけにはいかないとそう返事すると、日向は「うん」と頷いた。

これで帰れる、と貸してもらった折りたたみ傘を開こうとすると、日向は何故か身を翻し、昇降口の段差になっているところに腰掛けてしまった。

「……帰らないの？」

「止むの待とうと思ってる」

「え……。っ、傘は？」

怪訝に思ってた尋ねると、日向は葉月が手にしている折りたたみ傘を指さした。

「……って、一本しか持っていないの？」

「ん？ うん、だって一人に二本もいらないでしょ？ 一本しか持ってきてないよ」

さも当然のように答えた彼だが、それなら葉月が傘を借りるのはどう考えてもおかしいだろう。

「か……。っ、返すよ！ いい！」

「……なんで？」

しょんぼり、という言葉がいかにも似合う、そんな表情を浮かべられ、葉月はたじろいだ。

「な、なんでって……だって、おかしいでしょ。塚本くんの傘なんだよ？ これ」

「うん、だからあげるって。そしたら、澤村さんのものになる」

名前、知ってたんだ。

と意外に思いつつ、いや今の議題はそれではないと首を振る。

「そんな……貰うわけにいかないし」

「んー……でも、風邪ひいたら駄目だし」

「それは塚本くんだって一緒でしょ？」

春とはいえ、今日は寒い。

こんなところで、いつ上がるともわからない雨をいつまでも待っていたら、本当に風邪を引いてしまう。

「まあ、そうなんだけどね。でもいいんだよ、僕は」

「よ……っ、よくないっ！」

葉月はずかずかと日向に歩み寄り、手にしていた折りたたみ傘を突き返した。

「返す！」

有無を言わせない調子で座り込む彼を見下ろすと、困ったような表情を浮かべられた。

（そんな、こっちだって、困る）

傘が一本しかないのなら、どう考えても本来の持ち主である日向が使うべきだろう。

「あたしは、家に電話したら、傘持ってきてもらえるかもしれないし！ 大丈夫！」

そう言うと、日向は何かに気がついたように目を丸くした。

「家に電話……あー、その手があったなあ……」

「そ、そう！ その手があるの！ だから大丈夫！」

「うん、わかった」

わかった、といって彼はようやく折りたたみ傘を受け取った。ほっとして、葉月は上履きに履き替えるために自分の靴箱に向かう。

すると、後ろから声がかかった。

「何してるの？」

「何って、職員室で電話借りるから」

「ケータイは？」

「え？ 持っていないよ」

中学一年生の葉月は、まだ携帯電話を持たせてもらえない。周りにはすでに持っている子もごくわずかにいるけれど、葉月の家では「まだ必要ない」ということで、高校受験が終わってから持たせてもらえることになっている。葉月の姉もそうだった。

日向は横に置いた鞆をまたゴソゴソと探り、中から小さな長方形の機械を取り出した。

「使いなよ」

そうやって差し出されたものは、携帯電話だった。

「ケータイ、持ってるんだ」

「うん、持たされてるから」

さすがは塚本だなあ、と内心で思いながら、ありがたく借りることにした。とは言っても、家でも両親や姉の携帯電話に触ることはあまりないので、使い方が合っているのかどうか不安になる。

携帯電話を受け取り、日向の隣に腰掛けた。

「これ、どうやって使うの？」

「電話番号を押して……それで、その左側の受話器のボタン押すんだよ」

日向が教えてくれた通りにボタンを押し、急いで携帯電話を耳にあてる。数回のコールの後、受話器越しによく知った声が届いた。

葉月の思った通り、母親はすでに仕事から帰っていた。傘を持ってきてほしいと伝えると、すぐに行くと言事があった。

携帯電話を日向に返すと、彼は先ほどのボタンとは反対の位置にある受話器のボタンを押した。そこで通話を終了するのだろう。

「ありがとう。助かった」

「ううん。家から学校までどれくらいかかるの？」

「んー……歩いて二十分くらいかなあ……？」

「そうなんだ」

言いながら、日向は携帯電話を鞆に放り込んだ。しかしそのまま立ち上がる気配がないので、遠慮しているのかな、と葉月は思った。

「あの……先に帰ってくれて大丈夫だよ？　うちの迎えもすぐ来るし」

しかし日向は足を投げ出して座ったまま、ガラス戸の外に目を向けて、緩やかに微笑んだ。

「いいよ。一緒にいる」

その、男の子にしては可愛らしい成長途中の横顔と、「一緒にいる」というたったひと言。

思い返せば、その時に葉月の恋は始まったのだろう。

なんとなくそわそわして落ち着かない気持ちになりながら、葉月は日向の隣に腰掛けたまま、迎えを待った。

それから、葉月の母親が到着するまでの約二十分間。

今日別れて、それきりになるのが嫌だなあと思った葉月は、できるだけ彼との繋がりを保つために、何か話題を探していた。

「その……呼び方」

「うん？」

「葉月、でいいよ。名字って、なんかよそよそしいし」

直接的に「友だちになりたい」とは言えなかった葉月の、精一杯のアピールだった。

早鐘を打つ心臓を抑えながらそう言うと、日向は嬉しそうに笑ったのだった。

「わかった。葉月って、キラキラしててきれいな名前だよね」

何の恥ずかしげもなく笑顔でそう言われ、葉月の方が照れてしまった。頬が熱くなるのを感じ、顔を逸らして靴の先を見る。

「ひ、日向だって……すごく、良い名前だと……思うよ」

上手い表現が見つからず、そんな風にしか言えなかった。

それでも日向は、くすぐったそうにはにかんでくれたのだった。

葉月が見つけたとき、彼はコンクリートの上に直に座り、ぼんやりと空を見上げていた。傍らには、貰ったばかりの卒業証書と卒業アルバムが置かれている。

一度足を止め、すうと息を吸う。

(……よし)

覚悟を、決めるしかない。

「……日向！」

名前を呼ぶと、彼は視線を葉月に向け、にっこりと笑った。いつも通りの笑顔だ、と心の中で密かに安堵する。

駆け寄り、日向の目の前に立つ。彼は座ったままなので、葉月が見下ろす形になった。

「ごめんね、なんか」

「ううん」

萌々が、なんとやって日向を呼び出したのか、わからない。そのため、話をどう切り出したらいいいのかわからなかった。

どうしよう、とつま先で地面をいじっていると、日向がコンクリートを手のひらでぽんぽんと叩いた。

隣に座れ、という意味だろう。

確かに、ずっと日向を見下ろしているというのも居心地が悪い。校舎の壁を背にして座る彼の隣に、そっと腰を下ろした。

「……いつから、待ってたの？」

「んー……いつからだっけ。そんなに待ってないよ」

ぼんやりと、どこか眠そうな調子で日向は答えた。周りが静かなせいもあって、今日が卒業式というのが嘘に思える。

緩やかに時間が過ぎる。日向と過ごす時間は、いつもこうだ。彼は本当にマイペースで、のんびりとしていて。会話が途切れ、長い沈黙が続くこともよくあった。けれど、それは決して不快な沈黙ではなく、不思議と心地良いのだ。

だから葉月は、彼と一緒にいる時間が好きだった。

先ほどまで覚悟を決めなければと気負っていたが、その強張った気持ちもいつの間にかするすると解け、葉月の口は自然と開かれていた。

「一年の、終わり頃にさあ」

「うん」

「傘、貸してくれたの覚えてる？」

正確には「貸そうとしてくれた」。もつと正確に言うなら、「くれようとしていた」だけだ。

「うん、覚えてるよ。あれが葉月と初めて喋った日だったし」

「そうそう。なかなか少女漫画チックだよねー」

茶化すように言うと、日向は小さく笑った。

葉月と日向は、この三年間一度も同じクラスにならなかったことがない。あの日、葉月が傘を忘れなければ、そこに日向がいなければ。話すこともないまま、卒業の日を迎えていたかもしれない。

そうして、そのまま二度と会うことはなかったのかも。

そこまで考えたところで、あることに気がついた。

「……そういえば」

「ん？」

「日向、どこに進学するの？」

今の今まで、ちゃんと聞いていなかったことを思い出す。いや、聞いたことならあるのだ。何度も。

けれどその度に日向は、「どこだろうね？」だとか「どっかその辺」だとか、答えになっていない答えを返してきては、はぐらかしていた。

いい加減、教えてくれてもいいのではないか。

しかし彼は答えずに、葉月からふいつと顔を逸らした。

「え、ちよつと。教えてくれないの？」

「うん」

うん、つて。

「なんで？ 言いたくない？」

「んー……ていうか……」

そこで日向は一旦言葉を切り、口を閉ざした。葉月は続きをじっと待っていたが、彼は話の方向を微妙に転換してきた。

「葉月は、中高行くんだっけ」

「え、うん。そう」

「そっかあ……」

日向の言った『中高』とは市立中央高校のことだが、彼の口振りからすると、日向は中央高校ではないらしい。まあ、同じ高校に進学するのであればもっと早くに教えてくれていたのだろうけれど。

違う学校に行くということとは、離れ離れになるということ。

今になって急に、その実感が襲ってきた。

(そうだ。今日が最後なんだ)

今日が終わってしまったえば、日向とはもう、今までのように毎日会うことは出来なくなる。かなり強引にはあるが、萌々が日向と二人きりになれる場所を作ってくれたのは、この最後の日に、伝えなければならぬことがあるからだ。

「……あの、さあ！」

意気込んだせいで、声が大きくなってしまふ。きよんとしてこちらを向いた日向に、頬が熱くなるのを感じた。

「言いたいことが、あつて、ね」

「何？ 前に葉月が残しておいたお弁当の卵焼き横取りしたこと、まだ怒ってるの？」

「ちが……っ！ てか、そこまで心狭くないわよ！」

折角の決心がくだらない会話によって緩みかけたが、もうこのまま一気に言ってしまうことにする。

「そうじゃなくて、その、好きなんだよね！」

スカートの端を握りしめた手は、馬鹿みたいに震えていた。

日向は、叫ぶように放たれた告白に、ぽかんとしている。

「だから、あたし、日向のことがね、ずっと前から……」

それ以上は言葉にすることが出来ず、葉月は俯いてしまった。

言ってしまった。恥ずかしい。消えてしまいたい。泣きそうだ。日向の顔を見ることが出来ない。

沈黙が怖くて、とにかく彼が何か言ってくれるのを待った。

随分長い間、そうして互いに黙っていたような気がする。本当は、そんなに経ってないのかもしれないけれど。

「……うん」

やがて、彼は一つ頷いた。

しかし、それ以上の返答が紡がれる様子はない。

(え？ それだけ?)

あまりにも反応が薄すぎやしないか。もしかしてとは思いますが、恋愛としての『好き』ではなく、友だちとしての『好き』という意味でとられたのではないか。いくら日向でもそこまで鈍くないと思うのだが。

恐る恐る顔を上げると、彼は何か考え込むように、じっと地面を睨みつけていた。

「……日向?」

「うん、ごめんね。ちょっと待って」

なんだろう。予想していたどの反応とも違う。照れている、というわけでもなさそうだった。

「……よし」

やがて、一人で何かに納得したようにそう頷き、

「葉月」

日向は、視線を真っ直ぐに合わせてきた。

「な……何？」

ドキリ、と胸が鳴る。

「賭けをしよう」

「……は？」

日向がどこか掴みどころのない少年であることは重々承知していたが、彼のこの発言はとりわけ意味不明なものだった。

「賭け……って……？ 麻雀とか、競馬とか……？」

「違う違う。そういうのじゃなくて」

そう言つて日向は、人差し指を葉月の目の前に掲げた。

「一年」

そして、にっこりと笑った。

「一年以内に、僕を見つけてよ」

日向が何を言っているのか全く理解できず、葉月は目の前の指をまじまじと眺めた。それから彼の顔に視線を移動させ、無言で説明を求めた。

すると日向は指を引っ込め、卒業証書とアルバムを手にして腰を上げた。

「期限内に葉月が僕を見つけれたら、その時に僕の気持ちを教えようと思う」

「え……？ ちよつと……」

「だからね、どこの学校に行くかは秘密。すぐに見つけられちゃうから。あ、引越す予定とかはないよ。この市内にいるつもり」

日向はそのまま歩き出した。葉月は立ち上がり、慌てて日向の後を追った。

「待って、何、どういうこと？ 見つけるって？」

「そのまんまの意味だよ」

日向はそれ以上の説明を拒むかのように、すたすたと歩いて行ってしまった。そのまま彼が、どこか知らない場所へ消えていってしまうような。そんな恐怖に襲われ、葉月は思わず日向の手をとり、引き止めていた。

「おっと」

小さく体をぐらつかせて足を止めた日向は、ゆっくりと振り返る。

その、どこかぼんやりとしたような穏やかな表情は、あまりにもいつもと同じなのに。

葉月の胸は、不安にかき乱される。

(何を、するつもりなんだろう)

視線で問いかけても、日向は何も答えない。

ただ、寂しげに笑い、それから葉月の手を強く握り返す。

「……ごめんね」

最後に小さく呟かれたその言葉の意味が掴めないまま、二人の手は離された。

それが、日向との別れだった。

正直なところなめていた。市内にいるのなら、すぐに見つかると。あれは、彼のちよつとした遊び心なのだ。最初はそう思っていた。

けれど、甘かった。彼は、塚本日向は、本当にその日を境に、パツタリと行方をくらませってしまったのだ。

一年間に渡る、長い長い隠れんぼの幕開けだった。

NONSTOP



あたりまえの こと。

水面浮月

Illustration: 新月竜



佐久間裕孝

市立中央高校一年。
名の知れた不良だが
……？



高遠惣一

昇星学院高校一年。都
落ちを嘆く東京出身オ
タ。



神崎綾香

優華女学院高校一年。
ほんわかメガネ少女。

+

塚本郡司

惣一が遭遇する謎の
「おっさん」。

あたりまえのこと。

第一話 友達がいれば楽しい

ここに集まった四人の若者（一名まったく若くない）。

見た目はバラバラ、考え方もバラバラ。

ただひとつ、共通点がありました。

それは、

「「四つも民放があるのに

アニメをやらないテレビ局なんて滅んでしまえー!!」

四人は立派なおタクだったのです。

※※※

それは四月のとある日曜日、どんよりと空が曇った日。N市北部に広がる海岸線に行く

つかある、シーズン外れの海水浴場でのこと。

ザッパーン、と。春の海を渡る波は砂浜に寄せ、また返す。

それを砂浜から一段高い道路の上より陰鬱な目で見やるメガネをかけた少年のことなど、意にも解さず。波の運動は機械的に繰り返される。

「……失敗した」

少年のつぶやきは誰にも聞かれず、海風に飛ばされては消えていく。足元には学校指定のバッグがひとつ。

「こんな暗い色の海を見ても、気分転換にもなんにもなりやしない。寮の部屋に閉じこもってマンガの続きでも読んでりゃよかった」

愚痴愚痴と言葉をこぼしていくうちに、気分はさらに暗くなっていく。

彼——私立昇星高校一年生の高遠惣一たかとうそういちがここまでどん底にはまっているのには、立派な理由がある。少なくとも本人はそう信じていた。

はつきり言えば、惣一はこのN市が好きになれなかったのだ。非はN市のほうにはあんまりない。かなりの部分で八つ当たりだ。

一ヶ月ほど前まで、惣一は東京に住んでいた。それは自他共に認めるオタクの彼にとつて、今から考えれば夢のような生活だった。

家のテレビでは毎日何がしかのアニメをやっているし、深夜帯にもなればまったくアニメが放映されていない時間のほうが少なかった。テレビ東京、テレビ埼玉、TVKはアニメの宝石箱だった。

休日にとちよつと足を伸ばせば池袋なり新宿なり——秋葉原アキハバラなりのオタク系アニメ・ゲー

あたりまえのこと。

ムシヨップに行ける、というのも大きかった。アキバは夢想していたような黄金境エルドランドではなかったが、それでも「あの秋葉原にいるんだ」という感慨は、中学生の惣一と当時のオタク仲間たちの胸をいっぱいにするのに十分だった。

その仲間たちは今も東京にいてオタク生活を満喫している。惣一ひとりだけが遠く離れたN市にて新生活を始めることになった。地方の男子校ながら名門の進学校である昇星の寮に入れ——それが親の命令だったからだ。惣一に否定する権利はなかった。残念ながら受験も問題なく通ってしまった。惣一の成績はそこそこよかった。

仲間たちは惣一に多大な同情を寄せてくれ、いろいろと慰めてもくれた。それがまた惣一を苦しめる。

「N市じゃ四局も民放が見られるんだろ？ 東京とそこまで変わらないぜ」

——でも、アニメはほとんどやってない。局の方針だつてさ。

「今はインターネットでもアニメやってるじゃん」

——ヤバい動画サイトでも行かない限り、本数あまり多くないだろ。

「駅前に新しくできたばかりのショッピングモールがあるつて言つてたろ？」

——品揃えがイマイチの中型書店しかなかった。

「探せば寮の中に同じようなオタクがいるんじゃない？」

——さすが進学校、なんだか空気が重くてそれどころじゃない。

「お前もともとゲーオタだろ。黙々とやりこみやつてれば？」

——ひとりやってるだけだと、やっぱ飽きるんだよ。

電話なりメールなりで彼らと話せば気分も少しは軽くなる。しかし、彼らもまた高校一年生になったばかりでやることも多く、始まったばかりのアニメの話は合わない。積極的なタイプではない惣一としては彼らに迷惑をかけるのがいやで、メールを打つ指も鈍る。結局は嫌われたくないだけなのだ。今彼らとの縁が切れたら、息ができなくなってしまうから。

わかっていてもどうにもならず、ため息だけが地面に落ちる。

惣一の耳に、日本人の多くが耳になじんでいる、「大きなものでも小さなものでも動かして」しまいそうな兄弟の歌が聞こえてきたのは、ちょうどそんなときだった。

ただし、歌詞はまったく違ったが。

ぼくの学校はシヨ―セイ

キミの学校もシヨ―セイ

恥ずかしながらシヨ―セイだ

落ちぶれ名門シヨ―セイだ

農家の小倅みなシヨ―セイ

教師の小倅みなシヨ―セイ

シヨ―セイごときに山から出てきて

シヨ―セイ程度で大いばり

大きなプライド小さな脳ミソ

あたりまえのこと。

嫌になっちゃうケドショーセイだ

正直なところ、最初の感想は「なんだそりゃ」だった。

「ショーセイ」が「昇星」なら、それは彼自身が通っている私立昇星高校のことだろう。けれど、惣一の知っている昇星と、軽いテンポの歌に乗った「ショーセイ」はまったく重ならない。

「そりゃ、プライドはみんな高そうだけど……」

落ちぶれてもいないし、脳ミソも「小さな」ではないだろう。入試のパンフレットには受験実績として有名大学の名前がズラリと並んでいた。

——あるいは、誹謗中傷の類だろうか？

この推測は結構正しそうな気がする。同じN市内には地元の子どもが多く通う共学の市立中央高校があり、両者の仲はすこぶる悪い。昇星には名門のプライドがあり、市立中央には地元の誇りがあるからだ。

ただ、それにしても変なのが、

「——どう見たってただのおっさんだよね、あれ」

歌の聞こえたほうへ振り向いた惣一の目に映ったのが、四十絡みのおっさんだったことだ。市立中央の生徒には見えない。歩きながら気分よさげにヤン〇〇の替え歌を歌っているのがバツチリみえたので、たぶん夢じゃない。

ひげ面に作業衣、サンダル。微妙に腹の出た体型。見た目から受ける印象は「峠の陶芸家」といったところだろうか。いくら今日が日曜とはいえ、まともなサラリーマンにも、ある

いは農家にも見えない。

本当なら、このままスルーしたほうがいいのだろう。無視してさっさと寮に戻って、「今日変なおっさんがいたよ」くらいの話の種にしたほうが間違いなく賢い。

にもかかわらず、

「——おじさん、昇星になんか恨みでもあんの？　へんな替え歌がなつてさ」「ん？」

呼びかけてしまったのは、そのおっさんがあまりにも怪しすぎたせいか、あるいは気分がむしやくしゃしていたせいか。惣一自身にもよくわからない。

いきなり話しかけられたおっさんのほうも驚いたか、しばらく眼をしばたかせて、惣一にぶしつけな視線を投げてから、

「別にそんなつもりもないぞ？　俺は一応あそこの出で」惣一の足元の鞆をちらりと見て「お前さんの先輩に当たるしな」

「……そうは見えないけど」

ジト目で見てやるが、堪えた様子はない。

「ああ、よく言われるなあ。実際にドロップアウトしたようなもんだし」

「脱サラでラーメン屋でもやってるとか？」

「わりと近いな」

おっさんに人懐っこく笑われても困るが、なんだか面白いおっさんだな、とも思う。しかし、惣一としては疑問を解決したい。

「で、さっきのは何？」

あたりまえのこと。

「だから、俺が輝かしきショーセイに通つてたころのはやり歌だよ。あのころ、恥を知る学生たちはこつそり歌つては唾を吐き捨てたもんだ」

おっさんは相変わらず簡単に言うが、惣一にはやっぱり信じられないし、聞いたこともない。

そう正直に言うのと、おっさんはいよいよ笑い飛ばす。

「そりやそうだ、名門・昇星の黒歴史だからな。教師連中は口を閉ざすし、学生たちも言い伝えたりしない。地元としたって昇星の存在はデカいから、あそこが落ちばれてたなんてことは都合が悪い。覚えてるのはあのころ現役だった俺たちくらいさ」

——まあ、忘れてなんてやらんがな。

おっさんがもう一度浮かべた笑いほちよつと物騒で、惣一は思わず身を引いてしまった。

とにかくおっさん曰く、三十年前から二十年前にかけての昇星は名門とは名ばかりの状態だったという。「調子に乗つて人を集めすぎたのさ、そりや質も下がる」とはおっさんの弁。

とはいえ、優秀な生徒もそこそこいて、それなりの結果は残していたらしい（おっさん自身がいい方だったか駄目な方だったかは絶対にしゃべろうとしなかった。怪しい）。

「その辺を足がかりに学校が頑張つて、名門・昇星の再興に至つたわけだ。美談だろ？ 世が世ならプロジェクトXが来るぜ」

今度の笑いはかなり不真面目だ。

「それはどーなんだろう……」

惣一としては苦笑するしかない。実際、このおっさんの言うことが本当かどうかもわからないのだから。

その気持ち伝わったのだろうか、

「ま、東京から来たばかりの一年坊主が知ってるはずのないことさ、気にすんな」

意表をつかれ、咳き込んでしまう。惣一は彼に名前も立場も何も話してはいないはずなのに。

「見りゃわかるさ、土地勘があつたらこんな時期に一人ぼっちの昇星がポツンとしてるもんか。バスでここまで来るのも苦労したろ、都会の感覚じゃ」

「——ほっといてよ」

まったく凶星だったので、惣一の返しもふてくされたようなものになる。実際、交通機関が全然ないわ、あつてもなかなか来ないわで、かなり苦労したのだ。遠出をしたければ、早いうちに自転車を手配する必要があるだろうだった。

「もちろん、今の昇星は全国いろいろなところから生徒集めてるからな。都会といつても確定はできん。だから、出身地は勘だな。当たったようだが」

ニタリと笑うおっさん。ものすごく偉そうだ。

「おじさん、探偵かなんか？」

まるで小説かアニメのような鮮やかな推理に思わずそんな言葉が口をついたが、実際のところ探偵にはとても見えない。

「ま、それも近いところだが」顎鬚をこすり、「基本的には、ただのおっさんさ。坊主が今にも死にそうな青い顔をしてなけりゃ、こんな風にわざわざ立ち話をしたりもしなかった

あたりまえのこと。

ろうな」

「……そんなこと、ないよ」

否定しながらも、もう一度、惣一は胸を突かれる。

身に覚えは山ほどあるけど、そんなにも暗い顔をしていただろうか。

「ふふん、おっさんの人生経験を甘く見たもんじゃないぜ。今にも崖の上から転落しそうな顔をしてやがった。いっとくがな、この辺は自殺の名所でもなければ二時間ドラマの撮影場所でもないぜ」

ドヤ顔になったおっさんは、なるほど二時間ドラマの主演俳優が似合うかもしれない。いよいよ職業不明になってきた。

「だから、そんなことないって。言いたいことがそれだけなら、僕は帰る」

惣一はバッグをつかみ、バス停のほうに歩き出す。おっさんの言うことに興味はあつたけれど、これ以上話をすると何か不快なことをいわれそうな気がした。

けれど、無神経なおっさんはそんな惣一の背中に声を投げかける。

「なあ坊主、世の中つてのはいろいろあつて、知ってみるとなかなか面白いもんだぞ。昇星に黒歴史があつたみたいにな、この街にだつて面白いことはあるかも知れんぞー」

「——そんなの、あたりまえじゃないか」

腹立ちまみれのつぶやきは、海風に飛ばされた。

※※※

それから一週間がたって。また日曜日がやってきた。

その後、それとなく教師に聞いてみたり、図書室にある資料を漁ってみたりした。なんとなく気になったからだが、興味が出たらほうほうではおけないのはオタク気質の表れかもしれない。

教師は言葉を濁したが、資料のほうは正直だった。明らかに一時期、生徒数が膨れ上がった時期があり、しかし難関大学への合格者数は減っていた。

だからといってなんだってわけではない。今の昇星はわざわざ遠くから生徒が来るような（惣一自身のように！）名門の進学校だ。暗黒時代が実在したとしても、それは遠い過去の話にすぎない。

——ただ、そういうこともあるんだ、というのをちよつと面白く感じたのは事実だった。もちろん、それで惣一の鬱屈感が晴れたわけではない。

学校の授業は普通に受けているし、同級生や先輩との付き合いともそこそこうまくやっている。学業優先の昇星にはクラブ活動の義務もないから、帰宅部を決め込んでも問題はない（この辺、惣一は「コミュ力のあるオタク」だった）。

寮は一人部屋だったのでプライバシー云々で悩むことは少ないし、実家から持ち込んだマンガやらゲームやらアニメDVDやらを楽しむこともできる。

総じて環境は恵まれているが——鬱々とした気分がぬぐわれることはない。

今日の惣一は、気分転換に駅前に出ていた。N市の駅は結構発展していて、真新しいショッピングモールなんかもある。寮暮らしの退屈に耐えられない昇星の生徒たちも、放

あたりまえのこと。

課後や休日になるとちよくちよく出てくるようだ。

それでも、さすがににぎやかさは東京の繁華街とは比べるべくもない。商店街を歩けばシャッターの閉まった店舗もちらほらある。

もつとも目障りなのが、ちらほらと目に入ってくる垂れ幕やチラシ、ビラの類——N市に高速道路が必要か否か、という論争の余波だ。

「一日も早く高速道路をN市に」

「市民生活を破壊する高速道路絶対反対」

相反する主張が仲良く並んでいたり、一方のビラの上にもう一方のビラが重ね張りされていたり。当事者たちにとっては深刻な問題なのだろうが、この街に愛着も何もない惣一（および、その多くが同じような境遇をもつ昇星の生徒たち）にとっては、ただの雑音に過ぎない。

「——工事が本格的に近づいてきたら、もつとうるさくなるのかな」

口に出してしまったその予想はほぼ外れないだろう。いよいよ気が重くなる。

ため息をアスファルトの地面に落として、携帯電話を取り出すと十二時。そういえば、腹も減ってきた。

食欲もあんまりないし、適当なところでいいや、と惣一が周囲に目をやれば、東京でも見慣れたMのマークが輝いている。

「ま、いいか」

うなずきをひとつ。

今日の空腹はハンバーガーとポテトで鎮めよう。

……また、失敗した。

惣一が表情はなるべく変えないまま、心の中でため息をついたのは、店の中に入って五分もたたないうちだった。

惣一の座った席のすぐ横に、「いかにも」な不良少年が腰を下ろしたのだ。

身長はたぶん惣一と同じくらいだが、目つきが悪い。体から発しているオーラのようなものが、「俺に近づくな」と言っているような気がする。彼が席についてから、明らかに店の一箇所を避けて通る人が増えているし、元から座っていた人々もそわそわしだした。

何をするかといえば、ハンバーガーを食べつつ大学ノートを広げて一心不乱になにやら書き付けているのだから、そりゃあ人々が怖がるのも無理はない。喧嘩相手のリストでも作っているのだろうか。

——あ、ひとり逃げた。

まあ仕方がない、と惣一は文庫本片手にハンバーガーにかじりつき始める。

今日の昼食の友は、三昔くらい前のファンタジー小説で、惣一のお気に入りだった。

ライトノベルの黎明期に、濃厚なファンタジー描写と徹底的な主人公イジメで好評を博した作家の、「裏」の代表作。延々と悪くなり続ける状況、悲劇的過ぎる背景、そして真っ暗だがほのかな希望だけは感じさせる結末——典型的な「好きな人は熱狂的に好き、ただ

あたりまえのこと。

し多くの人が嫌い」というやつだ。

もちろん、惣一は「好き」なほうだ。中学時代に古本屋で見つけ、熱狂的にはまった。かなり苦勞してシリーズをそろえ、同じ作者のほかの作品も苦勞して集めた。ずいぶん昔の作家なのでまだ集め切れていないが、それも楽しみの一つだと思っている。

東京からN市にやってくるにあたっては、かなり荷物の制限をされ、本のすべてを持ってくることはできなかった。けれど、このシリーズはそのリストの最上位に入っていた。そのくらい好きだ。

最近の萌え重視のライトノベルにはない、ゾクゾクするような悲劇の味がたまらない——といったら、中学時代の仲間からは「中二病乙」と返事が返ってきた。あのころは本当に中学二年だぞ、悪いか。

「……ん？」

なんだろう、視線を感じる。

惣一が顔を上げてみれば、例の不良がこつちを見ている。かなり見ている。これはいわゆる「ガン付け」ってやつじゃないのか？ そのくらい見ている。はっきり言って、怖い。けれど、まもなく気づいた。彼が見ているのは、惣一本人じゃない。その手元の本のほうだ。

もう古い本だし、もともと知名度も高くない。この不良が知っているとは思えないのだけど、と。惣一が困惑しているうちに不良は目を落とし、再び食事と何かの書き物に戻り、まもなく食べ終えて店を出て行った。

「——なんだったんだろう、アレ」

つぶやいても、誰も答えてはくれない。たぶん、店にいる全員が同じことを思っていたのではないだろうか。

と、よく見ると不良のいた席に、例のノートが残されている。どうも、忘れていったらしい。

賢明に行動するならば、無視するか、あるいは中を見ないままで店員に預けるべきなのだろう。しかし、一週間前と同じように、惣一の好奇心の虫が騒いでしまった。不良の振る舞いがちよつとおかしすぎた、というのもある。

そつと隣の席に近づき、おもむろに大学ノートを手にとつて。シャープペンでびっしりと何事かを書き連ねたページをペラペラとめくり――

「あー……こう来たか」

内容をざつと理解した惣一はノートをテーブルに落とし、頭痛をこらえかねたかのように手で頭を押さえる。

いや、本当に頭が痛い気さえする。なるほど、いろいろと謎は解けたけど。……これ、見ちゃったのは本当にまづいんじゃないだろうか。

「えーとすいません店員さん、」

さつさと店員に預けてしまおう、ともう一度大学ノートを手に取った惣一がカウンターに向けて一步を踏み出したのと。

猛烈なスピードで走ってきたさつきの不良が、店の自動ドアが開くのももどかしく店内に走りこんできたのは、ほぼ同時。

不良のただでさえ悪い目つきがいつそう厳しくなつて――ノートを手にした惣一を捉え

あたりまえのこと。

る。迷わずかずかと歩み寄り、肩をつかんで、

「お前、ちよつとついて来い」

こう命令されたら、惣一に断る権利などあるはずもない。

——ああ、やつちやつたなあ、と。

そんなことを慨嘆している間に引つ張られて店の外へ、さらにどこかへ引つ張られる。ドナドナドーナドーナなどとボケをかます時間も余裕もありはしない。

——ドン、と。

裏路地の壁を背にして追い詰められた惣一の顔のすぐ横に、不良の手が突かれる。もちろん、不良の顔は惣一の（文字通り！）目前だ。ノートは惣一が律儀につかんだまま。

ここに至るまでに、惣一はこの不良についての情報をいくつか入手していた。というか、どうもこの不良はそこそこ有名人らしく、引きずられていく惣一の耳にもいくつか噂話が飛び込んできたのだ。

曰く、

・「二チュー（第二中学校？）の佐久間」あるいは「チューオー（市立中央高校？）の佐久間」という、らしい。

・なんだかそれ以外にもあだ名はあるようだが、よく聞こえなかった。

・殴り合つて負けたことがない、らしい。

・何をやったか知らないが、引つ張られてるやつはただじゃすまない、らしい。

「引つ張られてるやつ」自身としては、特に最後のやつを勘弁してほしい。

もちろん、そんなこと口に出せるはずもない。蛇に睨まれた蛙としては、ただただ無事に済むことを祈るばかり。なるべく冷静で異様とは思えないのだけれど、手は勝手に小刻みに震えるし、膝も笑いかけている気がする。「親父にだつて殴られたことないのに」なんていう気はないけど、殴り合いの経験なつてほとんどない。

はつきり言つて、怖い。泣きたい気分。

「——お前、中身見たか」

「えーと……」

「とぼけんな、そのノートの中身だよ」

変に怒鳴られるより、抑制された静かな声音が恐ろしい。特に、あの中身を見てしまった惣一としては、身に覚えがありすぎて倍率ドン（古い）だ。

それでも、知らぬ存ぜぬは無意味すぎる。

「まあ、見たけど」

正直に答えたけど、一発は殴られるだろうなあ。

「どう思った」

へ？ と、惣一の口から間拔けな声がこぼれた。展開が予測と違う。

「どう思ったかって聞いてるんだよ」

「……どういう意味で？」

不良のこめかみに青筋がピクピクしている。——やっぱ命がやばい？

「ボケてんじゃないぞ、あんなマニアックなモノ読んでる奴が中見て何の感想もないわけないだろ」

あたりまえのこと。

凶星にズバリ。でも、

「——むしろ、君がアレを知っているほうが不思議というか、」

「んなことだあ、どうでもいいんだ。聞かれたことに答えろ」

……困ったなあ。またしても、賢明でない対応を選びたくなってしまった。

まあいいや、と腹を決める。駄目だった場合は半殺しだろうけど。オタクの端くれとして、批評を求められたら全力で応えたい。

じゃあ、言うけど——と、ひとつ咳払いを入れてから。

「とりあえず、いきなり神話とか伝説とか国の構造とか百年前にあつた戦争の話とかから始めても、面白くもなんともないよね？ 読者は架空の歴史の教科書を読みに来てるわけじゃないんだからさ」

「がっ」

まずはジャブ。

「日本人の名前には必ず「死」とか「夢」とか「天」とか入って、外人の名前は明らかにどこの国の言語でもない名前にするのもどうかと思う」

「げふっ」

ボデイ。

「あ、名前関係はもつとあるよ？ 昴とかいて「あきら」と読ませるとか、そういう漢字辞典にしか載ってない文字選択はかっこよくないからね？」

「ごはっ」

さらにボデイ。

「主要キャラが片っ端から天使とか悪魔とか伝説の英雄とかの血を引いてるもどうかしてるし、バトルで勝ったり負けたりが脈絡なくて伏線不足なのもヤバイよね。こういうのって都合主義って言うんだけど——知ってる？」

「ぐふっ」

顎が下がったところでアップパーカット。

「そもそも、明らかに書いている途中で詰まって、あきらめて次の話を書き出した痕跡がたくさんあったけど。これ、一番やっちゃいけないパターンだね。こういう感じで他のノートにも死屍累々なんじゃない？」

「がはあっ……」

ひざが落ちたところで右ストレート。ノック・アウトだ。

もちろん、全部イメージ上の話だけれど。佐久間にとっては実際に殴られたのと同じくらい効果があったらしい。座り込んでピクピク痙攣している。

つまり何かといえ、彼が一心不乱に書いていたのは自作の小説だったのだ。それも、中世ヨーロッパ風ファンタジーとか、現代学園異能とかの、ライトノベルと呼ばれるタイプのもの。

ところが、その出来がひどかった。いわゆる中二病全開の痛々しい仕上がりで、正直惣一としては苦笑するしかなかったものだ。とはいえ他者を無為に傷つける趣味はないから求められなければこんなことを言うつもりもなかったのだが。

冷静になってみれば、ここしばらくのむしゃくしゃした気分をそのまま叩きつけてしまったような気もするし、それでここまで見事にへこまれると罪悪感も出てきた。

あたりまえのこと。

「えーと、大丈夫？」

気の毒になって差し伸べた手は振り払われた。

「畜生、塚本のおっさんと同じこといいやがって——覚えてろ！ 必ずてめえをぎゃふんといわせてやるからな！」

佐久間は脱兎のように駆けていく。それはまるで、漫画のような後ろ姿だった。

「——ぎゃふんって。この辺じゃまだ現役なの、それ」

ため息と一緒に言葉を吐き出す。

このとき、惣一の気持ちはいささか矛盾した状態にあった。「やれやれ、なんだか大変なことに巻き込まれてしまった」と思う一方で「なんだかひどく楽しいかった」というようにも感じていた。それは不思議なことのようにも、一方でごくあたりまえのことのようにも思えた……。

※※※

そしてまた一週間がたつて、次の日曜日がやってきた。

あれから数日ばかりは「もしかしたら佐久間がなにかちよつかいをかけてくるんじゃないか」とビクついたが、結局何もなかった。

結果、今日も惣一は駅前に出てブラブラしている。

同級生たちはそろそろグループを形成したり、部活に入って先輩とつなぎをつけたり、あるいはいち早くがり勉強生活に突入していたりしている。けれど、惣一はそんな気にはな

れなかった。いまだにモヤモヤとした気分が離れてくれず、鬱屈した気分を抱えたまま。親の庇護下を離れて家出するとか、そうした決断が出来ない限りは、三年間をこの町で過ごすしかないのだ――それはわかっている。わかっている、受け入れられず。ただ、言葉にしがたい不愉快感だけが残り続けている。

「――ああ、畜生。暗いなあ」

胸の中のもやもやをため息として吐き出す。

そういえば、ここに来てからため息が癖になってしまったように思い、それがますます惣一の気分を重苦しくしていく。

参ったなあ、と。つぶやいて方向転換。当てもなく駅前通りを歩いてきた足を、ある方向に向ける。

不完全でも、もつとはっきりした息抜きがしたかった。

――激しい音、瞬く光。慣れてない人が踏み込めば一発で頭痛に苦しめられる場所も、惣一にとってはむしろ落ち着くものだ。

ここは、ショッピングモールの一角にあるゲームセンター（たぶん、運営側的にはアーミューズメントパークとか呼びたいタイプ）だ。

時代の流れか客層のせいかわ、店内に設置されたゲーム機の多くはクレイジーゲームやメダルゲームなど、惣一の趣味には合わないものばかり。奥へ踏み込んでいくと、ようやく格闘ゲームやシューティングゲームなど、慣れ親しんだゲーム画面を映し出す筐体が迎えてくれる。

あたりまえのこと。

ざっとラインナップを確認すると、そこそこ新しいものもある。何十年も前のゲーム機が平然と置かれているような「旅館のゲームコーナー」状態も覚悟していただけに、本来なら喜ぶべきなのだろうが、

「でもまあ、やっぱひと昔かふた昔前だよなあ」

東京と比べてしまい、またため息。

本当に、比べなければもつと楽にここで生活できるのだろうか。自分の頭の悪さがいやになる——ダメだ、気分を変えよう。

しばらく迷った末、惣一が座ったのはロボット物アクションゲームの前だった。

何十年も前からシリーズが続いている超有名ロボットアニメを原作にしている、主人公機からたった一話しか登場しなかったようなチョイ役機体まで、多様なロボットを操作して戦える。原作にあるシチュエーションを忠実に再現したり、あるいは原作だと絶対に起きないような事を起こしてみたりと、いろいろな遊び方が出来るのもウリだ。

ここにあるのは残念ながら最新のバージョンではなかったがそこそこ古い感じで、むしろ高校受験でゲームセンターから遠ざかっていた惣一にとっては一番慣れ親しんでいる、といつてもいい。

どれだけさび付いているか、ちょっと腕を試してみるとしよう。

——使い慣れた機体を動かしてみても思う通りにいかず首をひねったり、あえてぜんぜん使ったことのない機体で新しいやり方を見つけた。以前なら簡単に倒せたコンピューター相手にあっさり負けてみたり、逆に散々苦しんだ記憶のあるボスをさっくりと落とす

てみたり。やっぱりゲームの腕はすっかり鈍っていたけど、いや、鈍っていたからこそ、試行錯誤が楽しかった。

そんな風に小一時間も熱中していたらうか。

「……ん？」

妙な気配を感じたのは、ステージとステージの間の会話デモをスキップしていたときのこと。いつの間にか惣一の後ろに同じ年くらいのメガネをかけた小柄な少女が立っついて、ゲーム画面に見入っている。

何をしているんだろう、とは思わなかった。実のところ、東京にもこういうタイプは結構いたからだ。

このゲームは人気ロボットアニメ（それも美形キャラがたくさん出てくるので、女の子のファンが多い！）を原作にしているので、ゲームに興味はないが「動いているところや会話デモを見たい」人がプレイしている後ろからジーっと画面を見つめるのだ。

以前なら、惣一も気にせずゲームに集中していたらう。惣一もこのアニメは好きだが、ゲームはゲームとして割り切って楽しむタイプだった。

——でもまあ、こういうのもいいよな。対戦プレイ中でもないし。

ボタン連打でスキップする手をやめ、会話デモをじっくり表示させる。ちらりと後ろを見ると少女がほほを緩めているのがわかり、なんだかこっちもにやけたくなる。

それからしばし、惣一は「見せプレイ」に徹した。あえて原作を再現できるような組み合わせで戦ってみたり、効率が悪くから普段は滅多に使わない武器を使ってみたり。

惣一がリズムカルにボタンとレバーを動かすのにあわせて、画面の中の赤い機体は右へ

あたりまえのこと。

左へ軽やかにステップを踏み、手にした銃から吐き出す光が敵を撃つ。

『当たらなければ、どうということはない!』

パイロットの決め台詞とともに敵の攻撃をかわし、とどめの一発。

よしと惣一が握りこぶしを作るのと、少女がぱちぱちと手をたたいて――すぐに顔を赤くするのは、ほぼ同時だった。

――とはいえ、慣れない「カツコ付け」がいつまでも続くはずもない。次のステージでは動きがぎこちなくなったところを狙い打たれ、あつという間にゲームオーバー。

「ま、こんなもんか……」

ひとりごちて立ち上がり、振り向いたところで目が合う。

「あ」

驚いた声がかさなり、そのことが惣一の心拍数を跳ね上げる。

「えーっと、」

つばを飲み、上ずる声を抑える。

「――このアニメ、好きなの？」

「あ、はい……」

ちよつと恥ずかしがる様子がかわいいな、と思ってしまう惣一なのだった。

「――あ、神崎さんは中学から優華なんだ」

「ええ、はい。高遠さんは昇屋なんですよね？」

「うん、今年の春に入ったばかりで、今は寮暮らしだよ」

神崎綾香、と名乗った少女は市内の私立女子高である優華に通っているのだという。昇星と優華は古くから交流があり、たびたび交流会のようなものも催されている。口さがないものは「将来有望な都会者とのお見合い学校だ」なんて揶揄したりもするらしいが、まあそれは惣一には関係のない話だ。

——しゃべってみてもなんだかふわふわしている感じで、「ザ・お嬢様！」って感じだなあ。

惣一がそんな失礼な感想を抱いているのが、少女に伝わっているのかいないのか。

二人はもろもろと取り留めのない話をしながら、ショッピングモールや駅前通りをしぼらく歩いた。

学校のことやこの街のこともちよつとは喋ったが、やっぱりメインの話題はアニメのことだ。綾香は小学校のころに近隣県からN市へ転校してきたということのだが、それ以前からアニメにはどっぷりはまっていたらしい。

ちなみに、二人の間には「テレビ局ふざげんな」「許せないですよね！」という会話がなされ、コンセンサスがとられている。

「友達には親に頭を下げてCSを入れてもらった子もいましたけど、うちは無理なんですよねー」

「あー、そういう手があるのかあ」

残念ながら、寮住まいの惣一にも不可能な方法だ。

「あの作品だったら、私は十三話が一番好きなんですけど、高遠さんは？」

「ああ、中盤のクライマックスだね。あの特攻作戦はしびれたなあ。でも、僕はやつぱり

あたりまえのこと。

十八話だね。あの、戦いが終わった後のちよつとさびしい日常のシーンが忘れられない」
そしてもちろん、一番盛り上がったのが「好きなアニメ」の話だ。
キャラの話、ストーリーの話、設定の話、声優の話。その中でわかったのが、彼女の趣味で、

「あのアニメならライバル、あれなら主人公の先輩、あれならラスボス……」

「——ああ、うん。神崎さんは渋めのキャラが好きなんだね。」

平たく言えば「オヤジ好き」。思わず苦笑し、言葉を濁す。

それから、アニメ業界にまつわるちよつとしたゴシツプの類。

「えー、本当なんですか？」

「噂だよ、噂。ない話じゃないけど、信じるのはちよつと難しいかな？」

「ああ、ほつとしました」

たわいもない話を積み重ねていくのが、惣一にとっては本当に楽しかった（相手がむさくるしい男じゃなくてかわいい女の子だから、という大きな要素があったことは否定できないけれど）。

東京にいたころには毎日のようにこんな話をしていたものだが、それがどれだけ幸運なことなのか、しみじみと噛み締めた。

——だから。楽しすぎて、浮かれすぎて。ちよつと間が抜けすぎていた。

「……高遠さん、ちよつとこの辺よくないです」

「え？」

気づいたのは、綾香のほうが先だった。腕を引き、惣一の足を止める。それでようやく、

惣一も周囲の変化に気づく。人の数が減り、立ち並ぶ店の質が変わり、周囲の雰囲気もよくない。はっきり言えば、不良のたまり場になるような区域に踏み込んでいた。

話に夢中になりすぎて、駅から離れすぎていたのだ。

「ごめん、戻ろうか」

「はい」

二人が足早に来た道に戻ろうとしたのと、

「女連れで楽しそうじゃなか、ああ？」

絵に描いたような「田舎の不良学生」が前後から二人ほど近づいてきたのが、ほぼ同時。参ったな、と思う暇もありはしない。ニヤニヤと笑いながら、ゆっくりと距離を縮めてくる。走って逃げ出すのも、おそらくは無理。

「まあまあ、そんな嫌な顔するなよ、お二人さん。取って食いやしないさ」

「ちよーおつと、恵まれない俺たちにカンパをもらいたいだけなのさ」

「ついでにカノジヨは俺たちと遊んでくれれば嬉しいなあ」

そしてまた、下卑た笑い。

惣一は少女を壁側にかばい、一步踏み出すけれど――喧嘩と縁がない彼に、いったい何が出来るというのか。一週間前と同じように体が震える。

けれど、背中側からおびえの空気が伝わってきて。ただの見栄だと笑われても、ここで無様な振る舞いをするのは嫌だ。

その振る舞いが、不良たちをさらに刺激したのか。

「へえ、生意気な顔してんじゃなか、」

あたりまえのこと。

片方の男が大げさに腕を振り上げ、惣一が反射的に体を縮めたのと、
「——つまんねえことやってんじゃねえよ」

まったく別の方向から、ドスの聞いた声が降ってきたのは、やはり同時。

惣一が思わず振り向いたその先にあつていたのは、一週間前にも見た鋭い目つき。

混乱する惣一や完全に蚊帳の外の綾香より先に事態の変化に反応したのは、二人組みの不良だった。佐久間のほうに指差して叫んで曰く、

「てめえ佐久間、俺たちの邪魔しようつてのokay！」

「ニチューの修羅^{イクサガミ}つて名前で呼ばれてたからつて調子にのつて——」

しかし、最後まで喋ることは許されなかった。

「その名前で俺を呼ぶんじゃねー！」

鮮やかなジャンピングフォームから、飛び蹴り一閃。ほとんどライオーキックだ。

ひいっと悲鳴を上げた片割れが脱兎の勢いで逃げ出し、蹴飛ばされたほうもあわててどこぞへ逃げ去っていく。

一方、瞬く間に不良を追い払った佐久間は、嬉しそうな顔もせずに惣一たちのほうを向いて、

「——お前はどうも地元の間人じゃならしいから言つとくが、いくらこの辺でもあーいう文化はほとんど残ってねえからな？」

「文化つていうと……？」

「だから、さっきのアレだよ！ 人に恥ずかしいあだ名つけてる奴！」

ポンと手を打ち、

「ああ、修羅イクサガミっていう——」

「だからその名前で呼ぶなって！」

佐久間がわめき、そのプレッシャーに惣一も口を閉じる。そこに脇から新たな攻撃。

「あ、修羅イクサガミの佐久間さんなら私も知ってますよ。学校の友達とかがよく話してるの聞いてました」

ぐ、と佐久間が言葉に詰まり、さすがに惣一もかわいそうな気になる。しかし、
「気に入らない先輩を殴り飛ばしたとか、十人相手に負けなかったとか。あなたが修羅イクサガミの佐久間さんだったんですねー」

情け容赦ないツッコミに、ぐぐぐ、とさらに佐久間が唸る。もしや綾香に手を出すのではないかとも思ったが、どうも女子に手を出す気はないらしい。

——本当に変な不良だなあ、こいつ。

なんだかオタク趣味の持ち主らしいし、典型的な中二小説書くし、変なところで律儀だし。なによりも、今の助けは大きな恩だ。

だから惣一は、

「ま、まあ神崎さん、その辺で。とりあえずさっきの連中が仲間とか連れてきたら大変だし、移動しない？」

と助け舟を出してやる。ついでに、本当は「君の小説に出てきそうな名前だけど」とかツッコミを入れるのも自粛、自粛。

ちらりと視線を飛ばせば佐久間も目だけでうなずき、男のアイコンタクト成立。

「お、おう、そうだな。別にあの程度の連中が数で来たって怖くねえが、めんどくさいし

あたりまえのこと。

な。——つうか、俺はツレがいるんだよ。車できてつから、送るの頼んでやるよ」

とりあえずさっさとずらかるか、と促す佐久間に従って歩くことしばし。佐久間は路肩に駐車中の車のひとつに近づき、荒々しくノック。

「塚本のおっさん、開けるー」

「ああん？」

応えて窓ガラスが下がり、中から出てきたのは惣一にも見覚えのある顔だった。

「あ、海のときの……」

「なんだ、また会ったな」

昇星のOBだという正体不明な作務衣のおっさんが、惣一・綾香・佐久間という年恰好は同じだが雰囲気がばらばらの三人を怪訝そうに見やっている。

この人が「塚本のおっさん」らしいけど……どういつながりだろう、これは、と。

なんだか漫画じみた展開に惣一が困惑する一方で、

「とりあえず事情は後で説明すつから車出してよ、おっさん」

「てめえ裕孝^{ひろたか}、年上にはもうちよい敬意を払えと——まあ、いいか。デコボコトリオの詳細い話は家で聞いてやる。さっさと乗ってくれ」

なんだかよくわからないまま話が進んでいる。

乗れ、といわれた惣一と綾香はきよとんと顔を見合わせるしかないが。

「いいからさっさと乗れって！」

いらだった様子の佐久間に車に押し込まれてしまっただろうしようもないのだった。

※※※

「うわあ、これは……」

「本当にお屋敷ですねー」

「見た目だけだよ、見た目だけ。中はボロだ」

「うるせえ。維持費ドンだけかかっているとってんだ」

車を飛ばすことしばし、四人がやってきたのは市街の一角にたたずむ塚本の家の前だった。

家——いや、それは本当に「屋敷」だった。立派な塀に立派な門、入っていくと庭まである。東京暮らしじゃ絶対にお目にかかれないような、お屋敷。ただし、

「あー、本当にお手入れは行き届いてない感じですね、お庭は雑草だらけですし」

「神崎さん神崎さん、その辺で……」

「言ったら、俺は塚本つていっても傍系のきれっぱしなんだよ。残った資産はこの家だけで、維持するのに手一杯だ」

「作務衣のおっさん」こと塚本郡司つかもとぐんじは、なんとこのN市で大きな権勢を誇る地主の一族、塚本家の一人らしい。それならこの屋敷も納得だが、実際にお金はあまりないらしいのも、屋敷の中を歩いてみればすぐわかった。

うーん、床も不自然にギシギシいつてるし。

「気をつけるよー、たまに踏み抜くからな」

——勝手知ったるなんとやら、な佐久間の様子からすると、本当にやばいらしい。

あたりまえのこと。

ギシギシ床はともかく。三人が通されたのは、元は応接間だったらしい畳敷きの部屋だった。ただし、今はとても本来の用途には使えそうにない。部屋を埋め尽くしかねない勢いで本やらゲーム・アニメのソフトやらが積み上げられていたからだ。部屋の端には大きなテレビも鎮座ましましてる。

「えーと、ここは？」

惣一の疑問に答えたのは佐久間。

「おっさんの仕事場&俺の遊び場ってとこかな。本気でやるときには別の場所にこもるけど、それまでは大体俺とだべりながらここで仕事してるよ」

「塚本さんはどんなお仕事なんですか？」

「あー、なんつーかな」

綾香の問いになぜか塚本が言葉に詰まる。言いたくないなら言わなくても、と惣一のフォローより早く、

「おっさんは小説家なんだよ、名前あんま売れてないから言いたがらないんだけどな」

ズバツと佐久間が暴露してしまう。

その後、ふてくされる塚本はなかなかこのことを語ろうとしなかったが、実際に佐久間から聞いたペンネームは惣一も綾香も知らなかった（文庫時代小説の世界ではそこそ名前が知られているらしいのだが）のでフォローの仕様がな。ただただ愛想笑いを浮かべるばかりだ。

——それからしばらく、四人でいろいろな話をした。アニメの話、ゲームの話、漫画の話、

小説の話。時間でいえば数時間に過ぎなかったが、それが無限に感じられるくらいに濃厚な時間だった。

佐久間はやっぱりオタク趣味の持ち主で、不良と目されることについては「降りかかる火の粉を振るってたら変な名前がついちまっただけだ」と腐った。

プロの作家と親しく付き合ってるのになんであんなダメ小説を、と惣一は疑問に思ったが、どうも佐久間は塚本からアドバイスをもらいたがらないらしい。実際、目の前で「だから俺の言うことを聞けって言ってるんだろ!」「俺の書きたいものはおっさんとは違うんだよ!」というドタバタ劇が演じられた。

塚本は本人曰く「お前らが生まれる前からオタク稼業だよ」というわけで、しばしば三人が名前も聞いたことがないような古い作品を持ち出しては一人で楽しそうに笑っていた。そのたびに三人はアイコンタクトで「おっさんめ……」と目配せをしあったが、惣一としてはずっと探してきた古い小説がおっさんの家に埋もれているのでは、と期待を膨らませたのも事実だ。

綾香は主に三人の話をニコニコしながら聞いていたが、キャラ語りになると目をキラキラさせて話に割り込んでくるのが印象的だった。——ただし、そのキャラ語り「男性キャラと男性キャラの関係性」に集中しているあたり、残りの三人はやはりアイコンタクトをして「腐女子乙」とやったのだけだ。

もちろん、惣一も喋り倒した。「そうだ」と受け入れられることもあれば、「いや、違うだろ」と否定されることもあって、それがまた楽しかった。なんだか途中で泣きたくなってきたけれど。それは必死に我慢したから、ばれていない、はずだ。

こんなにあたりまえのことで、泣きたくなくなってしまったのが、なぜなのか。その答えはわかってはいたけれど、言葉にはしないことにした。

※※※

それは五月のある晴れた日、授業終わりの放課後のこと。

惣一は買ったばかりの自転車、古びたお屋敷の前に止めた。中をうかがうと、塚本が庭に水をまいている。

「今日は誰が来てます？」

「全員そろってる。お前さんが最後だよ。まったく、一人でも面倒だったのに二人も増えやがって。菓子と飲み物代くらいは出せよ？」

「わかってますって」

どこか楽しそうに憎まれ口をたたく塚本に、笑いながら頭を下げる。

——あのあと、三人はたびたび塚本の家に押しかけて駄弁るようになった。てんではらばらに漫画を読んでいることもあれば、佐久間の小説についてフルボッコにすることもあり、塚本が押入れから出してくるボードゲームをやることもあった（塚本が締め切りに追い込まれているときは、家主抜きで静かに盛り上がる）。

常に四人がそろっていたわけではないが、そこに行けば話が出る誰かいるのが、こんなにも楽しいものだと思えていた、というのが正直なところだ。

と、そんな惣一に塚本が声をかける。

あたりまえのこと。

「最初は死にそんな顔をしてたのに、今はすっかり生き返ったな。坊主、今楽しいか？」
振り返って、一言。

「——そんなの、あたりまえじゃないですか」



ターニング
ポイント

諸星崇

Illustration: 橘ほん



アヨイ

私立優華女学院高等部の三年生。ダンサー志望で、アルバイトの合間に練習にはげむ。無口で、感情表現が小さい。



ヒロキ

市立中央高校の一年生。高校入学を機に駅前のショッピングモールでアルバイトを始める。ごくごく平凡な少年。

第一話 ダンス・イン・ザ・パーキング

1 ようこそメカニック

桜の季節がまたやってくる。

新年度だ、新入生だ、新入社員だと、テレビの中はやかましい。「うらかな春の日差しの中、希望と期待に胸をふくらませた新たな世代が、新しい門出をむかえた」のだそうだ。

本当にそんな人がいるのだろうか。少なくとも、ヒロキの視界にはみつからない。

体育館で校長の長話を聞いているのは、右も左も退屈そうな顔ばかりだった。

(まあ、そうだよな)

テレビの中のお話は、東京や大阪といった大都市、そうでなくても電車で何駅も向こうに行った街でのことだ。ヒロキの近くではない。

山間でいまどき、高速道路を作るだ作らないだでもめているような田舎町には関係のないことだ。

「……で、あるからして、諸君の高校生活に期待をするものであります。以上、ご入学おめでとう」

来賓席から拍手が起こり、少し遅れてヒロキたち学生がそれに続いた。ヒロキも一応、何度か手を打ち合わせる。

高校の入学式。感慨も何もない。N市の公立中学を出た人間は、大半がそのままこの市立中央高校という、ひねりも何もない学校に進学する。

公立中学は二つあるので、ヒロキの周りの学生の数は大きく増えた。しかし、よく見なくても知った顔がそこに転がっている。石を投げれば、たぶん当たるだろう。

変化のない環境。変化のない毎日。小学生の頃は、高校生などといったらとんでもなく大人に思えたものだが、いざなってみるとそうでもない。

中学四年生と言われてもいような気がする。

「ヒロキー。カラオケ行こうぜー」

昼前に早々に解放された学生たちは、つかの間の自由を満喫しようと、思い思いに連れ立っていた。明日からは何ヶ月か前と同じように、授業にしばらくられるようになる。

平日の昼から堂々と歩き回れるのは、今日くらいの特権だ。

ヒロキも友達から声をかけられたが、今日はべつの用事があった。

「ごめん。オレ、バイトの面接なんだ」

「あー、今日だっけ。そっか、じゃあまたな」

中学からの友人はあっさり去っていく。まあ、おたがいに家も知っているし、明日から特にならなくても顔を合わせる相手だ。気にならない。

そもそも、今からヒロキが行く先でばったり会うかもしれない。

「どうせみんな、駅前に行くんだろうし」

市内で若者の遊び場になる場所と言えば、駅前にはひとつだけある大型ショッピングモールとその周辺だ。ショッピングモールは最近できたばかりで、わざわざ電車で揺られて出かける必要がなくなつたと、誰もが口をそろえたものだ。

実は、ヒロキが向かうのもそこだった。高校生になつたのを機に、アルバイトを始めることにしたので。それが駅前のショッピングモールであり、今日は面接なのだ。

特にバイトを始める目的があつたわけではない。ヒロキの家はごく一般的な家庭で、平均的な額のこづかいをもらっている。

だが、バイトで手にしたお金なら、こづかいよりもっと気がねなく、好きなように使える。部活でやりたいこともないし、それならバイトに時間を使つたほうがいい。理由はそのくらいだった。

なので、業種も細かく選んでいない。時給のよさそうなところを探したら、ショッピングモールが見つかったのだ。家や学校からもそう遠くないし、ヒロキにすればいい条件だった。

ひとつあるのは、「メカニック担当」という聞き慣れない名称だ。機械的な何かをあつかうのだろうとは思うが、あまり想像がつかない。

まあ、たかがアルバイトに専門的な知識や技術が求められるわけでもないだろう。ヒロキもネジ回しくらいは使えるし、パソコンのセッティングもできる。問題はないはずだ。それに、最近接客をしている店員がとんでもない客に振り回されるという話もよく聞く。ヒロキとしては、できれば接客は遠慮したいところもあった。

学校からショッピングモールまでは自転車でいたい三十分。苦にならない距離だつ

た。中はそこにぎわっている。

とはいえ、平日の昼だ。ごった返すというほどでもない。エントランスを歩くと、ファーストフード店の中にヒロキと同じ制服姿の集団がいた。やはりみんな、ここで腹ごしらえと考えるらしい。

一階の大部分は大手スーパーが入っていて、食料品売り場になっている。ヒロキにはあまり縁がない。

二階から上に服飾や雑貨、書店、おもちゃ売り場、ゲームセンターなどが集まっっていて、事務所もそっちにあるらしい。案内板にはそう書いてある。

ただ、ヒロキはそうした店舗の裏側に入ることなど初めてだった。

「あの、すいません。バイトの面接に来たんですけど」
「あ、はい。少々お待ちください」

近くにいた店員に話しかけると、どこかに内線をつないでくれた。待っている間、ヒロキはなんとなく落ち着かなかった。やはり初めてのアルバイトを前に、そこそこ緊張しているらしい。

「ごちそうへとうざい」

案内されて、「関係者以外立ち入り禁止」とあるドアをくぐる。その瞬間は少し、鼓動が高鳴った。無意識につばを飲み込む。

中はけっこう、殺風景だった。スチールの事務机と柵がならんで、いくつものファイルが置かれている。机の上には飲みかけのコーヒーがあった。

壁の時計が静かに時を刻んでいる。誰もいないので、秒針の音ははっきりと聞こえた。

無用心な気がするが、いいのだろうか。

「すぐに担当者が来ますので、かけてお待ちください」

「あ、はい」

店員はそう言うと、職場に戻っていく。とりあえず、ヒロキは言われたとおりに座った。慣れない事務用のイスは、あまりいい座り心地ではなかった。

ほんの数分だろうが、知らない場所ですりとうりというのは、なかなか落ち着かない。扉が開いたとき、ヒロキは思わず、ほっと息をついた。

「こんにちは。メカ希望の子って、きみ？」

青いつなぎを着たいかつい顔の男性が、よく通る声で言う。ヒロキは姿勢を正した。

「あの、面接って聞いてたんですけど」

「ああ、そうね。名前は？ 年は？」

「香田弘樹。十五です」

「はいはい、じゃあ採用ね。行こうか」

あっさりと、男性は踵を返した。ヒロキはあわてて立ち上がり、後を追う。

男性はそのまま、店舗の裏通路を進み、階段を上る。客からは決して見えない、従業員専用の空間だ。

ヒロキはすたすたと慣れた様子で進む男性に置いていかれないようにしながら、その背中話しかけた。

「あ、あの、いいんですか。さつき、採用って」

「うん。ぶっちゃけ、うちの部署、希望者がほとんどいないんだよ。だからいつも人手

不足でさ。香田くん、変な人でもないっぽいし。この間のバイト募集でも応募してくれたのきみだけでさ。その時点で決まってたようなもん。まあ、いきなりメカニックとか言われても普通、わかんないから敬遠するよね」

そのメカニックをあえて選んだ自分は変わり者なのだろうか。かすかな疑問がヒロキの頭をよぎる。

こう言ってはなんだが、ヒロキは学校や仲間内で目立つタイプではない。どこにでも平凡な少年で、本人もそれを自覚している。

進んで目立つたり、人前に立つたりすることはない。

「ここがうちの待機室ね。ちょうどみんな来てるから紹介するよ」

鉄製の防音扉がヒロキの前に現れた。プレートも何もなし。ハンドルががちゃつと重い音を立てて回る。

男性が中に向かって声を張り上げた。

「へい、新人さんいっちゃおう！」

『いらっしやうい！』

部屋の中から陽気な声が返ってくる。ヒロキが入ってみると、四人の男性が座っていた。「メカにようこそ。ここにいるのが全員ね。つうわけで順番に。まず僕、イケタニ。社員です。一応ここのメカの責任者」

ヒロキを案内してくれた男性が言う。部屋の中にいる中では、若いほうに入ると思ったのに、一番偉い立場だったらしい。

「肉体派なんで、そのつもりで」

イケタニが力こぶを作ってみせた。背はヒロキとほとんど変わらないのに、手足の太さは全然ちがう。

「次。ヒトツモリさん。趣味は競馬とスロット。この人も社員」

「あと阪神の応援も。よろしく」

やはりつなぎ姿の大柄な男性が、人なつっこい笑顔で手を差し出した。二十六歳だといふから、ヒロキより十も年上だ。手も大きいし、どっしりとして落ち着きがある。

「できるだけテキトーに楽をするのがモットーなんで。がんばろうね」

と思つたら、なんだかい加減なことを言われた。イケタニが無言で蹴りをくり出し、ヒトツモリは笑いながらそれを受け止める。

なんともつかみどころのない印象の人だ。

「カワナさん。この人は準社員。彼女募集中」

「いや、今してないっす」

カワナだけ、つなぎ姿ではなかった。今日は休みのようだ。ジャケットにジーンズという、ラフだがすらっとした服装で決めている。

顔立ちもすつきりしていてさわやかだ。この人が一番、もてそうな感じがする。

「この間、つき合い出したって言っただけでなかった？」

「ああ、わかれました。めんどいからしばらくいいっすわ、女」

だが、口からはずばりと切つて捨てる言葉が飛び出した。

ヒロキはまだ、彼女ができたことはない。周りの友達もそうだ。ときどき、カワナの言ったようなことを口にするヤツもいるが、明らかにかっこつけの強がりだとわかる。

が、カワナは平然としていた。本気でそう思っているらしい。ヒロキにはちょっと刺激が強すぎた。

「残りの二人はアルバイト。まずクスダさん。酔っぱらって三日連続でサイフ落とす人」

「ちよい、ちよい！ 他に何かあるでしょ！」

イケタニの言葉に、明るい声で抗議があった。イントネーションが少しちがう。関西弁だ。

ちぢれ毛の男性が、満面の笑みでこちらを見ている。あまりいいことを言われたわけではないのに、なんだかうれしそうだ。

「それに昨日は落としてないですよ」

「ああ、そうそう。警察に駆け込んだら尻ポケットに入ってたんだよね」

「そっちがバレへんように必死やったね！」

クスダが得意満面に言い放つ。とぼけたセリフに、ヒロキは思わず吹き出した。他のメンバーは大声を上げて笑う。

メカニックの中では、この人が一番年上らしいのだが、やけに愛嬌があって、とてもそうは思えない。ものすごい親しみやすさだ。

「最後がムロフシくん。小説家の先生」

「一冊だけでしょ。先生とか言わない。よろしく」

一番奥に座っていたのは、メガネをかけてまじめそうな人だ。なんでもプロの小説家をめざして執筆中だという。実際、一冊は出版されているらしい。

ただ、それだけでは食っていけないので、ここで働いている。

「不良学生だね」

「大学、おもしろくないもん」

ムロフシは市外の大学に籍があるのだが、ほとんど通っていないそう。そのうちやめるよ、とあっさりと言つてのける。

誰も彼も、なんだかいろいろとくせのある人たちばかりのようだ。

「んで、こちら、香田くん」

イケタニに紹介され、ヒロキは姿勢を正した。

「香田弘樹です。ヒロキでいいです。下の名前のほうが呼ばれ慣れてるんで。よろしくお願いします」

緊張しながらも、かまわずに言えた。メカニックの面々は拍手でむかえてくれる。年上ばかりだが、みんな明るくてフレンドリーだ。

うまくやっていけそうな気がする。

「じゃ、ヒロキにしよっか。基本、シフトは夕方考えてるけどいい？」

「はい。学校終わったら来ます。土日も入れます」

「稼ぎたい？」

「えっと、そこそこは」

イケタニが手早くメモを取っていく。それを四人が後ろからのぞき込んだ。

「最初は慣れないだろうし、無理のないようにしとけば？ 高校も入ったばかりなんですよ？」

「そうか、高一か。しかも入学したて。若っけー」

「憎い！ 若さが憎いわ！」

「クスダさん、うっさい」

わいわいがやがや、まるで教室で友達がさわいでいるような光景だ。

と、そのとき、内線が鳴った。

「はい、メカです」

ヒトツモリがそれを取る。同時にクスダとムロフシが立ち上がった。その表情は一瞬前とは打って変わって真剣なものに変わっている。

「はい、はい、了解」

受話器を置く。すでに扉に手をかけたクスダたちに、ヒトツモリから指示が飛んだ。

「三階の電飾が点かない」

「うっす」

それだけ言って二人は出て行った。イケタニは見向きもしなかったし、ヒトツモリももう机の上のヒロキのシフトに目を戻している。

今のがメカニックへの呼び出しだとわかったのは、少し後だった。みんなの切り替えが早すぎて、ヒロキの頭がついていかなかったのだ。

「あの、メカってどういう仕事なんですか？」

ヒロキはここにアルバイトをしに来たのだ。忘れかけていた。頭を切り替える。

「基本的には機械系のトラブルと館内清掃。けど、それ以外にもいろいろ借り出されるし、気づいたことはみんなやるよ。荷物運びとか、力仕事が多いけどね」

イケタニの後をヒトツモリが継いだ。

「要は、汚れ仕事とか肉体労働全般。だいたい、ああやって内線かインカムで呼ばれるから。こっちから見回りもするけどね。遊んでるばっかじゃないのよ、これでも」

正社員の二人がすらすらと答える。まじめな話になってきた。聞きもらすまいと、ヒロキは大きくひとつうなずいた。

「そんなかわり男所帯。出会いを期待してたらごめんな」

「よけいなこと言うなって、モリちゃん」

ふたたびイケタニからローキックが飛ぶ。ヒロキはヒロキで反応に困った。

とかくメカニックの人々は、まじめな話が続かないらしい。

「いや、気楽でいいんですけど」

「おいおい、高校生がそんなこと言うなって」

「カワナさんも帰って」

イケタニが冷たくカワナを追い出す。カワナもヒロキの顔を見に來ただけのようで、「明日からよろしく」と言い残して帰っていった。

「明日の十八時からシフト入れとくね。僕も来るから、そんなきにつなぎ渡すわ。で、そのまま勤務に入ってください」

「はい。よろしく願います」

こうしてヒロキの人生初のアルバイトは、とんとん拍子に始まることとなった。

待機室に威勢のいい声がひびく。

「よっしや、来ーい！」

「あいよー！」

イケタニの太い足がうなり、クスダの外もを蹴り飛ばす。

「おうふう！」

けっこう重い音がして、クスダが変な声で悶絶した。じゃんけんで負けたほうがローキックを打たれるという、謎のゲームだ。休憩中にヒマだからと、イケタニとクスダがやり出した。

バイトを始めて一週間。ヒロキはすっかりメカニックに溶け込んだ。

仕事については、まだ慣れない。ヒロキがひとりでできるのは駐車場の見回りとゴミ拾いだけだ。館内設備のメンテナンス、要するに切れた蛍光灯の交換や傷ついた壁の補修などだが、これは先輩に教わらないと手が出せない。

館内清掃も業務用の大型クリーナーや強力な洗剤を使うので、誰かに見ておいてもらわないといけない。

メカニックは安全第一とのこと、ヒロキが知らないこと、できないことは無理にやらされなかった。かわりに毎回、誰かから何かを教わるので、覚えることはたくさんある。

しかし、それ以上に先輩たちの言動がおかしくて、少なくともバイト先で過ごす時間が楽しいことはまちがいがなかった。

今日はイケタニとクスダが同じ時間のシフトに入っている。今はローキック合戦をしているし、この前は腕相撲をやっていた。

ヒロキも巻き込まれた。二人とも力仕事をやっているだけあって強く、特にイケタニにはまったく歯が立たなかった。

あるときは、ヒトツモリとカワナと同じシフトになった。

「で、そいつは年越しの瞬間、風俗の待合室にいたわけ」

「あの店、昔はレベル高かったのになー」

「今はべつの通りの店がいいんですよ。ヒロキ、知ってる？　つか、行く？」

ヒロキが返答のしようもない猥談で延々と盛り上がったのが印象的だった。学校でエロ本を囲んでさわいでいるのが恥ずかしくなる。

ちなみにこのときは、ヒロキはそくさと見回りに逃げた。

あるときはムロフシと一緒にいる。休憩時間中、彼は待機室のパソコンを使って本当に小説を書いていた。

「すごいですね」

「すごくないって。ヒロキもその気になりゃ書ける」

「いやいや、無理ですよ。小説なんて」

本を書くなんて、ヒロキにはまったく考えられない。読書感想文も投げ出したいヒロキには絶対にまねできないことだ。

ちなみに、一応、休憩中とはいえ、職場のパソコンを使うのはまずいので、黙っていてくれと言われた。イケタニたちは知っているが、もっと上のショッピングモール全体の課

長やら部長やら、えらい人たちには内緒になっているそうだ。

こんなふうにやりたい放題に見えるのに、仕事はきちんとするのだから、また不思議なところだった。

「うし、休憩終了。クスダさん、この間届いた機材、組み立てといってくれる？」

「あいさ」

イケタニの指示で、クスダが大きな段ボール箱を運んでくる。新しい清掃用機材が届いたとかで、イケタニとヒトツモリが試してみるのだそうだ。

ヒロキのほうは、いつもの見回りの時間だった。

「オレ、駐車場、行つてきます」

「ほい、行つてら。気をつけてね。インカム忘れちゃダメよ」

「はい」

イケタニに言われて、机の上のレターケースからインカムを取り出す。シヨツピングモールの駐車場は広い上に、内線など入っていない。連絡は専用のインカムで取ることになっている。

ゴミ拾い用の火バサミとビニール袋を持って、待機室を出る。ヒロキの仕事は駐車場のゴミ拾いと見回りだ。いやな話だが、ときどき、不審者が入り込んでいることもあるらしい。

定期的にメカニックが見回って、人が来ることをアピールしておくことが、一番の予防になる。

ゴミも同じだ。放っておくと、ここにゴミを捨ててもいいと思われてしまう。こまめに

かたづけられることで、捨てられるゴミ自体が減っていくのだ。

ヒロキの仕事は当座、このゴミ拾い兼見回りだった。

「ん？」

空き缶を拾い上げたとき、遠くのほうから何かがぶつかるとような音がした。

金属を蹴飛ばしたような音だ。駐車場は鉄骨の柱がむき出しになっているところがある。壁がないので、それを蹴ると音がひびくのだ。

(ケンカかな?)

だとしたらやつかいだ。ヒロキは口元をゆがめた。

イケタニからは、不審者を見つけてもへたに手出しをしないように言われている。ケガをされるほうが困るから、きちんと報告してくれればいい、とのことだ。

ヒロキとしても、ケンカの仲裁などできないし、もし殴られでもしたら、やり返して勝てる自信もない。そもそも、バイトが客に手を出すわけにもいかない。

こつそりのぞいて、どうしようもなさそうならイケタニたちに助けをもらおう。そう思つて、ヒロキは足音を忍ばせた。

駐車場の端のほうに人影が見える。業務用のトラックや社用車を停めるためのスペースだ。この時間帯は空いている。

そこでひとりの少女が、熱心に本を読んでいた。

どこかで見たことがある服装だ。というか、いつも見ていた。一階のフードコートに入っているファーストフード店の制服だ。

年はたぶん、ヒロキと同じか、少し上くらいだろう。本を読みながら、手に持ったおに

ぎりを黙々とほおぼっている。

やがて、おにぎりを食べ終わると、彼女はすっと立ち上がった。見つかったのかと、ヒロキはあわてて近くの柱にかくれる。

が、ヒロキのほうには目もくれず、彼女は姿勢を正し、大きく息を吸い込んだ。

指先でリズムを取り、肩や頭がそれに合わせてゆれる。よく見れば、耳にイヤホンが刺さっていた。

やがて、しなやかな腕が伸び、細い足が軽快なステップを踏み出した。

空気が一変する。ヒロキの耳には、彼女の靴がコンクリートをこする音しか聞こえない。しかし、それがかるやかなリズムを刻んでいて、BGMのようになっていた。

(へえ、うまい)

ダンスに関して、ヒロキはまったくの素人だ。良し悪しはわからない。わからないが、彼女の動きに目を引きつけられるのを感じた。

気づくと、ヒロキは柱の陰から身をのぞかせ、彼女の踊りをじっと見つめていた。

「誰？」

向こうから声をかけられて、ヒロキのほうがおどろく。意味もなくあたふたしてしまうが、警戒気味の目でじっと見られてしまっでは、もうどうしようもなかった。

「メカの人？」

ヒロキのかっこうを見て気がついたらしい。同じバイト仲間だと伝えれば、そう怪しまれずにすむかもしれない。

「あ、どうも。メカの新人です。香田弘樹って言います。えーと、見回りに来たんですけど、

音が聞こえたもんで」

そうヒロキが言ったとき、床に置かれていたスポーツウオッチからアラーム音がした。少女の持ち物らしい。拾い上げ、アラームを止めると、彼女は手早く荷物をまとめてしまった。

「じゃましてごめんなさい」

「あ、ちよつと」

頭を下げると、少女は声をかける間もなく走り去ってしまった。煙に巻かれたような思いで、ヒロキは何度か目をしばたいた。

まるで夢だったかのような、あつという間のできごとだった。

3 マスクの向こう側

その翌日。ヒロキは謎の少女とあっさり再会を果たした。

「お疲れ様です」

休憩時間中、メカニックスの待機室の入り口から、昨日の少女が入ってきたのだ。

「おつかれー。練習？」

「はい。おじゃまします」

「どうぞー」

イケタニがひらひらと手を振る。少女は二度、頭を下げて、去っていった。

突然の再会にびっくりしていたヒロキは、またも声をかける機会を失ってしまった。とまどいが顔に出たのか、イケタニがこちらを見る。

「もしかして昨日会った？ ヤヨイちゃん」

「あ、はい。駐車場で」

「あの子、ダンサー志望なんだってさ。ああやってバイトしながら、休憩時間に駐車場で練習してんの。わざわざこっちに一声かけに来るのはえらいよね。そういえば言っただか。ごめんごめん」

「いつもやってるんですか？」

「バイトに入ってる日はいつもかな。最近はちよつと休んでたみたいだけど。新学期だし、いそがしかったんじゃない？」

イケタニの口調から察するに、やつぱり学生のようにだ。中学生ということはないだろう。しかし、ヒロキの周辺で彼女を見かけた覚えはない。

「学校、どこなんですか？」

「ヒロキ、中高ちゅうこうだっけ。あの子はお女学のほうだよ。優華ゆうかの、たしか三年だったはず」

それか、とヒロキは納得した。

N市にはヒロキの通う市立中央高校以外に、二つの私立高校がある。昇星学院しょうせいという男子校と、優華女学院という女子校だ。この二つの学校は交流があるらしいが、ヒロキの高校は特に接点はない。

ちがう高校で、しかもちがう学年では、見覚えもないはずだ。

「オレ、なんか怒らせたみたいなんですけど。さっきも話してもらえなかったし」

「そんなのみんなそうだよ。おじぎしてたじゃん。普通だつて」

そういえば、ヤヨイという少女は二回、頭を下げていった。一回はヒロキに向かってだったらしい。

それなら一言、声をかけてくれてもよさそうなものだが、そういうタイプではないらしい。

「あの子、めちゃくちや無口なんだよな。あんまり人づき合いがうまいタイプじゃないから、仲良くしてやってよ。俺ら、みんな年上だし、学校にもバイトにも友達いそうな感じじゃないし」

そう言われると、ちょっと気になった。

昨日のヤヨイのダンスを思い出す。たしかにうまかったが、なんだか孤独な感じもした。ひとりで踊っていたのだから当然そうだともあるかもしれないが、それ以上に何か、他人を寄せつけないような空気をまとっていたのだ。

そんな子がひとりで、日の落ちた人気のない場所にいるというのはちょっと引くかか

る。「見回り、行ってきます」

「はいはい。よろしく」

昨日と同じように、ヒロキは駐車場に向かった。ヤヨイはひとりで練習したいのだろうが、こっちも仕事だ。名目は立つ。

ヤヨイが練習に使っていた業務用のスペースに向かう。と、またも激しい音がコンクリー

トの間に反響した。

だが、昨日とは少しちがう。もっと荒々しく、剣呑なひびきを持った音だ。

いやな予感がヒロキの頭をかすめた。走り出す。車の列の向こうに、ヤヨイの姿を見つけた。

数人の男女に取り囲まれていた。

「何やってるんですか？」

考える前に口が動いていた。複数の視線がヒロキに集まる。

「関係ねえよ。向こう行つてろ」

男のひとりが犬でも追ひ払うかのように手を振った。ヒロキと同じ年代に見える。ブレザーを羽織つて、その下のシャツをわざわざ着崩していた。その服装がヒロキの目にはいやな映り方をする。

(昇星のヤツらかよ)

わざわざだらしなくしているが、昇星学院高等部の制服だ。同じかつこの男がもうひとりいる。

昇星学院とヒロキの中央高校とは直接の交流はないのだが、間接的なつながりはある。向こうのほうが優秀で、格が高いというものだ。わかりやすく言えば、昇星学院は金持ちで成績優秀なお坊っちゃん校なのである。

ヒロキたちからすれば、だからどうしたという話なのだが、昇星学院の連中は総じて中央高のことは見下してくる。おかげで両校の生徒は、おたがいの印象がもうそれだけで悪い。

今は、ヒロキはバイト用のつなぎを着ている。それでもえらそうにしてくるのは、もう昇星高校にはびこる病気なのだろう。そう思うことにした。

「あたしら、この子に用があるだけだから」
「あっち行ってよ」

ふたりいる女子は私服なので、学校はわからない。が、年はたぶん変わらないだろう。髪は茶色で、化粧品のおいが鼻を突く。ヒロキの苦手なタイプだった。

「いや、そう言われても」

場の空気はぎすぎすして、とても友好的な雰囲気とは言えない。ヤヨイはまるで無表情だが、四人組はヒロキに剣呑な目を向けてくる。

ヤヨイひとりをここに置いていくのは、ちょっと考えられなかった。といって、ヒロキに何か考えがあるわけでもない。その場に立ち尽くしていると、ひとりの男が手を伸ばしてきた。

「行ってるって」

「痛っ！」

動かないヒロキにいら立ったのか、いきなり胸倉をつかみ上げられる。はずみでインカムが転げ落ちる。そのまま今度は突き飛ばされた。

思わずしりもちをつく。自慢にならないが、ヒロキはまともなケンカなどしたことがない。小学校の頃のつかみ合いか、友達との口ゲンカがせいぜいだ。

いざ手が出されると、正直なところ、おどろいた。そして想像以上に衝撃を受けた。

(や、やべ……)

息がつまり、腰が引ける。いまさらだが、相手が四人もいることに気がついた。

「変な人を見かけたら、へたに手出しをしないこと。ケガでもされたら大事だから」

イケタニの言葉がよみがえる。たぶん、わかっていたのだ。こういうとき、ヒロキが何もできないことを。

地面から見上げた私立の連中は、信じられないほど大きく見えた。

「やめて」

ガラスをはじくような声が出た。

硬く、冷たい。ふるわせた空気をそのまま氷点下に落とすような声。明確な怒りがそこに表れている。

「その子は関係ない。関係ない人を巻き込まないで」

ヤヨイを囲む四人が一瞬ひるむ。が、すぐに強気の仮面を取り戻した。

「だったらおとなしく顔貸しなよ。気取っちゃってさ」

「はじめっからそうすればいいつつの」

女子ふたりが、乱暴な言葉を放ちながらヤヨイにせまる。ヤヨイは気丈ににらみ返した。

だが、その手は固くにぎられている。そして、小さくふるえている。

「――！」

ヒロキの中で何かはじけ、立ち上がるうとしたときだった。

ウウウウウウー！！

駐車場にけたたましいサイレンが鳴りひびく。心臓がはね上がり、背筋を電流がかけ抜けた。

張りつめていた空気がリセットされる。と、そのとき、さらなる不穏な気配がヒロキたちを包み込んだ。

「ひっ!」

裏返った悲鳴が上がる。ヒロキたちの周りを、防毒用のごついガスマスクをつけたつなぎ姿の一団がさらに取り囲んでいた。

「な、なんだよ、お前ら!」

男たちの怒鳴り声にも、ガスマスクたちは答えない。その手にはスプレーやハンマー、金のこ、なぜか車を持ち上げるジャッキを持っている者もいた。

青白い蛍光灯の光に照らし出された姿は、異様と言う以外にない。そのうちのひとりが、片手でライターの火をつける。そこに向かって、もう一方の手に持ったスプレーを噴きかけた。

「うわあああっ!!」

いきなり噴き出した炎が視界をおおう。可燃性の洗浄剤に火気を近づけたときに起こる現象だ。ヒロキも先輩たちから、絶対にやるなと口すっぱく言われた。

ガシャーン! と反対側で激しい音がする。べつのひとりが身長ぐらいありそうな超大型のボールを地面にたたきつけていた。

鉄製の防火扉もこじ開けることのできる業務用の工具だ。当たれば骨が折れるぐらいではすまない。遊びに使うなど、ヒロキは何度も言われた。

ガスマスクたちはなおも、何も言わない。そのままじわじわと輪を狭めてくる。まるでホラー映画だ。ヤヨイを取り囲んでいた四人が見る間に血の気を失っていく。ジャッキを

持ち上げたガスマスクがいきなり走り出したところで、四人はついに音を上げた。

聞き取れない悲鳴とヒロキとヤヨイを残して、四人は一目散に逃げ出す。こちらを振り返る余裕もないのだろう。走っている最中にひとり転んだ。瞬時に起き上がり、そのまま走っていく。

ヒロキはへたり込んだまま、呆然と口を開いた。

「あの、みなさん、どうして」

「インカム落としたろ。ダメだよ、高いんだからさ」

ガスマスクの向こうからイケタニの声がした。拾い上げたインカムは、パイロットランプが点きつ放しになっている。落ちたはずみでスイッチが誤作動したらしい。

そこからメカの先輩たちが様子を聞きつけたようだ。

「たまにああいうバカも来るんだよね。バイトの子がちよっかい出されることもあるからさ」

「そういうのを防ぐのもメカの仕事ってわけ」

「俺ら男ぞろいだし、武器もいろいろあるし」

「つなぎの男が来たら、普通はビビるからね。ヤヨイちゃん、ケガなかった？」

それぞれがマスクを脱ぐ。ヒトツモリ、カワナ、今日は休みのはずのクスダとムロフシも顔を出した。

ヤヨイは言葉もなく、こくこくとうなずいている。それを確認したイケタニが、ぼんぼんと手をたたいた。

「はい。というわけでみなさん。今日、ここでは何もありませんでした。いいですね？」

今日もお店は平和です。バンザイー」

『バンザイー』

やる気のない唱和があつて、みんなぞろぞろと戻り出す。イケタニに背中をたたかれて、ヒロキも立ち上がった。

あとで確認したら、イケタニがもみ消して、この一件はなかったことになっていた。

「あ、あの」

待機室に戻る途中、ヤヨイがヒロキに話しかけてきた。振り返ると、真つ赤な顔になつて、いそがしく左右を見ている彼女の姿があつた。

「ごめん。わたし、話すの、へたで。さっきのも、わたしの学校の人たちの。わたしのことに気に入らないみたいで、からまれて」

感情がほとんど表に出ないヤヨイは、学校でも浮いているらしい。ダンサーを目指しているというの、ヤヨイが悪目立ちする要因になつているようだ。

周りところがう人間は、学校という場所では特に浮く。そして、やつかみの対象になる。うまく受け流すことができればいいのだが、ヤヨイはそんな器用なほうではない。結果、妙な目で見られてしまつてゐるのだ。

N市は田舎だ。都会のように、変わり者を受け入れる土壌はない。ヒロキもヤヨイのよくなクラスメイトがいたら、距離を取つたかもしれない。

「わたし、言いたいこと、うまく言えなくて。だから、何か、表現できることがしたくて、ダンスの勉強してるの。メカの人には、それでお世話になつて」

だが、自分の気持ちを言葉にして必死にヒロキに伝えようとしているヤヨイに、そんな

感情は芽生えなかった。

あのとき、ヒロキをかばったヤヨイの声には、たしかな怒りがあった。ヒロキをかばおうという思いがきちんと伝わってきた。

少しばかりみつももないが、ヤヨイにかばわれたのは本当だ。それは、ヒロキが感謝するべきところだ。

「先輩もありがとうございます。助けてくれて」

ぺこっと頭を下げる。ヤヨイは息を呑んで硬直してしまった。自分から話すこともそうだが、話しかけられることも苦手のようだ。

それでも彼女は、ヒロキとコミュニケーションを図ろうとしてくれた。

「おたがいさま……」

「えっ？」

聞き取れなくて問い返すと、ヤヨイはぶいっと横を向く。そして言う。

「こ、後輩を助けるのは先輩の務めだから。当たり前だから」

なんだかよくわからないことを早口で言っつて、ヤヨイはヒロキを追い抜いて歩き出した。その背中に続く。と、ヤヨイのほうからもうひとつ、言葉が飛んできた。

「あの、名前、何？」

それは人と人が出会ったとき、最初の一步となる問いかけだった。

「ヒロキです」

「わたし、ヤヨイ。ヤヨイでいいから。これから、その、よろしく」

そこが限界だったのか、ヤヨイはどうとう走り出す。先に行くメカニックたちを追い越

し、そこで振り返ってきちんと頭を下げ、また走っていった。
その後ろ姿から、ヒロキはなぜか、目を離せずにいた。
これが、ヒロキにとって大きな転換点となる一年の、始まりのできごとだった。

ここでは本誌掲載八作のそれぞれについて解説する。
第一号である今回は、これにふさわしく「はじまり」をテーマとしていただき、また裏テーマとしての季節は「春」をお願いした。

『クローバー』 入江棗

中学三年生になった千伽は、「気難しい地主の息子」塚本楓と一緒に図書委員をすることになってしまう。しかも、千伽の家族は高速道路開通に断固反対しているのに、楓の親は賛成派の中心人物なのだ。どうにも気が重い千伽だったが、二人の関係は少しずつ縮まっ
ていき……。

揺れる思春期・中学三年生の思いを縦軸、高速道路問題を横軸に、丁寧な心情描写で綴る一作。千伽、その幼馴染の孝士、そして楓の関係がどう進展していくか（惚れた腫れたの三角関係を期待するのは私だけではないはず）、楽しみだ。

『Dear My Life』 貴水玲

母一人、子一人で生きてきた花は、母親に促される形で彼女の母校に入学することになった。「お嬢様学校」という世界になかなかなじめない花だったが、そうこうしているうちに自身も知らない秘密から事件が起きる。

この作品を一言で言えば「ザ・少女小説」。お嬢様学校、ライバル、出生の秘密、旧家、そして運命の出会い——これらのキーワードに心を刺激されたあなたは、間違いなく読むべきだ。後悔はさせない。

『From・N』 番棚葵

田舎にうんざりしていつか出て行ってやろうと考える隆也と、こんな田舎だからこそ名物を作ってやろうと考える幼馴染の来夢。ハイテンションで行動力あふれる来夢に引きずられる形で、隆也は「町おこし」騒動に巻き込まれる——というのが、基本的なストーリー。地方都市という設定を活かしつつ、ライトノベル的なドタバタや甘酸っぱい青春要素も詰め込んで、ニヤニヤしながら読める。

『やろうぜ!』 土本強

高校一年生の中村と田尻、副担任の横井。けして非凡ではない三人の背中を押し、猛烈に走り出させたのは、「ゲーム作り」という目的だった……。

シンプルなタイトルがぴったりあった、とにかく「やろう!」という気持ちの伝わってくる作品。ゲーム作りや同人活動の知識がふんだんに取り入れられているだけでなく、細かかったりさりげなかったりする小ネタがいろいろと入っているのも楽しい。

『響け、私たちの歌声』 広野未沙

望まずしてお嬢様学校に入ってしまった有香をクラスメイトのひかりが誘ったのは、人数もぎりぎりの合唱部。部活に楽しさを感じながらも、自分の居場所がないことに悩む彼女が選んだ道は……?

誰もが、自分の望みどおりの場所にいられるわけではない。むしろ、「ここにいたくない」

というのは、青春的にもっとも大事なテーマのひとつではないだろうか。この物語が居場所のない少女である有香にどんな結末を用意するのか、見届けてほしい。

『平行線シンдрーム』 水島朱音

春は出会いの季節だけれど、同時に別れの季節でもある。中学校を卒業した日、葉月に訪れた気になる相手・日向との別れは、彼女が一年を掛けて関わることになるひとつの事件の始まりだった。

第一回は完全にプロローグで、非常に解説の書きにくい作品である、といわざるを得ない。何を書いてもネタバレになつてしまう。しかし、それは逆に言えば青春ミステリーとして最高の滑り出しだ、ということでもある。葉月の物語がどんな決着を迎えるのか、ドキドキしながら追いかけてほしい。

『あたりまえのこと。』 水面浮月

親の命令で東京からN市の高校に入ることになった惣一。オタク趣味を満足させることの出来ない田舎に鬱屈した思いを感じる惣一だったが、次々と訪れる出会いの中でその気持ちにも変化が……。

都会から見ると、田舎は不便なところかもしれない。けれど、本当に不便に感じている原因はなんだろうか？ 実は、もっとあたりまえのところに問題があるのでは？ そんな「あたりまえのこと」に目を向ける作品。

『ターニング・ポイント』 諸星崇

平凡な少年、ヒロキ。高校に入学したが特に大きな感慨もなく、むしろシヨッピングモーターでの「メカニック」の仕事のほうが楽しい。そんな彼の「ターニングポイント」になったのは、とある出会いで――。

実のところ、青春はそんなにドラマチックなものではない。特に現代の若者たちにとってはそうだ。でも、意外とドラマチックな出来事、ターニング・ポイントはそんな生活の中にあるのかもしれない。この作品には、そんなことを考えさせられた。

2010年12月21日 発行

著 者 入江隼／貴水玲／土本強／番棚葵／広野美沙／水島朱音／水面浮月
／諸星崇

企画・監修 榎本秋

発 行 所 株式会社榎本事務所
〒179-0076
東京都練馬区土支田1-29-12 ファミール光が丘102
電話 03-6750-6341

表 紙 ヒトエ（AMG 出版工房）

イ ラ ス ト 橘ぼん、新月竜、伊藤由希、ヒトエ、U35、うらら、正午あきら
（すべて AMG 出版工房）

協 力 三浦奈緒、脇功一
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンの配布、複製は不許可とする。